

となる場合、概念が之れと對抗して、勝利を得んこと甚だ難し。學者の有する概念は、其明確なることに於て到底、田夫野人の遠く及ぶ所に非ず。されど、「儒者の園小人の草茂りけり」の諺は、古今を通じて、免れざるに非ずや。尤、王陽明の智行合一論は、ソクラテスと幾分相異なるものあり。ソクラテスは、非常に概念を重んじたるが、王陽明は寧ろ、行を重んじたり。則ち陽明にすれば、行に迄現はれざる知、實踐躬行したることなき知は、眞智に非ずと觀る。忠孝の概念を有するも、忠孝の實行なきものは、忠孝の知なしと觀るなり。忠孝の知は、忠孝を實踐躬行したるもの即ち、忠孝を體驗したるものに非ざれば、之れを有すと云ふ可からずと爲す。かくては、陽明の知と行とは異名同物にして、合一を云々するは可笑しきやうなり。然しながら、普通に之れを云へば、智識は、行爲に必要なりとは云ふもの、行爲に最も缺く可からざるものは、情意なり。情意を伴はざる智識は、實行とはなり得ざるなり。單なる智識、概念のみにては、全意識界を支配すること能はず。隨

て、行爲となりて現はるゝ能はず。智識は本來、正邪善惡の判別をなす作用にして之れを行爲にまで延長するには、相當の情意を、之れに伴はしめざる可からず。然るを、教授のみに偏して、情意の陶冶を怠り居ればこそ、現今の教育は、其程度高くなる程、實踐伴はず、徒らに、概念遊戯に墮し終れるなり。尙、場合に依りては、情意先きとなり、分別後となることあり。我々の習慣や傳統に依りて、行爲する場合の如き、其一例なり。

一、校風 人間は誰しも、境遇の影響を免れざるものなり。特に、年齢未だ若く内に確固たる信念の成立し居らざる間は、周囲の影響を蒙ること多きは、云ふ迄もなし。朱に交れば赤くなる。

兒童の境遇は、之れを分てば、家庭、學校及社會となる。社會は、教育者と提携すること困難なりと雖も、家庭と學校とは、是非に提携せざる可からず。其は兎も角、學校には、誰れが、何時作りしとも知らず、校風なるものあり。校舎、機械、

器具の設備、運動場、庭園の設定などの、宜しきを得ると、然らざるとは、被教育者に對し、自然の感化を及ぼす所の校風の、物質的要素と見る可し。されど、校長を初め、教職員並に生徒全體が、意識的、無意識的に、行動することが、何時とほなしに動となり、反動となりて、校風を作る。其校風は、次ぎ／＼に入學し來る新入生を包圍して、また、何時とほなしに、感化を蒙らしむ。されば、校風の良否、健否は訓育に、至大の關係あり。昔は武士と云ふもの、社會上、特別の雰圍氣中に置かれて、同じ日本人にてありながら、格別の人格が養成せられたり。校風の教育上に大切なるは、之れに依つて、推知するを得べし。雰圍氣の影響、校風の感化は判断又は推理の結果に來るものにあらず、分別以上の作用なる所に、教育上、貴重なる價値を有するなり。

一、**習慣の養成** 我々の日常生活の實際を見れば、殆んど、人間は習慣と、觀念聯合の結塊ならずやと思はるゝ程なり。何人も、朝、寢床を出で、終日、云爲行

動せる跡を見れば、思、半に過ぐるものあらん。されば、良習慣を養成することは教育上最も必要の事なり。

習慣の養成法に關し、ペインは二大法則を示せり。第一は、其初めに當て、鞏固なる決心を爲すことなり。第二は、例外を許さざることなり。ゼームスは、之れに第三の法則として、機會を逸すること勿れと云ふを加へたり。尙、ゼームスは以上の法則より、第四の法則を演釋せり。曰く、生徒に對して餘りに多く説教す可からず。抽象的の善き話を、過度に爲す可からず。實際上に必要な實踐躬行を省きて、單に抽象的に考へ又、日に僅かづゝ拂ふ可き税金の支出を惜しむやうにては、吾人の高尚なる能力は、開花結實せずして終るものなり。吾人は、系統的に英雄たらざる可からず。

最初十の努力を要せることも、慣るゝに従ひ、五となり、三となり、最後には、無意識的に實行し得るに至ること多し。習慣は、實に、心身の經濟法なり。之れあ

るが爲めに、吾人は、次々に、新なる方面を、開拓し行ふを得るなり。勿論、世路は艱難多し。Alps upon alps なり。如何に、良習慣養はれ居たればとて、大事に際會しては、習慣のみに依て、解決を爲し得るものに非ず。主義、信念の大切なるは是れが爲めなり。主義、信念の養成は、要するに、事上鍛鍊を積むの外なし。吾人の情意的方面を、一步一步と、価値多き内容に進め、日に新にして、日にまた新に、體驗し、努力するの外なし。換言すれば、所詮、人格の陶冶は、自己修養の外なし。教育は唯、其導きなり、準備なりを與ふるに過ぎず。

一、教師 所詮、訓育の事たる、教師の人格を中心として行はるゝものなり。智識技能は、傳授し得る性質のものなれども、情意の陶冶は、感化に依る外なし。教授は、教師の學力豊富にして、教授法の研究を積み居れば、満足に行はるゝも、訓育は、直接的感化を主とする外なし。こゝに、教師の人格の重要性あり。特に、小學校兒童の如きは、頗る感染性に富める時代なれば、教師の良否は、其影響の大な

る、云ふ迄もなし。又、學科目の中にも、作業的學科は、訓育上の價值、甚だ大なるものなるが、中等學校以上に於ても、作業科の教員は、生徒に及ぼす影響、格別に多大なり。則ち、作業科にては、其必要上、個別的に、教師と生徒と接近せざる可からず。隨て、教師の情意的方面は、直接に、生徒に接觸せざる可からず。それが爲め、教師の情意的方面の價值、高ければ高きだけ、暗示其他の作用に依て、生徒に及ぼす影響、強大なり。又、教師の側より云ふも、個別的に接觸する爲めに生徒の特性を直感するを得て、教育の方法も、適切に按配することを得べし。

## 第四章 現今の新教育説

第一章より第三章迄に於て、余は、普通教育學に於ける諸問題を説述したるが、此は大體、一般的に、採用せられ居る教育法なるが、此外に、新學説として、世

に傳へらるゝもの少なからず。其幾分は、便宜上、前に述べたるものあり。今こゝに其他の新説中、最も重なるものに付て、其要領を述べて、参考に資す。

### 第一節 作業教育説

作業教育説は、從來の智識偏重教育に對する、一大反動教育説なり。其主唱者多し。雖ども、ケルシエンシュタイナーを以て、第一人者となす可し。

ケルシエンシュタイナーは、千八百五十四年、ミュンヘン市に生る。師範學校を卒業して教師となり、後、ミュンヘン大學に入る。千八百八十一年、數學教員の國家試験に合格して、教員生活に入り、千九百十八年には遂に、ミュンヘン大學の名譽教授となり、同時に、スプロンガーの後任として、ライプツヒ大學の教育學正教授となれり。教育に關する著作甚だ多し。

國家は、個人をして、國家の目的を理解せしめ、それに依て、個人業績能力を、

發達せしめざる可からず。かく、職業的堪能ある者を教育することこそ、公民教育の必須條件なり。此目的を達せんが爲めには、第一には、作業に興味を有し、作業に堪能ならしむると同時に、誠實、克己、勤勉等の諸徳を養成し、第二には、凡ての人特に、祖國の人々の利益關聯の見識及責任感を必要となす。

公民教育を目的とし、之れを達する手段としての學校を、作業學校と爲す。作業學校としての第一の要求は、何等かの職業に堪能なるものを養成すること。第二には、其職業的堪能を以て、國家社會に貢獻すること。第三には、道德的智識的稟賦の發展を計ること是れなり。此三要求は固より、不可分的關係を有するものなるは云ふ迄もなければ先づ、第一に付て考ふれば、手工は、正しき藝術の基礎たるのみならず、同時に、正しき科學の基礎なり。小供の二歳より十四歳迄は、手工的活動の本能、衝動強きものなれば、各學校は必ず、工場室、實驗室、學校園、割烹室、裁縫室を具備せざる可からず。第二第三の要求の爲めには、學校の仕事の組織を、

作業團體の精神に依て組織するより外、他の方法あるなし。

作業とは何ぞ。第一に、其は經濟的には、財を生産することなり。第二に、通俗的の意味にては仕事なり、活動なり。第三に、物理的には、作業材料の變化なり。其根本的共通點は活動なり。

作業學校は、人格陶冶を中心とする學校組織にして、智識の材料を極小にし、技能的堪能及作業的興味を極大にすることによつて、公民の情操を養成せんとするものなり。

多くの兒童の態度は、理論的態度にも非ず。さりとして美的態度にも非ずして、實際的態度なり。人類の文化の、實際的態度より始まりしと同じく、個人も亦、此態度より出發す。唯或る少數のものゝみ、思索的態度を、早くより有す。吾人若し、兒童の自己價值感を發達せしめんと欲せば、此多數兒童に存する、心的傾向を眼中に置かざる可からず。何とならば、本務觀念の根本的豫想は、自己價值感の教育即

ち、自重心の教育に外ならざればなり。此の自重自學の念は、行動に於て得らる。行動には成就の喜びあればなり。

家庭は、人間の入り込む、最初の作業團體なり。されど、兒童は早くより學校生活に進むものなれば、學校に於ける共同教育大に必要なり。然るに、今日の學校は少しも、作業團體的に、組織され居らず。今日の學校は、系統的に、兒童の個人的作業を、學友若くは學校全體の爲めに建立し居らず。言語、書籍若はノートのみを教育にして、共同の目的を達する爲めに、兒童を統一する活動無きが爲めに、個人の利己心を成長せしむるのみなり。こゝに學校をば個人的名譽慾の場所より、社會的貢獻の場所に變化し、理論的、智識的偏頗より、實際的、人間的多様に變化し、智識收得の場所より、正しき使用の場所に、改良することは、凡ての學校制度の、根本的改革なり。

此の如き變化は、單に、公民教育の本領を發揮するのみならず、公民を超越して

人間の本质をも、眼中に置けるなり。眞の世界公民に迄の道は、常に、眞の國家的公民にも導く。何とならば、眞の世界公民は、世界漫遊者にもあらず、美的宇宙主義者にもあらず、書物上の國際主義狂信者にもあらずして、必ずや、人類の幸福の爲めの奉仕者、促進者たらざる可からざるが故なり。公民の本務を閑却して、人類に盡さんとする人の如きは、婦人解放運動の爲めに、小供と家庭とを無視する主婦と、毫も相異なることなし。

教育者は、特殊の職業なり。隨て、特殊の心的條件を必要となす。第一は、個性の構成に對する、至純なる愛情を有することなり。第二は、此愛情を最も有功なる方法に於て、成し遂ぐる所の堪能あること。第三に、成長する人間、人格の萌芽に自己を向くる特有の性質。第四に發達の影響の繼續的確定性是れなり。右の中、第三は云はば人格の診断なり、此診断法を教ふることは、教員養成所の最も大切なる任務なり。又第四の爲めには、判断力、意志力、敏感性、情意の徹底を要す。

## 第二節 モンテソリの教育説

マリア・モンテソリは、エレン・ケイと共に、近代女流教育學者として、最も有名なる人物なり。女史は千八百七十年、伊國に生れ、千八百九十五年、ローマ醫科大學を卒業し、大學院に入りて、醫學博士の學位を得たり。千八百九十七年の頃より自痴教育の研究に志し、其必要上、ローマ大學哲學科に於て、心理學及教育學を研究し、千九百七年一月六日に羅馬に、第一の兒童の家を開き、同年四月七日に、同じく市中に第二の兒童の家を開き、翌年十月十八日にミラノに造られ、次第に其數を増せり。是れ、女史の教育法が、大に世人の注目を引ききたればなり。爾來、歐洲各國は云ふに及ばず、世界各國に、女史の教育法を崇敬せるもの輩出し、特に、米國に於て最も盛んなり。著書多し。女史想へらく、教育の目的は、有機的諸能力の發展にあり。兒童の生活を見れば、徹頭徹尾活動なり。固より、此活動を重んぜざ

る教育者なしと雖ども、然し、兒童の自己活動と、諸能力のそれらの發展とを、強く積極的に主張し、且つ之れを徹底的に實行せんとするもの、是れ即ち、女史の所謂、自働教育法なり。兒童の家は、初め、貧民の子弟を收容したるに拘はらず、彼等の生活は、頗る活氣に富み、良成績を挙げたり。

女史の説に依れば、智的發達は、畢竟、感覺過程と、運動過程との結合に外ならざれば、此兩過程の結合的練習を、十分に爲さしむることに依りて其目的を達するを得べしと。こゝに、女史は感覺及運動の練習に、絶大の價値を置けり。女史は、感覺を詳細に分類し、其各々に適當する練習器具を工夫し、然かも、それ等は何れも單獨に先づ練習せしむるなり。即ち、大小、形狀、重量、色彩、硬軟、粗密、遠近、數量其他凡ての性質に對して、一切の感覺機關を練習せしめ、又手指の運動を十分に練習せしむるは云ふ迄もなく、唇、舌、齒なども練習せしむるなり。

女史は此の如く、感覺と運動との基本練習に、絶大の價値を置くものから、遊戯

と作業との間に、差別を置く必要なことなす。遊戯に於てなさるゝ、感覺、運動を善導すれば、それは好乎の基本練習となるものなれば、其れはやがて、自ら課業に迄進め得るものなり。されば、一面より云へば、課業も早くより始め得るものなれば、必ずしも、幼稚園に、課業を課す可からずと云ふ必要なし。現に兒童の家にては、四歳の幼兒が、書き方、読み方の練習を爲し居るなり。勿論幼兒は、独自の學習を爲さしむるものにて、律動體操の外は、概して集合課業を排斥す。それよりも却て屢々默課を用ふ。此は默戯より入り、時としては兒童をして自ら努めて、其活動を制御せしめ、全然不動の姿勢をとらしむることもあり。此の如き方法を通じて、兒童は集合的、社會的となるものと見る。

教育の成否は、主として、教育者に關かる。兒童と云ふ寶を、其親より預り、其を一人前のものとして、社會に送り出すと云ふことは、極めて貴き重大なる仕事なり。此兒童尊重の觀念は、女史の最も強調せる所にして、其爲めに女史は、教師と

云ふ語の代りに、指導者と云ふ語を用ふ。そして、正しき光を投げつゝ進み行くことが、指導者の任務なりと女史は云へり。而して指導者に最も必要なることは、児童を観察して能く其個性を正視し、個性に應じて指導を爲すことなり。

女史の児童の家は、幼稚園などは大に相異なるものあり。幼稚園の内容は、恩物と遊戯とに限られ、其遊戯も皆、共同的に行はるゝものなるが、児童の家にては、多種多様の遊具を備ふるのみならず、臺所、洗濯所、菜園、飼育所など、あらゆる設備を整へて、生活の練習が、其日其日の課業なり。しかもそれは大概、児童各々獨自に行ふなり。

幼児教育の中心となるものは遊戯なるが、モンテソリ女史は、之れに付て、フレールと其見解を異にす。フレールは遊戯は自然と文化との全體の映寫され居るものにして、児童の全精神の要求が、之れに現はるゝものと見たり。此は児童をば精神内容の全一としての文化に迄、導き入るゝと云ふ、嚴肅なる概念に、萌せるも

のにて文化的、哲學的の意義は、十分捕へ居れるも、遊戯の心理的、生理的方面を閑却せるが如し。女史は、此點を特に高調し、遊戯に、生活實演の意義を吹き込み児童の家をば、社會の實際生活に近きものにまで、組織したるなり。唯女史が、遊戯に於ける想像の作用を茫視したるは一の缺點なり。

### 第三節 プロジェクト・メソッド

プロジェクトとは計畫、構案の義にて、米國に發して、米國に盛んなる教育法なり。キル・パトリックを代表者と見る可し。此教育法は人本主義と、行動主義との合流に依りて、生れたるものと見るべし。キル・パトリックは、プロジェクトに於ては確乎たる目的を自覺して、行動すると云ふことが、大切にして全我を傾注するとか一心不亂になるとか云ふことが、其要諦なりと云へり。プロジェクトは、教材を、一つの計畫又は構案の形式に於て提供し、生徒をして、自ら考案を立て、實演をな



さしむることによりて、其を解決せしめんとするなり。而して、プラノムは其著教育に於けるプロジェクト法と題するものに於てプロジェクトを、三類、七種に分ちたり。第一類は、手技活動のプロジェクトにして、筋肉及器械を使用して、一定の結果を生せしむるものなり。而してこれには、行爲を學び、熟練を得しむるものと問題解決の途を學ばしむるものと、複雑なる位置、境遇に、順應處理する途を知らしむるものとの、三種あり。第二類は、精神的活動のプロジェクトにして、手技活動を含まざるものなり。これには報告的のもの、問題的のもの二種あり。第三類は、情操的プロジェクトにして、審美的鑑賞又は、藝術に對する態度に關するものなり。これにも、調和的のもの、破調的のもの、智的のものとの三種ありと。

次にはプロジェクトの實際の取扱法なるが、プラノムは、教授段階として、次の四段を擧げたり。

第一段は、豫備にして、此は、問題の提起せらる可き諸要素として、材料を考察することなり。多くの場合に於ては、前に取扱はれたる問題の解決が、やがて、次の問題の提起に移り行くなり。蓋、プロジェクト・メソッドにては、總ての學習を問題の連続と見るものなればなり。

第二段は、問題の提示にして、成る可くは、兒童の自己活動に訴えて、彼等自ら之れを提起するやう、仕向くるを理想とす。何れにしても兒童が、熱心に、之れを解決せんとするやう、仕向くることが肝要なり。

第三段は、材料の獲得及、解釋なり。則ち、あらゆる方面に資料を求めて、其中より、適當の材料を集めざる可からず。

第四段は、問題の解決にして、前段に集めたる材料の整理を主とす。複合問題の場合などに於ては、各々の兒童をして、一部分づゝを擔當して、纏めしむることもあり。

想ふに、プロジェクト・メソッドは、児童の生活それ自身より出發して、其解決に進むものなるが故に、児童と環境との間に、一層、切實なる交渉の、打開さるゝのみならず、児童自ら構案し、自ら實演し、自ら解決するものなるが故に、學習は自然に生き／＼とし、自我が、能動的に働きて、經驗が、如實に活現せらる。これ此法の長所なり。

#### 第四節 ダルトン・プラン

ダルトン・プランも、プロジェクト・メソッドと同じく、米國のヘレン・パークスト女史によりて、案出せられたるものなり。其最初の試みが、マサッチュセツツ洲のダルトン町に於てなされたる故、此名あり。されど、此案は、米國よりは、英國に於て榮えたり。尤、パークスト女史自らは、ニューヨークにて児童大學校を主宰して、此案を採用し居れり。

女史は、十數年の普通教育の經驗を積みたる後、伊國に行き、モンテソリ女史の指導を受け、後また、パークの自働教育説にも親炙し、其を融合して、遂に自案を立てたるなり。

女史は、學校を、簡單に且、經濟的に建て直して、児童並に教師の働きを、一層有功ならしむるを目的とし、學校をば、児童自らが實驗者なる、社會的實驗室たらしめ、社會事情が、生活それ自らに於て、行はるゝと同様に、行はるゝ場所たらしめんとするにあり。之れが原理として、其處に、自由と共働あり。此原理に基き、小學校四學年以上の者に對して、實驗室にて、自學、自習せしむることを骨子となす。女史の實驗室と云ふは、科學的の實驗室には非ずして、教科目相應に設備せられたる、學習室を云ふ。從來の教師が、教授すると云ふことに關する一切の組織を改めて、児童が學習すると云ふことに關する、總ての設備を整ふることを、理想とするなり。具體的に云へば、先づ、學校の定むる日課表を廢し又、學級と云ふ統一

を解體するなり。しかして次に、積極的には、教師は、指導案を立て、之れを揭示す。此は、兒童自ら學習す可き事項の配當案にして、教授細目に代はるものなり。指導案には、各科目に付て、上級生は、毎月、下級生は、毎週を單位として、題目要項、各項目の首要點、參考書類、物品、自己整理の條項及び、共同學習に訴ふ可き問題等が掲げらるゝなり。而して、其立案は、教師と生徒との間に於ける、課業の契約に基くものなるが、此案の立て方こそ、教師の最も熟達を要する處なり。教師は、指導案を立つる外に、毎月一回、指導教授をなす規定なるが、其以外は、生徒をして、任意に日課を定めしむ。生徒は、各自、生徒用カードを有して、毎日の學習の進度を記入す。教師は常に之れを檢閲す。

### 第五節 動的教育説

此動的教育説も、米國に先づ唱へられしものにして、其主唱者は、加州々立師範大

學長たりし、フレデリック・パークなり。

パーク想へらく、船舶の進化は、外的風力を利用したる帆前船より、内的蒸汽力によつて動く、汽船にまで、進みたる如く、教育も亦、外部的刺戟に依頼したる、舊情態を蟬脱して、個体の、内部勢力に基くものとならざる可からず。否、獨り教育のみならず、凡ての文化の發達は、此原則に順ふ可きものなり。されば、教育は自然の供給せる動力を基礎とし、個人の動機、自己の創造を培養することによつて自ら考慮し、自ら治め、自ら責任を負ふ所の人物を、養成せざる可からず。然るに從來の教育は、人間の先天的に供へたる、本能的動力を無視し、却て、人爲的徑路を、被教育者の神経系統上に、印刻せんとしたり。誤れりと云ふ可し。且從來の教育は、記憶に訴ふる所、非常に多きも、文學、美術、發明、發見など其何れの方面に於ても、インスピレーションとも云ふ可き力は、決して、記憶に依て現はるゝものに非ずして、唯、動的勢力に依てのみ、喚發さるゝなりと。

パークの動的教育説は、次の四點を主張となす。

第一、教育は、被教育者の内部に漲る、動的勢力に、訴ふるものならざる可からず。何とならば、強き動力を發起する刺戟は、本能的に、打ち建てらるゝ、目的企劃なればなり。

第二、目的企劃の建立は、兒童の、先天的に稟有する勢力の溝渠を、一般文化の水路にまで、轉轍するにあり。

第三、教育は、個別的ならざる可からず。從來の學級主義の弊は、故意に、機械的に、足並を揃へんとするの點にあり。パークの調査に依れば、例へば、算術は、半ヶ年に九十五時間配當され居るに、五十六人の學級兒童中、成績優良のものは、僅に十九時間にして、之れを學習し了るに拘はらず、成績最も不良のものは、百二十九時間を要せり。他の兒童は、此懸隔の間を上下せり。此の如き差異あるものを無理に、足並を揃へんとする所に、學級教授の弊を見る。

第四、記憶にのみ訴ふる教育法を、一掃せざる可からず。之れを事實に徴するに社會上、道徳上、將、實業上の何れの方面に見るも全然、記憶のみによりて役立つ場合は、極めて稀れなり。

右に列擧せる四點の中、實際問題として、パークの強く主張せる所は、個別教授なるが、其れが、從來の學級本位の教授と、特に、相異なる點は、

第一、教科書を用ふる外、それと連絡の十分なる、自學自習の參考書を、使用せしむる点。

第二、特に、口頭發表の課業を、十分に設けること。其れは、決して、暗誦、朗讀の類に非ずして、談話、鬪論、劇的發表等、眞の口頭發表の機會を、多くすることなり。

第三、進級は、各教科目毎に、何時にても、其兒童の成績によりて、之れを認むる点。

以上に於て、パークの主張の要領を述べたるが、此主張に一步を進めて、之れを實際に用ひたるものは、ウヰンネツカ組織にして、ウヰンネツカは、シカゴ市の郊外の町にして、此町の督學者、ワツシユバーンに依て、實行せられたるものなり。

### 第六節 ゲーリー・システム

ゲーリーは、ミシガン湖に演ずる、人口三萬の町なるが、其初めは、全くの寒村なりしものが、工業地として、俄に、發展したるなり。此町の教育組織は、デュールの弟子、ウヰリアム・ワートが、其師の意見たる、學校を以て、特殊化せられたる社會と、見る説を、實現したるなり。其組織の重なる點は、

第一、學校の設備及教授を、専門的になしたること。そして、時間割を巧みにして、凡ての教室を、出來得る限り、多くの時間使用す。即ち、二重學校的に組織す。

第二、兒童は、普通教科の終りたる後も、學校にありて、一定の監督の下に、實際生活に必要な事柄は、云ふ迄もなく、苟も、利益あり、趣味ある、一切の事柄を見學し、作爲し得るやう、組織されたること。

第三、以上の目的を達するに足る、各種の設備を、十分に整へたること。校内には、兒童の爲めにする工場あり、農園あり、賣店あり、特に運動場は、理想的に設備せられたり。

ゲーリー・システムは、ゲーリー市内、九箇の學校に實施し、一時、世界の名物學校となりしも、經濟上其他の事情に依り、後には、振はなくなれり。されど、學校の設備を完全にして、之れを、出來得る限り、能率的に、利用せんとする趣旨は、其後プラトウン・プラン(分隊的考案)として、先づ、ミシガン州のカラマンゾウ市の、一小學校に試みられ、好成绩を得たる故、遂には、人口六十萬を有する、ミシガン湖畔のデトロイト市、六十の小學校に採用せらる。

プラトウン・プランは、ハートウエルが、ゲリー組織を視察し、其長所の、校舍及諸設備の能率的利用と、教育の社會化にあるを看破し、之れに、學級擔任に、教科目擔任を加味することに依りて、ゲリー・システムの短所を補ふて、組織せるものなり。

又ゲリー、・システムは、餘りに、兒童を早くより、専門的職業的に指導し過ぎたるの弊あるも、然かも、職業指導の必要なりとの説は、近來、各國ともに、甚だ盛んにして、中にも、米國のバーススは、此點に付て、大なる功勞者なり。バーススは、求職者の性質、能力等、あらゆる方面を調査して、彼等に、適當なる業務を發見せしむることに、畢生の研究を遂げたる人にして、ポストン職業局は、實に、彼の力に依て、千九百八年に起りしものなり。今や、米國に於ては、百數十の都市の、公立學校に、職業指導の機關を設置し、大學にても、職業指導の講座を有するもの少なからず。

## 第七節 藝術教育説

藝術教育説は、科學萬能主義、理智主義の教育に對する、反動として起れるものと云ふ可し。此教育説の根源は、ラスキンの思想に存す。ラスキン曰く、趣味を涵養することは、品性を養成する所以なりと。ラスキン想へらく、近世、工業發展して、富の増加せること、多大なるものあるも、然し、富によりては、人間の純眞なる満足は、得らる可くもあらず。却て、物質的奢侈徒らに募りて、人間は、益々我利的となる。然り、美術とても、純眞のものに非ざる時は、是亦、奢侈放縱の風を養ふに過ぎず。眞の美術は、決して、贅澤物に非ず。又眞の工藝は、自然の美と、人工の美との、結合點にあり。

ラスキンはまた、美と徳との合致す可きを信じ、美感は、固より、肉的にも非ず物的にも非ず、美感が人心に、眞實且切實になる爲めには、人間の徳性が純潔、公

正、潤達の要件に、合せざる可からず。眞の藝術は、常に、道德のみならず、國民の歴史、信仰、風俗、習慣をも、淨化するの力あり。されば藝術は、道德上、智識上、民族上將た、社會上の理想を、表明する所以の道具なり。かゝれば、藝術教育は、美術家を養成する爲めにのみ、施さる可きに非ず。又決して、ブルジョアの、消閑の具に、供せんが爲めに非ず。人生に必要な美的創作、美的鑑賞の素地を、與へんとする爲めに外ならず。

ラスキンの所信を、獨逸の教育界に、鼓吹したる者は、リヒトワルクなり。リヒトワルクは、ハンプブルグの美術館長として、一生、藝術教育の普及發達に、力を致せり。

藝術教育は、三方面あり。第一は、造形藝術の方面にして、圖書、手工、手藝を主とす。第二は、媒介藝術にして即ち、文藝なり。學校にては、詩歌、文章、修辭朗讀等を主とす。第三は、音樂藝術並に、體育藝術にして、學校に於ては、唱歌、

器樂、遊戲、体操、競技等を主とす。

以上の各種藝術が、今日の教育界に於て、實際上、輕んぜられ居るは、眞の教育上より論じて、甚だ、遺憾なり。宜しく、此等藝術の教育を、十分に施して、教育の根本目的を、達するに努む可しと云ふが、藝術教育論者の主張なり。

### 第八節 社會教科運動

近來、學校教育のみ、如何に盛んなればとて、社會國家の、健全なる發達は、期せられざること、次第に明瞭となり、こゝに、社會教化の必要が、大に叫ばるゝに至りしなり。ナトルツプは、家庭教育の特性は、父母の、自然的なる愛護、感化にあり。學校教育の特性は、一定の規準に依る、統整的指導にあり。而して、社會教育の特性は、自律的人格の、自由なる發展にありとせり。尙、學校教育と、社會教育との異なる所を數ふれば、學校教育の主とする所は、基礎的原理的方面にして、

社會教育の目ざす所は、専ら、實際的、應用的方面にあり。

社會教育の主眼とする所は、其本質に於て、固より、學校教育と、相異なる譯にあらず。則ち、社會教育も、學校教育と同く、道德的志操を涵養し、公民的資格を養ふことなどは、最も主とす可き點なり。又、高尚なる趣味を養ひ、健全なる娛樂を、提舉すること、職業指導を爲すこと、體育を獎勵することなども、共通のものなれば、社會教育は、云はゞ、學校教育を、延長せるものにして、之れに、環境の差異を考慮して、施設す可き性質のものなり。今、多くの社會に於て、實際に施設せられ居る所のものを、列挙すれば、

第一、教化團體及、修養團體の組織にして、青年團、少年團、在郷軍人會、婦人會、處女會、矯風會、生活改善同盟など、其種類枚舉に遑あらずと雖ども、要するに、團體の力に依りて、事業の成遂に、便せんとするものなり。

第二、體育運動場を初めとし、趣味、娛樂に關する設備。

第三、博物館、動、植物園、水族館、理化館の設置。

第四、圖書館、巡回文庫の施設。

第五、勞働學校、實業補習學校、感化院、矯正院、託兒所、等の施設。

第六、學校を開放して、兒童のみならず、一般社會の者に、利用せしむること。

以上は、社會教化の爲めに、施設せられ居るもの、最たるものを、列挙せるに過ぎざるが、此等諸施設の、最も十分に、最も完全に、行はれ居るものは米國及佛國にして、我國の如きは、未だ、歐米各國に、及ばざること遠しと云ふ可し。



## 第四篇 支那の思想、教育

### 第一章 先秦時代概観

#### 第一節 三代

大聖孔子は、堯舜を祖述し、述べて作らず、信じて古を好むと言ふ。實に、堯、舜、禹、湯、文、武、周公は孔子の崇拜せる古聖にして、後世永く支那君子の規範たり。而して之れを史實に算するに、所謂堯舜の世なるものは、紀元前二千五百年以上の太古なるが如し。聞く、西洋文明の發祥地たる、希臘文明の曙光顯著なるに至りし時代は、紀元前僅に一千年に足らずと。以て、如何に、支那文明の、世界先

進文明なるかを想察す可し。

然り、支那には堯、舜以前既に、燧人氏ありて、民に火食を教へ、伏羲氏ありて八卦を畫して、傳統的思想に系統を與へ、神農氏ありて、農耕の道を開く。此等は或は史上の人に非ずして、神話中の人物なる可きも、黃帝に至りて、既に、形象文字の創定せられたるより察すれば、支那文明の發祥は、實に茫々四千年以上の太古にありと、云はざる可からず。されど、其れが、史上可なり明瞭に印記せらるゝに至りしは、堯、舜の世以後なり。

さて、支那民族固有の思想中、最も大切なるものは、天命の思想なり。仁、萬物を光被して而して仁とせず。徳、四時を兼ねて而して徳とせず。五蟲、知らずして而して育じ、草木、知らずして而して長ず。是れ、天の大作用なりとは、支那人の天を崇拜せる動機なり。崇拜の情の高潮するや、遂に天を人格化するに至りて、皇天と云ひ、上帝と教ゆ。キリスト教のゴッドに似たるものゝ如きも、支那人は猶太人

の如く、宗教的民族に非ざりしかば、皇天、上帝と稱しながらも、餘りに甚だしく宗教的色彩を、濃厚ならしめざりき。則ち、支那人は、天を以て或は、人間の運命を支配せるものとし或は、萬物の發生化育の本源と考ふることありしも、然かも、支那人の、天に對する觀念の、大中心とも云ふ可きは、天を以て道德の淵源となせるの思想、信念なりき。道德は、現世的、社會的のものなり。隨て、此道德を天の觀念の中心に置ける支那に、猶太、印度等に見たるが如き天國、地獄の説、肉体厭離の思想などの、發達せざりしは、當然のこと、云ふ可きか。實に、支那人は、現世的民族なるの點に於て、希臘人と、頗る、相似たるものあり。其天を口にするものは、唯、現世道德の淵源を得んが爲めなるが如し。此點、支那人の、極めて實際的民族なるを察す可し。

但、詳細に之れを觀れば、支那人の天に對する觀念は大別二様あり。一は目的觀にして、他は機械觀なり。目的觀を採るものは天に理想ありとするを以て勢、之れ

を人格的に考ふるに至る。之れに反して機械觀を採るものは、必然論となり、天の運行、人の運命は自然に流行するものにして、其間何等の目的理想あることなしと考ふ。前者は儒教の主として採る所にして、隨て支那思潮の本流をなせるもの、後者は道家の採る所なり。

さて、支那にては、人民を統治する帝位の基礎を、天命に置けるもの、如し。則ち、帝王は、天命を受け、天に代て、萬民を治むるものなり。帝王の天命を受けて天に代るものは、其帝王の道德、萬民に秀で、德望、四海に普きに因る。即ち道德は、君位の基礎なり、依據なり。堯の其位を子に譲らずして、舜に譲りしは、舜の孝徳、萬民に優るものありし爲めなり。舜も亦、其子を措て、位を禹に譲りしものは、禹の黄河治水に大功ありて、德望海内に響きしが爲めなり。

道德を以て、帝位禪讓の依據となせることは、端しなくも、支那に、革命の頻發する要因を作れり。則ち之れを積極的に云へば、帝王の帝位を擁する所以のものは

其道德、萬民に優るが爲なり。之れを消極的に云へば、若し帝王にして道德に缺くる所あらば、最早、帝位を擁する資格なしと云ふ論理となる。此論理を進むる時は革命は止むを得ざる歸結となる。此革命の前例が、後世の人々に、聖賢と數へらるゝ般の湯王と、周の武王とに依て演ぜられしことは、皮肉の感なき能はず。中にも武王と其臣、伯夷、叔齊兄弟との問答は、支那革命思想を、表現すること極めて明白なり。般の紂王、淫虐にして政を治めず、天下之れを恐れ且、怨む。當時、西伯たりし武王は、兵を率ゐて紂王を討たんとす。時に、伯夷、叔齊、武王の騎乗せる馬を叩いて諫めて曰く、臣にして其君を討つは、不義なりと。武王答へて曰く、君を立つるは民の爲めなり。今、紂王、淫虐にして政を治めず、衆怨天下に滿つ。我天に代て之れを討滅せんとす。武王は、般の湯王の、夏の桀王を討ちたる前例を踏襲せるものなり。こゝに支那革命の思想は、牢固として植ゐられたり。伯夷、叔齊は、人情を本位とせるものか、これ又、支那道德の特色を代表せるなり。されば

こそ、孔子も伯夷、叔齊は義人なりと稱揚せり。

こゝに注意す可きは、帝王の道德云々と云ふは、甚だ漠然たるものなり。其漠然たる道德の修否を標準として、帝王の位を左右するは、誠に危険千萬ならずや。果せるかな、後世之れを口實として、己れ帝位を得んとするもの續出して、遂に、支那は、革命に次ぐに革命を以てし、道德を最も尊重せる支那は却て、武力本位の國と化するに至れり。秦の天下の亂るゝや、陳勝、吳廣先づ旗を擧げて、兵を募つて云ふ、王公將相豈種あらんや、民取て以て代る可しと。是れ極めて武力主義を、露骨に表榜せるもの。後世之れに倣ふ。然り、一面より云へば、帝王の臣民に於ける德望を以て、帝王修否の程度を計りしものと見れば所謂、輿論政治となる可きものなりしが如きも、如何せん、一方帝位の依據を、天命に置きしものから、遂に代議政体を生むに至る能はざりしぞ、是非もなき。

さて、天命を畏敬せるの思想は、やがて、祭祀を重んずるの思想を生めり。泰山

は中原の名山なり。泰山に天を祭るの禮は、帝王の最大義務にして、同時に最大特權なり。泰山を最とし、天下の名山、大澤は到る所、之れを祭る。此は、一種の自然崇拜と云はれざるに非ざるも、支那の自然崇拜は、他の民族と異なり、極めて、道徳的色彩の、濃厚なりしものゝ如し。則ち、風雨、雷電、地震、洪水の如き自然現象をも、君主を初め、人民の道徳如何に依て、出沒起伏するものと考へたり。周の成王、治世久しきに亘り、懈怠の心を生ず。一年、天下大に豊熟なりしものが、風雨雷電の爲めに、稻禾悉く倒る。成王大に畏れ慎みて、政を治めしかば、一夜風倒禾の反對より起りて稻禾悉く立ち、豊年滿作を得て、萬民鼓腹擊壤して喜ぶ。如何に、支那の道徳主義の極端せるかを見よ。孔子も風雨雷電などの來る夜は、正座して謹慎せりと云へば、自然現象の出沒起伏に、道徳的意義あるものと見るの思想を傳承したるものなる可し。

名山、大澤を祭るの風はまた、祖先の祭祀を重んずるの風を發達せしめたり。極

めて道徳主義、實際主義なりし支那思想は、其發達の趨勢として、當然、家族主義を生む可かりしなり。實際主義の道徳は、人情を重んず可ければなり。支那思想が孝を以て百行の根本として、人間最大の徳と考へたるは、人情主義より進みたる道徳觀としては、必然の歸趨なり。而して此孝行第一主義を、擴張し行く所、こゝに祖先崇拜は、論理の自然と云ふ可きか。何とならば、親に孝を盡すものは、親の親にも、孝を盡す可きなり。親の親に孝を盡すものはまた、親の親の親にも孝行なる可きなり。親の親の親以上は、祖先なる可ければなり。こゝに祖先の祭祀なるものは、非常に重んぜらるゝことゝなり、こゝに、家族の血統を絶わしめざることは、戸主たるものゝ大なる義務となり、其義務を、口實に用ふるに至りて、一夫多妻の陋習を増長せり。古聖の第一位に置かるゝ堯は、娥皇、女英の二人の娘を同時に、聖人の舜に嫁す。此一夫多妻の風習は、大家族主義を生じ、一家五十人、百人、二百人の家族あるもの珍らしからず。家族彌多くして、繁累彌多く、女子の人格、全く

無視されて、支那文明の發達奇型的となる。

さて、支那文明の淵源甚だ遠きものあるは、以上に陳述せるが如し。されど、其思想の相當明瞭となれるは、堯、舜時代以後なるものゝ如し。論語の中に、堯が舜に與へし言葉として、「天の曆數、爾の躬に在り。允に、厥の中を執れ。四海困窮せば天祿永く終らん」と云へり。又舜が禹に與へたりと云ふ箴言にも、「人心惟れ危く、道心惟れ微なり。惟れ精、惟れ一、允に厥の中を執れ」とあり。中は、後世の中庸の意味なり。孔子も、中庸の徳は、それ至れるかな、民鮮きこと久しと云へり。それが遂に、孔子の孫、子思に至りて、中庸一部の書となり、哲學的に發達せるも、余は支那思想に於て、古來より中庸を重んずる所以のものは、支那思想の、實際主義なりし結果と思ふなり。希臘のアリストテレスも、中庸の徳を重んず。實際主義は、常識主義となる可く、常識的には、中庸主義は、當然採用せらる可く、適當なる徳目なる可し。

さて、舜は中庸の道を天下に行はんとして、契を以て司徒として五教を布かじめり。五教とは、父の義、母の慈、兄の友、弟の恭、子の孝を云ふなり。又夔を典樂として、四徳を教へしむ。四徳とは直にして溫、寬にして栗、剛にして虐する無し、簡にして傲る無しを指せるなり。此道、禹に至りて、更に發達して、有名なる、書經の、洪範九疇となれり。此は實に、支那古來傳來の、政治道德の原則を概括せるものなり。洪範とは、大法の義にして、其れが九個條より成れるを以て九疇と稱す。第一、五行。水、火、木、金、土を云ふ。第二、五事。貌、言、視、聽、思を云ふ。第三、八政。食、貨、祀、司空、司徒、司寇、賓、師を云ふ。第四、五紀。年、月、日、星辰、曆數を云ふ。第五、皇極。第六、三徳。正直、剛克、柔克を云ふ。第七、稽疑。卜、筮を云ふ。第八、庶徵。雨、暘、燠、寒、風、時を云ふ。第九、五福、六極。五福とは壽、富、康樂、攸好徳、孝終命を云ひ、六極とは凶短折、疾、憂、貧、惡、弱を云ふ。

洪範九疇が如何に、人事の詳細を網羅せるかを見よ。中にも、皇極を中心置きしは、大に、其意のある所を察す可し。皇極の皇は、大の義にして、極は、中を意味するもの。合はせて大中至正の義なり。其詳細に曰く、人主たるものは、常に、人倫の標準を立つ可し。父子を語る時は即ち、其の親を極めて、天下の父子たる者は、此に於て則を取る可く、夫婦を語る時は即ち、其の別を極めて、天下の夫婦たる者は、此に於て則を取る可く、兄弟を語る時は、即ち、其愛を極めて、天下の兄弟たる者は、此に於て則を取る可し。以て一事一物の接り、一言一動の發に至るまで、其義理の當然を極めざることをなくして、一毫も、過不及の差なき時は即ち是れ皇極立てるなり。庶民の行爲、大中至正の標準に合する時は、福を受け、これに違ふ時は、禍を受く。下民附和して、邪黨を立てざるは、君のこれが極となりて、これをして正を取る所あらしむればなり。禍福賞罰は必、大中至正の標準によりて行ふ可し。以て中庸思想の、實際的に、詳細を極むるを見る可し。

而して之れが實現の手段として、教育の重んぜられしは、當然の事にして、舜の時代、早く已に、國都に學校を立てしめ、之れを上庠、下庠に分つ。上庠は大學にして、下庠は小學なり。禹の時代に至りては、晉に、國都のみならず、地方にも郷學を起さしめたり。則ち、國都には東序、西序を置く。東序は大學にして、西序は小學なり。郷學は、之れを校と名く。其教科の内容は、知る由なきも、禮と樂との大に重んぜられたるは古典を讀んで、察するに餘りあり。而して此等學校の事、並に庶民の教育の事務は、司徒の官をして、之れを司らしめたり。

されど、孔子も、周は二代に監み、郁々乎として文なるかな。吾は、周に従はんと述べたるが如く、支那古代の文化は、周に至て、一先、大成せるの觀あり。之れに最も功勞ありし人物は、實に武王の弟、周公且なり。武王は、殷を亡して之れに代りしも、間もなく崩じ、太子成王僅に十三歳にして位を嗣ぎしかば、周公は、之れを輔佐攝政して、こゝに周代文化をして、燦然として光輝あらしめ、永く支那の

理想的時代を現出せり。

さて、周は封建政治を採る。則ち、中央に周室を置き、地方に諸侯を分封す。封地の大小によりて、公、侯、伯、子、男の爵を授く。周代封建の制は、渭水地帯、王畿千里の地を根據とし、當時中國の中心たりし、河南の東都附近を直轄地とし、地方の要所々々には、近親又は功臣を配置し、相呼應して天下の諸侯を統御したるものにして、其用意の周到なる、眞に驚嘆に價するものあり。天子及諸侯の臣は、卿、大夫(上大夫、下大夫)、上士、中士、下士の五等に分つ、其諸侯以下の支配の土地につきては、孟子に依れば、天子の直轄地は方千里、公侯の領地は方百里、伯は七十里、子男は五十里と云ふ。五十里に足らざるものは、天子に直屬せしめずして、諸侯に附屬せしめられたれば、之れを附庸と云へり。卿大夫の土地は、天子の卿は、地を受くること侯に準じ、大夫は伯に、上士は子男に準ず。大國侯の卿は、君祿の十分の一を受け、大夫は卿の四分の一、上士は大夫の二分の一、中士は又其二分の

一、下士はまた其二分の一を受けたりと云へば、何れも高祿を食みたるものと云ふ可し。

傳へ云ふ、夏の世、已に、三公、九卿、二十七大夫、八十一元士の制あり。般には、二相、六太、五官、六府、六工の制あり。周に至ては、天、地、春、夏、秋、冬の六官を立て、六官の屬、各六十官あり。總計三百六十官ありたりと云ふ。六官の長を云へば、天官の長を、大冢宰と云ふ。邦治を掌り、百官を總べ、四海を均しくす。地官の長を、大司徒と云ふ。邦教を掌り、五典を敷き、兆民を懐く。春官の長を、大宗伯と云ふ。邦禮を掌り、神人を治め、上下を和づるにあり。夏官の長を、大司長と云ふ。邦政を掌り、六師を統べ邦國を平かにす。秋官の長を、大司寇と云ふ。邦禁を掌り、姦慝を詰り、暴亂を刑す。冬官の長を、大司空と云ふ。邦土を掌り、四民を居き、天の時に従ひて、地利を分つ。六官の長は、凡て卿と云ひ、其下に大夫、士等を置けるは云ふ迄もなし。又、官制上には、六官の上に三公、三孤あ

り。三公は、太師、太傅、太保にして、三孤は少師、少傅、少保を云ふ。三公は、道を論じ、邦を経じ、陰陽を燮理(調和)す。三孤は、三公につぎて化を弘め、天地を寅亮して、天子を弼く。共に常置の官に非ず。人なき時は之れを置かず。今日より見れば榮譽の職なり。

周の官制は、長く支那歴代の模範となりしのみならず、其れが唐代に至りて、一層整備せられ、我國に入りて、大化の改新となれるものなり。支那の文物を視察する爲めには、周の制度は、至大の關係あれば、こゝに序に、其兵制、田制等を述べて然る後、教育制度に及ばん。

周代は、徴兵法を採用したるものにして、其徴集の方法は、六十四井、五百十二家を以て一甸とし、甸毎に戎馬四匹、兵車一乘、牛十三頭、甲士三人、歩卒七十二人と輜重、運搬等の雜卒二十五人、合計百人を徴發し、其他別に、十六井づゝより兵馬一匹、牛三頭づゝを徴發するの制なりき。故に、天子の領地、方千里として、

山川湖沼等を除くも、大凡そ六十四萬井ありて、兵車萬乘、兵百萬人を徴發し得べし。天子を萬乘の君と云ふは、之れより來る。諸侯の内、大國の方百里のものは、兵車千乘、兵十萬を出し得べければ、之れを千乘の家と稱す。

軍隊の組織に付ては、周禮には、五人を伍として伍長を置き、伍五、二十五人を兩として、司馬を置き、四兩、百人を卒として、卒長を置き、卒五、五百人を旅と稱して、旅師を置き、旅五、二千五百人を師と云ひて、師帥を置き、師五、一萬二千五百人を軍として、軍將を置く。軍將は、命卿之れに當り、師帥は、中大夫、旅帥は、下大夫、卒長は、上士、兩司馬は、中士之れに當る。天子は、六軍を置き、大國は三軍を置き、中國は二軍、小國は一軍を置く。而して一般兵は、事あれば徴集し、事終れば歸農せしめたるものにして所謂、兵農一致なりき。

次に田制及租税法なるが、支那は、古來より土地を國有とし、之れを人民に均分して耕作せしめ、貧富の懸隔を少くして、生活の安定を計りたるものゝ如し。周に



於ても、此根本方針に則り、井田法を定む。孟子は夏后氏は五十(五十畝)にして貢し、般人は七十にして助し、周人は百畝にして徹せりと云へり。此は三氏の田制及租税法を要言せるものにして、周は即ち徹法なり。徹法とは、通法の義にして、或は、一組の總てが共同耕作を行ひたるものと解し、或は、貢法と助法とを、併用の義と解す。夏の貢法とは、收穫の十分の一を貢せしむるの法にして、般の助法とは九家を一組とし、公田を助耕せしめ、其收穫を官納せしむるの法なり。周の井田法は、九百畝(日本の約四町平方)の田地を、井字形に九分し、其八分を八家に配當し一分を公田として八家に共耕せしめ、其收穫を田租として官納せしむるなり。支那にては、農民には、早くより、今日の社會主義者の主張に近きもの、實行せられんとしたるものと、見る可きか。

次に周の學制に付て述べんに、前に述べたる六官の一たる地官は、大司徒を長官として、教育の事を司る。大司徒は冠、婚、葬、祭、卿、相見の六禮を修め以て、

民性を節し、父子、兄弟、夫婦、君臣、長幼、朋友、賓客の七教を明かにし以て、民徳を興し、飲食、衣服、事爲、異別、度、量、數制の八教を齊へ、以て、淫を防ぎ、道徳を一にし以て、信を同うし、耆者を養ひ、以て、孝恤を致すに在りと。今日の文部大臣の職務の上に、内務事務の一部をも、兼ねたるものと云ふ可し。

周は、國都に大學を置き、其中央の一區を辟雍と稱し、饗宴儀式を行ふ所とす。今日の大講堂に、大食堂を併設せるものと云ふ可きか。東區の大學を、東膠又は東序と稱し、舞を教ふる所とす。西區の大學を、瞽宗又は右學と稱し、禮を教ふる所とす。南區の大學を、成均と稱し、樂を教ふる所とす。北區の大學を、上庠又は虞庠と稱し、書を教ふる所とす。専門的に分れたるを見る可し。其學生は、天子を初め公卿、大夫、元士の子弟並に、地方より選舉せられたる秀才なり。學生は豫め、師傅に就て、三徳、六行、六藝、六儀を學びたる後、大學に入るの規定なり。三徳とは、正直、剛克、柔克を云ひ、六行とは、孝、友、睦、嬭、任、恤を云ひ、六藝

とは、禮、樂、射、御、書、數を數へ、六儀とは、祭、祀、賓客、朝廷、喪紀、軍旅、車馬に關する儀式の事なり。此等は、小學の主要教科なり。此等普通の學習を終りてより、大學に入り、専門的に學習するの制なり。秀才の選抜の爲めには、夙に科擧の制あり。則ち卿の長官は、三年に一回、其官轄内より、德行に秀でたる者即ち、賢者と、六藝に通じたる者即ち能者とを選出して、之れを秀才と名け、秀才の中より更に、司徒を擧げて之れを選士と云ひ、其選士を大學に送りたり。選士の成業せるものを造士と稱し、造士の中より選抜して、進士と稱し更に、進士の才能を試験して、之れに爵祿を與へたり。此科擧の制は長く、後世に至る迄行はれ、學生の登龍門となる。大學の修業年限は、九ヶ年なりしが、其入學の年齢は明かならず。八歳にして小學に入り、十五歳にして大學に入ると云ふ、白虎通などの説當れりと云ふ可きか。孔子も吾、十有五にして學に志すと云へり。小學は、國都にも地方にもあり。地方の小學即ち郷學は、其所在地の戸數によりて、名稱を異にせるが

如し。則ち一萬二千五百家を郷と云ひ、其學校を庠と云ふ。五百家を黨と云ひ、其學校を序と云ふ。二十五家を閭と云ひ、其學校を塾と云ふ。國都の小學に入る者は太子、國士、貴族の子弟にして、其修業年限は九個年とし、其教科は書記を學び、幼儀を習ひ、簡諒を肆ひ、樂を學び、詩を誦し、勺を舞ひ、更に進んで象を舞ひ、射御を學び、三徳を行ひ、六行を力め、六藝、六儀に通せしむとあり。されど、地方の庠、序、閭、塾の如きは、幼童に教ふるに、洒掃、應對、進退の作法と、六藝の一部を以てし、人倫を明かにすることに、努めたる程度なりしなる可し。尤、諸侯の大なるものに至ては、中央政府の制度に倣ふて、其領内に、大學及小學を設立せるもの多かりき。而して諸侯設立の大學は之れを泮宮と稱したり。

若しそれ、教育の實際に至りては、今日よりも一層、根本的に遡り夙に、胎教を重んず。列女傳に曰く、古は婦人子を姪めば、寢ぬるに側せず。坐するに邊せず。立つて躡せず。邪味を食はず。割正しからざれば食はず。席正しからざれば座せ

す。目に邪色を視ず。耳に淫聲を聽かず。夜は則ち詩道正事を警誦せしむと。

エレン・ケイは、二十世紀の初めに、教育は結婚に初まると警告したるが、支那は三千年の古に於て、早く已に、胎教を説き、遺傳研究のヒントを與へたるは、其着眼の卓越驚く可し。唯、後世之れを繼續發展せしめざりしは惜みても餘りあり。尙吾人の支那古教育に就きて、大に注目す可き點は、實科を重んじ、實踐躬行的なりしことなり。之れを今日の教育の智育に偏して、机上の空論多きに比すれば、大に學ぶ可きものなからずや。

子已に生るれば、大に家庭教育に意を用ふ。子能く自ら食するに至れば、教ふるに右手を以てし、言を能くすれば、男は唯し女は愈す。六年にして、之れに教ふるに數と方名とを以てす。七歳にして、男女席を同じうせず。共に食せず。八年にして、門戸を出入し及び、席に就き飲食するには必ず長者に後れしめ始めて之れに讓ることを教へ、九年にして、之れに日を數ふることを教ふ。以て、訓練に力を用ひ

しを見る可し。固より此の如きは、上流家庭の問題なる可けれども、何處迄も、實踐的なるは可なり。

さて、一定の年齢に達すれば、小學に入り、小學を終りて大學に入る。朱子曰く人生れて八歳、即ち王公より以下庶人の子弟に至る迄、皆小學に入る。而して之れに教ふるに、洒掃、應對、進退の節、禮、樂、射、御、書、數の六藝を以てす。其十有五に及べば則ち、天子の元子、衆子より以て、公卿、大夫、元子の適子と、凡民の優秀とに至る迄、皆大學に入る。而して之れに教ふるに、究理、正心、修己、治人の道を以てす。これ亦、學校の教、大小の節の分るゝ所なりと。能く周代教育の精神を、傳ふるものと云ふ可し。

大學にては、隔年毎に考試せり。考試は、學術と道德との兩方面よりす。禮記に曰く、中年考校。一年視離經辨志。三年視經業樂群。五年視傳習親師。七年視論學取友。謂之小成。九年知類通達。強立而不反。謂之大成。夫然後足以化民易俗。近

者悦服。而遠者懷之。此大學之道也。

周代教育の目的は、已れを修め、人を治むるにありて、希臘の修飾教育を、道德本位に實行せんとしたるものと云ふ可く、其手段としては、前に擧げたる種々の科目ありしが如きも、最重んぜられしものは、禮、樂、射、御、書、數の六藝なりしもの、如し。孔子の弟子三千人、身、六藝に通ずるもの七十有餘人と云ふを見れば、周末春秋の世に至りても、六藝は、學者修養の主たる科目たりしを證す可きか。而して六藝の中、禮と樂とは主として、徳性の涵養に用ひられしなる可く、射と御とは主として、身体の鍛錬に資せられしなる可く、書と數は云ふ迄もなく、智育に資せられたるものと見る可し。此點より云へば、六藝は能く智、徳、体三育の鼎立に合致せるものなるが然し、元來が道德第一主義なりしかば、自然に禮樂を中心として、重んじたりしは明白なり。孔子が、詩に興り、禮に立ち、樂に成ると述べしは周代教育の理想を、概括せるものと見る可きか。詩は一面其内容よりすれば、博物

人事の智識を教ふるものなる可きも然し、本來純文學に屬す可きものなれば矢張り樂と同一、感情陶冶を主とするものと、云はざる可からず、果して然らば、詩、禮、樂は相依り相助けて、道德的人格陶冶を目的とせるものと云ふ可し。則ち知る、周代の教育の理想は、外形的にも、精神的にも、典麗閑雅の君子を、養成するにありたるものと云ふ可し。唯、時代の推移と共に、禮儀など餘りに繁鎖に陥り、男子活動の徒らに拘束さるゝ所多く、遂に所謂、繁文縟禮の弊のみ残れるに至りて、周の天下の衰ふるの止むを得ざるに至れるものか。周代文物の完成せる際には、禮儀三千威儀三千と云ふ、三千は大數を表示せるものなる可けれども以て、其精細を察す可く、佛國ルイ十四世時代の所謂、アマチュアのそれにも過ぎたるものと察す可し。文弱に陥るらざらんと欲するも豈、得べけんや。此に於て、廟堂に立てる政治家は、徒らに形式的の儀禮に拘束せられて、救世濟民の本職を忘れ、朝野の學者は徒らに讀書禮樂の典故を誦するに止まり、實踐躬行の古聖の教育真髓は、閑却せ

られ終んぬ。こゝに周の天下は、次第に亂れて所謂、春秋戰國の時代に入る。

## 第二節 春秋戰國時代

春秋の世とは、孔子の著作、春秋に記載せられたる間の、周末時代を指せるものにして、周の平王が犬戎の強勢に抗する能はずして、長安の都をも棄て、洛邑に東遷せるの歲即ち、紀元前七百七十年より、周の安王の末年即ち紀元前三百七十六年に至る、約四百年間を指す。又、戰國時代とは、紀元前三百七十五年、周の威烈王より、紀元前二百二十一年、秦の天下一統迄、約百五十年間を指す。

春秋の世の初めは、我神武東征に先つこと百餘年前に屬するを想ふ時、如何に、支那文明の遼遠なるかを、察するに餘りあり。春秋の世と、戰國時代とを比較するに、春秋の世には未だ、周室の餘威、形式上には殘存して、幾分、名分を重んじた

れば、たとへ、齊桓、晋文の如く、實力に於て、周室に優越せるものあるも、取つて代らんとはせず、自ら覇者を以て甘んじたりしが、戰國時代に至りては、最早、周室を顧みるものなく、名分地に落ち、實力の天下となり、布衣にして宰相、大將軍となるあり、王公、將相、豈、種あらんやの思想、露骨に實現せらる。されど、一面より觀察すれば、支那文明の百花燎爛の盛大を致せるものは、實に春秋、戰國の時代と云ふ可きものあり。元來、支那は、君位の基礎を道德に置き、王道を尊びて覇道を卑しむこと、堯、舜以來の傳統なる上に、支那の出せる最大人物たる孔子が此王道主義を、極力鼓吹せるものから、後世の史家論客は皆、之れに従ひて、一步も其範圍外に出でざらんとす。此大前提に依りて、春秋、戰國時代を評論するを以て、一も二もなく、亂離取るに足らざる時代なりとの結論に達せるも、是れ果して公平の議論なりと云ふを得べきか。

想ふに、西洋史は第十五世紀のルネサンス以後を以て、近世文明時代と稱す。二

十世紀の今日迄、約五百年なり。支那は春秋、戰國時代を通算すれば、六百年に近し。又、人間活躍の舞臺なる土地の廣さを以てすれば、支那は西洋よりも遙に廣大なり。而して、西洋近世史中に現はれたる戦争、必ずしも少しとせず。宗教改革に伴ひて起れる紛争のみならず、七年戦争あり、三十年戦争あり、百年戦争と云ふものすらあり。アルマダ艦隊、ネルソンの艦隊に破られて近世の初めに、歐洲に覇を稱せし、西班牙の勢、頓に衰へて、英國の勢力急に昇り、エリザベス女皇の長き治世、英國文明は、長足の進歩をなせしも、單に英國のみの史實を顧みるも、内治に外交に、幾多の波瀾殆んど絶え間なく、甚だしきは帝王を斷頭臺上に馘首するの事件あり。若しそれ、ナポレオンの佛國大革命に乗じて立つや、遠征、近攻殆んど寧日なく、歐洲の天地は、其馬蹄に蹴られざるなく、其間或は、合従連衡の策を立つものあり、或は、外交會盟に秘術を練るあり。所謂生きたが爲め、勝たんが爲めには、手段の善惡を問はざるものを常とす。ナポレオンのウオトルローに大敗して、

セントヘレナに英雄の末路、憫れむ可きをとどめて後も、ルイ・ナポレオンの一時大那翁の遺業を模せんとするなど、佛國を中心とせる歐洲の天地は、決して靜穩ならざりき。然り、普佛戦争に、新進の獨逸聯邦、頭角を現はし、佛國をしてパリ―城下の盟をなさしめてより以後、佛國の覇業長く衰へて、歐洲の天地は所謂、五大強國の勢を醸成して、表面上のバランスを保てるが如くなりしも、バルカン半島問題は、常に強國間の紛擾の因をなし、英露の間クリミア戦争を惹起せるの外、五強互に虎視眈々たり。遂に千九百十四年、セルヴィアの一青年の投じたる一石は、古今未曾有の世界大戦を捲き起し、近世科學の粹を悪用して、歐洲の慘毒、筆舌に盡す能はざるの結果を招く。

此の如く大觀し來つて、之れを支那春秋戰國時代に比較せんか、余は必ずしも、其大に相異なるもの無きを、斷定し得べきを信ず。

春秋の初め。諸侯の數、約百七八十、其中大國と稱す可きもの、十二三個國に過

ぎず。大國の中に、名君を出して勢力の盛んなるや、王命を籍りて、諸侯に命令するものあり。之れを覇者と稱す。齊の桓公、晋の文公、楚の莊王の如きは、名實共に覇者たりしものなり。中にも、晋、楚二國は、春秋時代を通じて、長く其勢力を保つ。爲めに、中國諸侯の多くは、晋に附かざれば、楚に歡心を送り、楚に附かざれば、晋に歡心を買ひ、天下は要するに、晋楚二國の争覇なるが如き觀を呈せり。

晋は、周の成王の弟、唐叔虞の後にして、絳に都し、山西省を本據とす。文公に至りて、能く周の内亂を定め、國勢大に盛んに所謂、中原の盟主となる。文公の後にも名君相繼ぎ、比較的長く國勢衰へざりき。而して晋の強敵楚は、郢に都し、楊子江中域の肥沃地を占領すと雖も、其の民族は多く、漢民に非ずして、言語もまた相異なりしかば、永く南蠻缺舌の國又は、荆蠻と呼ばれて、中國の漢族より、甚だしく輕蔑せられたり。されば、晋、楚の争は大体上、中國と南蠻との争と云ふ可し。

さて、春秋約四百年に、大戰として史上に有名なるものは、城濮の戰(晋の文公、晋軍を中心とし、宋、齊、秦の加盟を得て、楚の成王の將子玉の軍を破りし大戰)殺の役、(晋軍秦軍を破る)鄢陵の戰(晋の厲公楚軍を破る)等を最とす。吳越の勝敗の如きは、我信玄、謙信の争に似たるのみ。國際間の紛擾は、多くは支那人一流の外交手段に依りて、解決を計りしもの、如し。支那史に所謂、會盟なるものは、其最も代表的のものなり。葵邱の會は、齊の桓公の勢力が、クライマックスに達したる時の會盟なり。夾谷の會は、齊、魯の會盟にして、孔子、魯の指揮官たりしを以て有名なり。前者は會盟の最たるもの、後者は會盟の際、如何に支那一流の禮儀論の勢力ありしかを想見せしむるものなり。齊は大國なり、魯は其實力到底齊の比に非ず。此實力不權衡の二國の、夾谷に會せんとするや、魯の定公は、孔子を以て相の事を攝行せしむ。孔子、定公に言つて曰く、臣聞く、文事あるものは必ず武備ありと。古は諸侯の境を出づるや必ず、官を具して従ふ。請ふ左右の司馬を備へて行か

んど。定公之れを許し、齊侯と夾谷に會す。獻酬の禮終るや、齊の有司趨り進みて四方の樂を奏せんことを請ひ、旌旄劔戟を執るもの、鼓噪して進み出づ。孔丘進み出で、曰く、吾兩君の好會をなすに、何ぞ夷狄の樂を奏せん。請ふ、有司に命じて之れを罷めしめん。景公心に愧ぢて之れを去らしむ。暫くして、齊の有司奏して宮中の樂を奏せんことを請ひ、ついで優倡侏儒の徒、戯れて進み出づ。孔子また進みて曰く、匹夫にして諸侯を惑はすものは、罪誅す可し、請ふ、有司に命じて法を加へんと。遂に之れを斬らしむ。景公喜ばずして歸りて曰く、魯は君子の道を以て其君を輔くるに、汝等は、夷狄の道を以て、寡人に教ふ。齊侯ついで、侵す所の魯の地を還して、魯に謝す。見る可し、如何に、國際禮讓の、嚴格なりしものあるかを。會盟の外、種々の外交手段、極めて頻繁に行はれしもの、如く、諸侯の諸侯を訪問するを朝と云ひ、使節の至るを聘と云ふ。使節に才人を選びしは勿論にして鄭の子産、晋の叔向、吳の延陵の季子の如きは、其代表的人物と稱せられたり。

唯、春秋時代のみならず、支那歷代を通じて、西洋史に類例少き現象は、閥門治まらずして、之れが爲めに、嫡庶繼嗣の争の、常に絶わざりしことなり。而して、繼嗣の争と、内部の紛擾とは、常に黨派の軋轢を伴ひ、事ある毎に、權臣の跋扈、如何ともする能はざりき。齊に田氏あり、晋に六卿を生じ、魯に三桓の難あり。其他殆んど枚擧に遑あらず。畢竟是れ、家族主義の弊のみ受けて、女性の人格を認めず、男子荒淫の惡風の結果のみ。西洋は、羅馬の末路、女難頻りに至るものありしも其趣支那と相異なるものあり。大体、古今を通じて、一夫一婦主義の原則を守りしものから、支那史に見るが如き内訌は、甚だ稀れなり。此點を除けば、春秋の世必ずしも、亂離と云ふ可からず。否、余は支那古今を通じて、最も學術、技藝其他百般の文明の、進歩著しかりし時代と云はん。若し、其まゝ、長く之れを進展せしめんか、支那文明は、西洋文明を凌駕したるや、勿論なる可きなり。

夫れ食色の慾望は、人間慾望の最大最強のものなり。食慾の部落、種族競争の最



大因たるや、マルクス一派を待たずして、古今東西の社會史、之れを示して餘りあり。之れが統制宜しきを得るは、爲政家の最大なる任務なり。而してたとへ戀は満腹の後の問題なりと云へ、色慾の調節宜しきを得ることは、社會風教上の最も困難なる問題なり。國家社會の興亡盛衰は、常に之れに支配さるゝ場合甚だ多きは、史實の吾人に示す所なり。羅馬を亡せるものは、ゼルマン民族にも非ず、トルコ民族にも非ずして、羅馬人それ自身なりと。羅馬の末期、婦人の節操甚だ亂れ、また、昔日の面目なし。爲めに、社會の風教紊亂して、國遂に滅亡す。支那は、羅馬と其趣を異にし、女子の節操を責むること、極端に嚴なるものあると正反對に、男子の節操は毫も、責むる所なく、名を祖先の繼嗣に籍り、淫慾度なく、爲めに閨門の怨嗟常に絶わすして、之れが操縦は、難中至難とせられ、帝王に至ては、其爲めに、宦官なる不具的人物を置いて、其支配に當らしむ。家庭より引て、社會の禍根、之れより大なるものなし。此禍根に目覺めずして、徒らに、修身、齊家、治國、平天下を

説く。矛盾も甚だしからずや。大聖孔子すら唯、若き時之れを戒むる色にありと云ひ、女子と小人は近く可からずと云ひ、單に消極的態度を教ふるのみにして、禍因根絶の積極方策に出でず。積極方策とは何ぞや。女子の人格を尊重し、男子の節操を責むることなり。支那古今茫々五千年を通じ、一人の此點に付て絶叫せるものなかりしは、實に、惜みても餘りあり。日本も支那の傳統を承けしも、彼れの如く極端に至らず。平安文明爛熟の際と雖ども、今日歐米上流一部社交界と、類似の程度に過ぎざりしものゝ如し。徳川泰平無事の時代に至りて、諸候の生活には、支那の其れに倣ふものありて所謂、幾多のお家騒動なるものを出せるも、鏡山、千代萩を最とせる程度にて到底、支那の内訌とは比較にならず。白樂天の長恨歌に、後宮の佳麗三千人、三千の寵愛一身に在りと。三千人とは、白髮三千丈流の誇大と云ふ勿れ。後世賢君の模範と激賞さるゝ唐の太宗は、宮中整理の爲めに、女子一萬人を外に出すこと、前後二回に及ぶと云ふ。話半分、否、十分の一と聞きて、驚く可き

大數に非ずや。されど、年々歳々、四百餘州より、美女を貢せしむるを恒例とせる支那王室としては、決して十分の一に減するを要せざるなり。之れを御する爲めに亦、多數の宦官を必要とし、其宦官を御すること亦、至難にして、女性、宦官の兩難、因果錯綜して、歴代の興亡を左右したる、誠に無理ならぬこと、云ふ可し。否、晉に王室の興亡が左右せられしのみならず、實に支那文明の西洋文明に先つこと、一千年なるに係はらず、幾度か蹉跌して、繼續的の進歩なく、遂に今日、西洋文明に比較す可からざるに至りしもの、其大因の一は、かゝつて女性問題にありと信するなり。

夫れ、食の問題は、激烈なりと雖もなほ、部落、民族の問題なり。敵は外にあるなり。然るに、色の問題は、内敵なり。内敵なるだけ、外敵よりも、切迫せること多大なるもの多し。此根本問題を閑却して、修身、齊家を説き、治國、平天下を説く。其説く所、精を穿ち、微を究むるも、遂に空論に墮せるもの、眞に當然と云

ふ可きなり。

今一の支那文明の進展を阻害せるものあり。所謂、王道主義の空論是れなり。道徳本位の王道主義の、理想とす可きは、余も堅く之れを信す。爲政治家の最大資格は道徳的人格なる可きは、余の信じて疑はざる所なり。されど、見人説法、應病投藥が、實社會に止むなきものとすれば、余は政治と道徳とは、各特色あらしめざる可からずと想ふ。然るに、徹頭徹尾、政治を以て道徳の延長とのみ見る、支那聖賢の教は、遂に民衆統治の眞髓に觸れず。爲めに、爲政治家、官僚の施設する所は、空論に止まり形式に捕はれ、民衆の切望に添はず。其偶々富國強兵を致せるものあるは皆、聖賢傳統の頑固なる王道主義に、捕はれざりしもの、成功なり。其偶々社會文明の發展せるものは、窮屈なる道徳主義に無關心なりしもの、作爲せる結果なり。余は之れを春秋時代には、管仲に見、戰國時代には、之れを商鞅に見る。管仲は、功利主義に依て、齊の桓公を輔け、山東省嶢嶠の瘠地にも拘はらず、富國強兵の實

を擧げて、天下に覇を稱せしむ。孔子も、管仲が中國の諸侯を統一して、夷狄に當り、能く中國の文化を保護したる功績を稱揚して、「管仲無かりせば、我れ夫れ髮を被り、衽を左にせん」と云へり。管仲は、治國の要素として、三綱領を擧げ又、其を實現する政策として、三本、四固、五事を數へたり。民を富ましむること、民を教育すること、神明を尊敬することは三綱領なり。「倉廩充ちて、禮節を知り、衣食足りて、榮辱を知る」と云ふ名言は、右三綱領中の二綱領を、最も簡明に説明せるものなり。則ち管仲は先づ、民衆をして衣食の餘裕を作らしめ、然る後之れを教育するを順序となす。其教育は禮、義、廉、恥を訓育することを主とす。之れを四維と云へり。次に三本とは、政治家の資格にして、四固とは、治國の方法なり。五事とは富國策なり。想ふに、今より二千六百年の昔に於て、早く已に、政治經濟の理論と實際とを、系統的に組織實行したるは、實に非凡の人物と云ふ可く、彼は農業、牧畜を奨励したるのみならず、灌漑水利の便を圖り、植林事業を奨励し、鑛山を開

きて、銅を採掘し、海濱を利用して、鹽を煮、魚介を採取し、關市税を收むるなど其着眼の廣くして實際的なる、眞に驚く可きものあり。

商鞅は法治主義に依りて、秦の孝公を輔く。秦は穆公以來、晋の爲めに、壓迫せられて、東に伸ぶる能はず。献公初めて、晋と石門に戦ひて大捷を得、其子孝公立つに至りて、國大に興る。孝公の秦に君たりしは戰國の四十二年にして、孝公の年二十一歳、大に天下雄飛の志あり。當時河山以東強國六、淮泗の間、小國十餘あり。秦の東には、楚、魏二國境を接し、魏は、長城を築きて、鄭より洛に濱し、北に上邦の地を有し、楚は、漢中より南は巴、黔中の地を占有し、何れも秦を夷狄視して之れを卑み、中國の國際場裏より除外せらる。孝公深く之れを慨し、國勢發揚の爲めに、廣く術策を募る。商鞅の富國強兵策は、大に孝公に用ひられたり。商鞅は、管仲と共に、法家に列せらるゝと雖ども、管仲の經濟本位の功利主義なりしと異なり、峻嚴なる法律主義を採用せり。商鞅の法律主義はまた管仲の如き、理論的基礎

確實ならざりしも、古聖賢の傳統を意に介せず、理想を未來に求めて、勇往邁進せる所、大に時局に適して大功を收めたり。

商鞅は、商國の策としては、農本主義を探り、坐食の民を少くして、耕作の實人員を多くすることに努力せり。彼れは云ふ、百人の農民中、一人他の仕事をなせるものは、國は強くして王たる國なり。十人中一人の他業を爲す國は、猶強國たるを得るも、半農半居の國は即ち危じと。次に關市の税を重くして、人民の奢侈を禁じ成る可く商人の數を減じて、農民の數を増し、隣國より百姓を招致して、人口の増加を圖り、料食と兵士に、事缺かぬ用意をなす。又強兵の策としては、極端なる信賞必罰主義を採用せるもの、如し。商鞅は、國を治むるに重要なもの三ありと云ふ。法、信、權是れなり。法は君臣の共に操る所、信は君臣の共に立つ所、權は君の獨制する所なりと。此内、最も法を重んじ、明主は法制を慎み、言、法に中らざるものは聽かざるなり。行ひ、法に中らざるものは高しとせざるなり。事、法に中

らざるものは爲さざるなりと。餘りに、法を偏重して、其根柢たる徳教を無視し、民を愚にして治むるの主義を徹底し、詩、書、禮、樂、善、修、仁、廉、辯、慧の十事あれば國必ず弱じと云ひ、文學亡國論を唱へ、後世、李斯其主義を踏襲して、書を焼き、儒を坑にするの暴舉を、敢てするに至らしめたるものは、固より、贊す可からずと雖ども、實社會に處して、功驗顯著なりしものは能く、政治の要領を得たるが爲めならずばあらず。商鞅の主義實行せられて十年、秦の威令行はれざる所なく、家給人足りて山に盜賊なく、道遺ちたるを拾はず。人は公戰に勇にして私闘に怯なるに至れりと云ふ。之れを徳治主義の形式に捕はれて、國は治まらず、民は貧弱なるものに比すれば、優れること萬々ならずや。秦の遂に、六國を併せて事實上、支那史あつて以來始めて、天下を統一せるもの、法治主義の長所を證して餘りありと云ふ可し。然るに、徳治主義の傳統は、後世も長く、學者の頭腦を支配し、商鞅の傳統を改進するに力を盡すものなく、極力之れを罵嘲して快とする外な

かりしこと、是れ、支那文明の遂に進展の期なかりし、一大因なりと思ふは如何。

さて、春秋、戰國時代約六百年は、周の統制、全く弛緩廢滅して、思想界の自由大に延び、加ふるに、生存競争激烈なりしかば、天才雲の如く現はれて、各一家言を建つ。諸子百家と稱するもの、決して例の支那流の大數とも覺えず。其大なるものを分類して、儒家、道家、法家、名家、兵家、縦横家と爲す。之れを希臘文明の盛時に比較するも、優るありて劣るなし。兩者は、其現世的なることに於て相一致し、兩者共に、印度の輪廻轉生思想の如きものを有せず。唯其相異なる所は、希臘文明は、思想の範圍極めて廣く、必ずしも、實用如何を顧みず。眞理の爲めに、眞理を討究するの趣甚だ多し。希臘哲學の始祖と稱せらるゝターレスは、宇宙哲學を唱導し、彼れに次げる學者、何れも其方面に思を致し、デモクリタスに至て遂に、元子論を唱へて、近世思想と比較するも、遜色なき迄に、論理の精密を致せり。それが、ソフィスト派に至て、人事哲學に轉向し、ソクラテスは、道德論に一生を捧

げたるも、其後繼者プラトンに至ては、其思想構成の博大なること、東西其比稀れなり。プラトンの弟子、アリストテレスも亦、其研究の廣汎なること、其師に譲らず。プラトンは、形而上學を中心に、政治、社會、國家、道德を極めて自由に論辯せるものなるが、アリストテレスは寧ろ、形而下學に力を盡し所謂、百科の學を該ねて、近世科學の源泉となれり。然るに、支那は、獨り、春秋、戰國時代のみならず、今古四千年を通じて、直接にか、間接にか、凡て經世濟民に關せざるものなく、學問と云へば、道德政治の一天張り云ふも、過言に非ずして、詩文藝術すらも、道德的色彩の濃厚なるを常とす。所謂、眞理の爲めに、眞理を研究するの態度は、支那に於ては見られざるなり。道家者流の如きは、其思想如何にも自由なるが如きも、究極する所、處世哲學の範圍を出でず。此點より見て、余は、支那に純正哲學なく、純粹文藝なしと云ふも、過言に非ずと信ず。されど、諸子百家と稱せらるゝからには、其實用學の範圍に於ては、あらゆる思想、學術を網羅して、遺憾な

しと云ふ可ければ、若し此諸子百家の學を、後繼者を得て、自由に發達せしめんか支那文明は、今日、決して、西洋文明に、劣敗するの運に遇ふが如きこと、無かりしのみならず、實に、世界思潮の先導者たるを得たりしならんに、幸か、不幸か、常識的なる儒家、獨り盛んに、後世長く其傳統を繼承し、革命に依て、歴代の更迭を繰り返へすも、儒教は、常に、國教として獨り、其勢力を占有し、時に、老莊思想の擡頭するありと雖ども、常に傍流たるに止まりしもの、是れ支那文明の遂に、西洋文明に大に相後れたる所以ならんか。固より、春秋戰國以後も、唐、宋、明、清の時代には、一時、學藝の大に盛大を致せることありしも、唐は、詩文の非常に發達せるのみ。清の學風は、考證學の範圍を出でず。唯宋、明の時代のみ、形而上學の色彩、幾分濃厚なりしものありと雖ども、此は佛教思想の影響を受けて、論理の精微を致せるに過ぎずして、歸する所は、依然として、道德論の基礎を築かんとせるに外ならず。支那の學問の、實際風の濃厚なること、實に世界に其類を求めが

たし。されば、修身、道德の教の如きは、其懇切なること、歐米の比に非ず。而して事實は極めて、非實際的となり、學者の論は、形式的となり、化石的となり、文學上の遊戯となり了んぬ。誠意、正心を説くこと、支那程甚だしきは無く、而して虚偽譎詐の多きこと、支那程甚だしきはなし。修身、齊家を説くこと、支那程懇切なるは無くして、不品行にして閨門の亂れより、大小お家騒動の甚だしき、支那の如きはなし。是れ抑、如何なる大原因のありて然るか。吾人は、容易に之れを發見するに苦むと雖ども、尙古主義の極端に走りしこと、隨て傳統の勢力強大に過ぎたること、は、少くも、其原因の有力なるものなりと云ふ可きか。

然りと雖ども、日本の教育は、明治維新に至る迄は、支那思潮に負ふ所極めて多大なるものなれば、其淵源を概観するは、決して無用の業に非ず。中にも、儒家と道家とは、支那思潮の二大根源なれば、之れが概要を研究するは、極めて必要なり。以下余は、此二家につきて記述し、附するに、他の先秦諸家の要旨を以てせん。

## 第二章 道家者流

### 第一節 老子

春秋戰國時代のみならず、後世長く、支那思想界に勢力の強大なりしものは、儒家と道家となり。前者を、鄒魯の學と稱し、後者を、荆楚の學と稱す。鄒魯の學は孔孟學派にして、荆楚の學は、老莊學派なり。前者は北方黄河の流域に出で、土地磽确、氣候嚴肅、加ふるに、洪水天に冲すること多ければ、民人の生存安からず。爲めに、空論よりは實際論を尊び、常識的特色を有す。後者は、南方揚子江の流域に出で、氣候温和、土地肥沃にして生活安易なれば、文學的空論を樂むの風多し。此論は、荆楚派の祖と稱せらるゝ老子が、實は、北方黄河の流域に成長せるの證據現はれしよりして、無力となりしも然し、之れを人心の二大方面と觀すれば、

其處に、幾分の眞理あり。則ち余は、此二派を、人心のクラシカルと、ローマンチックの二方面と見んとするなり。西洋には、ルネサンス以後、クラシカル先づ盛んに、次で、ローマンチックの時代となりしが然し、何時の世、如何なる時代に於ても、此二派の對立は存するものにして、唯問題は、其何れが時代思潮たりやと云ふ所に存す。クラシカルと、ローマンチックはもと是れ、吾人の精神界に根ざせる二方向なれば、決して其一方のみが、全思潮界を占領することある可からず。さて、余は、こゝに、簡單に、儒家は、クラシカル方面を代表し、道家は、ローマンチック方面を代表せるものと云はん。一は統一を旨とし、一は變化を樂む。一は實踐躬行を重んじ、一は空想自由を愛す。一は理智的にして、一は感情的なり。一は形式的にして、一は形式の拘泥を嫌ふ。クラシカルと、ローマンチックとの特色を、余は儒家と道家に見るなり。加之莊子に至ては、ローマンチックのみならず、ナチュラリズムの本能主義さへ、其思想中に發見するを得るなり。

或は、老莊は、印度思想を吸収せるものなりと云ふものあり。佛國のラフイットの如き其一人なり。ラクーベリーに至ては、老子は印度より移住せる人物ならんと云ふ。其立論は中々面白し。彼は云ふ。老子の傳に云ふ、老子は數十年、母の胎内にあり、生れたる時已に頭髮白かりしかば、老子と云ふ。此は支那に移住したる時、白髪なりしと云ふことならん。老子姓は李、名は耳、諡を聃と云ふ。聃は耳の大なりと云ふことなるが、耳と云ひ、聃と諡せられる所より見れば、老子の耳は大なりしならん。緬甸には、現に耳の大なる民族あれば、老子は、南方、大耳國より來たりし人ならん。又、李と云ふ姓は、老子以前には無し。ヒマラヤ地方には、自家に何か特色ある樹を植て、其の樹名を、姓とする風俗あり。老子の祖は、自家に李ありしより、李を姓としたるならん。此等の點より推して老子は、印度地方より移住せる人物ならんと云ふ。兎も角、面白き着眼とは云ふ可きも、老子には、印度思想の如き、宗教的色彩なく特に、輪廻思想は、其影だにも見ず。其論は、空想

多く、儒教に比すれば、高遠なるが如きも、徹頭徹尾、現世的處世論にして、未來觀念無きこと、希臘思想と好一對なり。尙、此は余の感想に過ぎざるも、等しく枯淡主義なるも、印度思想は、外形も内心も共に、枯淡的なるを得たるも、老莊は、外形は枯淡的なるに拘はらず、内心には、情熱の炎々たるものあるを免れざりしことは、其言論の間に、迸發するものあるを感ずるなり。此は、印度思想は、出世間的色彩、極めて濃厚なるも、老莊は、たとへ、超世脱俗、風塵を避けて喜ぶの風多しとは云ふもの、何處迄も、世間的の範圍を、脱せざりしに由らんか。老子の移住論は、附會説たるを免れざるなり。唯、老子と稱する書は、其文書の簡古にして押韻せる處より見て、非常に古き書なることは疑ふ可からず。司馬遷が、老子の學は、黃帝に本づくこと云へるは、例の傳統尊重僻よりして儒教の、堯、舜を祖述し、墨子の、夏禹を祖述すと云ふに對抗して、老莊は、黃帝に本づくこと傳へたるを、採りしものか。後世は、道家を、老莊學と稱するに至りしも、漢以前は、黃老學と稱



したるは、之れに因るなり。

史記に依れば、老子は、楚の苦縣に生る。(實は陳國に生れたるが陳は後に楚に併合せられたるなり) 生年月不明なるも、孔子よりは年長者なりしことは、孔子が老子を訪ふて、禮を問へることより推して知る可し。其は、孔子の三十四五歳頃なりしもの、如く、老子は約二十年許り、年長者なりしならんとは、學者の略一致せる所なり。老子は、周の守藏室の吏となること、久しかりしが、厭世的となりて、官を辭し、關を出でんとせる時、關の令尹、喜なるもの、老子の隱遯せんとするを察し、強て、我が爲めに言ふ所あれと求められ、書き與へたるものが即ち、老子道德經五千言なり。さて、孔子の禮を老子に問ふや、老子答へて曰く、子の言ふ所は、其人と骨と皆、已に朽ちたり。獨り、其言あるのみ。且、君子は、其時を得れば則ち駕し、其時を得ざれば即ち、蓬累して行くものなり。吾之れを聞く。良賈は、深く藏して虚しきが若く、君子は、盛徳ありて容貌愚なるが若し。子の驕氣と、多慾

と、態色と、淫志とを去れ。是れ皆子の身に益なし。吾の以て子に告ぐる所は、是の如きのみと。孔子去りて弟子に謂ふ。鳥は吾その能く飛ぶを知り、魚は吾その能く遊ぶを知り、獸は吾能く走るを知る。走るものは以て、網をなす可く、遊ぶものは以て、綸をなす可く、飛ぶものは以て、網をなす可し。龍に至りては吾、其の風雲に乗じて、天に上るを知ることを能はず。吾今日老子を見るに、それ猶龍の如きかと。

さて、老子は、其著の冒頭第一に述べて曰く、道の道とすべきは、常の道に非ず。名の名とすべきは、常の名に非ず。無名は、天地の始めにして、有名は、萬物の母なり。故に、常無以て、其妙を觀んことを欲し、常有以て、其微を觀んことを欲す。此兩者は、同出にして異名なり。同く之れを玄と謂ふ。玄の又玄、衆妙の門と。又曰く、物あり混成し、天地に先つて生ず。寂たり、寥たり、獨立して而して改めず。周行して而して殆ふからず。以て、天下の母たる可し。吾れ其名を知らず。之れを字して道と云ふ。強いて之れが名を爲して大と云ふ。大を逝と云ひ、逝

を遠と云ひ、遠を反と云ふ。故に道は大、天は大、地は大、王も亦大なり。域中に四大あり。而して天其一に居る。人は地に法り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然に法ると。此等の言に依りて、老子が本体論を試みたるを見る可く、此本体を道と稱し、道は時空を超越し、相對界を超越し、因果律を超越し、天地萬物に先づ、絶對的、一元的實在なりと、觀じたるが如きも、こゝに注意す可きは、彼れが本体論を試みながら、王を四大の一に數へて、天地と併稱する所、支那傳統思想を脱せざるを見る可し。

又曰く、之れを見て見えず。名けて、夷と曰ふ。之れを聽て聞えず。名けて、希と曰ふ。之れを搏ちて得ず。名けて、微と曰ふ。此の三者は致詰す可からず。故に混じて一となる。其上は儼かならず。其下は味からず。繩々として名く可からず。無物に復歸す。是れを無狀の狀、無象の象と云ふ。是れを恍惚と云ふ。之れを迎へて其首を見ず。之れに隨ひて其後を見ず。古の道を執りて以て、今の有を御す。能

く古の始を知る。是れを道紀と云ふと。此は道の認識を超越せるを述べたるものなる可く、其道の形容表詮に苦心せるの迹は多とす可きも、結局文章上の遊戯に墮して、論理の發展を見ざるは遺憾なり。

老子は、本体より萬物の發生することを、活動的に見ずして、靜止的に見たり。曰く谷神死せず、是れを玄牝と謂ふ。玄牝の門、是れを天地の根と謂ふ。綿々として存するが如く、之れを用ひて勤めず。天は長く地は久し。天地の能く長く且久しき所以のものは、其自ら生ぜざるを以ての故に、能く長生すと。易の太極を活動的に見て、生々之れを易と云ひ或は、天地の大徳を生と云ふと相異なる。本体は無爲自然にしてしかも、萬物は自然に之れより發生す。本体は何等の目的をも有せずしてしかも、自然に萬物を生ずとせるなり。即ち老子は、目的論的の宇宙觀を採らずして、機械的の宇宙觀を採りしものゝ如く、此點儒教と相反するを見る。

老子は、本体の無爲自然論を移して道德、政治に及ぶ。則ち老子は、本体に復歸

するを以て、人生最高の目的とし、之れに復歸することを嬰兒に復歸すと云ふ。周の繁文褥禮の反動思想に走り、智慧技巧を、あらゆる罪惡の本と觀じたれば、之れを脱して嬰兒の如き、天真爛漫の昔に復歸することを、理想とするに至りしならんか。キリストの嬰兒に於て、天國を見たと似たるものあり。智慧技巧、一切の人為を排することも甚だ相似たり。大道廢れて仁義あり。智慧出で、大偽あり。六親和せずして孝慈あり。國家昏亂して忠臣あり。聖を絶ち、智を棄つれば、民利百倍す。仁を絶ち、義を棄つれば、民孝慈に復る。巧を絶ち、利を棄つれば、盜賊あることなしと云へるあたりは、反動思想の色彩最も濃厚にして、ルソーの自然に歸れの叫びが、佛國ルイ十四世式のアマチュア流の繁文褥禮、人為的巧徴の極の反動として起りしと似て、一層極端に走りしものか。

然らば嬰兒に復歸するの道如何。

第一は、清靜恬淡なり。五色は、人の目を盲せしめ、五音は、人の耳を聾せしめ

五味は、人の口を爽はしめ、馳騁田獵は、人の心に狂を發せしめ、得がたきの貨は人の行を妨げしむ。是れを以て、聖人は腹を爲めて、目を爲めず。故に彼を去りて此を取ると。佛敎の如く極端ならざる迄も、肉体的の快樂と、名利を遠けざれば、清靜恬淡なる能はずとせるは、互に一致す。

第二は、無爲自然なり。禮樂仁義の如きは畢竟、益々世を亂す。如かず、日出で、は耕し、日入ては憩ふ、帝の徳、我れに於て何かあらんの無爲、無邪氣の自然人に復歸するに。かくて老子の政治論は、遂に民を愚にして治むる主義となれり。曰く、古への善く道を爲むる者は以て、民を明かにするに非ず。將に以て、之れを愚にせんとするなり。民の治め難きは、其智の多きを以てなり。智を以て國を治むる者は、國の賊なり。智を以て國を治めざるは、國の福なり。常に此兩者を知れば亦稽式たり。能く稽式を知る。是を玄德と謂ふ。玄德は深し、遠し、物と反す。而る後乃ち大順に至ると。

第三は謙虚なり。曰く、上善は水の如し。水善く萬物を利して而して争はず。衆人の惡む處に處る。故に道に幾し。又曰く、江海の能く百谷の王たる所以は、其の善く之れに下るを以ての故に、能く百谷の王たり。是を以て、聖人民に上たらんと欲せば必ず、言を以て之れに下る。民に先んせんと欲せば必ず、身を以て之れに後る。是を以て、聖人は、上に處て而して民重じとせず。前に處りて而して民害とせず。是を以て、天下推すことを楽しんで而して厭はず。其の争はざるを以ての故に、天下能く之れと争ふ莫し。又曰く。我に三寶あり。持して而して之れを保つ。一に曰く慈、二に曰く儉、三に曰く敢て天下の先たらず。慈なり、故に能く勇。儉なり、故に能く廣し。敢て天下の先たらず、故に能く器の長となる。此等の言に依り、老子が謙虚の道を、處世の態度となし、和光同塵を、處世の秘訣としたるを察す可し。後世、柔能く剛を制すの處世法は、老子の謙虚説より來りしもの多く、政治家などの之れに依りて、大業を成せるもの甚だ多し。

老子は、以上の三徳を體得すれば、道と一体となり、有限の現象界を超越して、無限の本体界に合一し、不生不滅、天地と共に、長久となり得るものとせり。老子は其意味を述べて曰く、蓋し聞く、善く生を攝する者は、陸行して兕虎に遇はず。軍に入りて甲兵を被らず。兕も其角を投ずる所なく、虎も其爪を措く所なく、兵も其刃を容るゝ所なしと。此説は莊子に至て至人、真人など稱せられ、老子の形容的比喩的に述べたるものが、大に神仙説化し、遂に後漢の頃となりては、道教と云ふ宗教的色彩のものとなり、老子は神仙三尊の一として、祭祀さるゝに至れり。

余は老子を讀みて竊に其人物を想見し、老子はルソー、トルストイなどと、類型の性格の持ち主にては無かりしやを疑ふ。ルソー及トルストイは共に、反性的の思想家にして、矛盾を懷きて苦しめる人物なり。老子も其本來の人物の一面には、頗る權勢を愛し、現世執着の案外強かりしものありしにはあらざるか。其は兎も角も老子流の思想よりは、純眞の人物よりは却て、權道を愛する人物出で易きを想ふ。

老子が之を欲めんと欲すれば必ず、固く之を張る。之を弱めんと欲すれば必ず、固く之を強くす。之を廢せんと欲すれば必ず、固く之を興す。之を奪はんと欲すれば必ず、固く之を與ふ。是れを微明と謂ふ。柔の勝は剛、弱の勝は強。魚は淵を脱す可からず。國の利器は以て人に示す可からずなど云へるは、權道を行くものゝ、最も利用せる所なる可し。老子の清淡、寡欲、謙虛は佛教の悟道體得者の其れとは、大に相異なるものあるを感ずるは如何に。老子流にては到底、安禪は必ずしも山水を用ひず、心頭を滅すれば、火も亦寒しの境地には、達しがたかる可し。老子は其理想とする社會を述べて曰く、小國寡民、什佰の器あるも、用ひざらむ。民をして死を重んじて而て、遠く移らざらしむ。舟輿ありと雖も、之に乗る所無く、甲兵ありと雖も、之を陳する所なし。民をして結繩に復して而して、之を用ひしむ。其食を甘しとし、其服を美しとし、其居に安んじ、其俗を樂しむ。鄰國相望み雞犬の聲相聞ゆ。民老死に至る迄相往來せずと。老子の達し得る所の理想は當さに此程度

なる可きか。文化爛熟の極に達し、巧微尖端を喜び、餘りに人工的生活に溺没せる社會に對しては以て、一服の清涼劑たる可きも、結局、人性を無視せる空論のみ。

## 第二節 列子及楊朱

老子の思想を繼承せるものに、列子あり、揚朱あり、莊子に至て大成す。

老子は、無より有を生ずとなせるが、列子は之れを一層精密に考へ、無より有に至る間に、太易、太初、太始、太素の四階級を設け、太易は、渾淪として無なり、太初は、氣の始、太始は、形の始、太素は、質の始なり。渾淪より一となり、七となり、九となりて、清くして輕きものは、上つて天となり、濁りて重きものは、下つて地となり、沖和の氣は、人となり、而して後、萬物發生すと論ずるの邊、幾分進化論的思想を有したるやに察せらるゝも、大体は、言語上の技巧のみ。

老子の機械的天命觀は、必然論宿命觀となる可きは、論理の當然なるが、此思想

も列子に至て、一層明瞭を致せり。

力(人力)、命(天命)に謂つて曰く、若の功、我と奚若ぞや。命曰く、汝、物に奚の功ありてか、朕に比せんと欲する。力曰く、壽夭窮達、貴賤貧富は、我が力の能くする所なり。命曰く、彭祖の智は堯舜の上に出でざるに、壽は八百、顔淵の才は、衆人の下に出でざるに、壽は四八、仲尼の徳は、諸侯の下に出でざるに、陳蔡に困しめり。殷紂の行は、三仁の上に出でざるに、君位に居り、季札は、呉に爵なきも田恒は齊國を専有し、夷、齊は首陽に餓えしも、季氏は、展禽よりも富めり。若し是れ汝が力の能くする所以ならば、奈何ぞ、彼を壽にして、此を天し、聖を窮して、逆を達し、賢を賤しくして、愚を貴くし、善を貧しくして、惡を富ましむるや。力曰く、若し汝が言の如くならば、我れ固に物に功なし。而かも、物此の若きは、此れ則ち若の制する所か。命曰く、既に之を命と謂ふ、奈何ぞ、之を制するものあらんや。朕、直なるをば之を推し、曲なるをば之に任ず。

自ら壽、自ら夭、自ら窮、自ら達、自ら貴、自ら賤、自ら富、自ら貧、朕豈に、能く之を識らんや、朕豈に、能く之を識らんや。(力命)

列子の必然論の可なり徹底せるを見よ。此必然論より列子は、人生は行旅の如く、又泡沫夢幻なり。死生何ぞ意に介するに足らんや。死は畢竟、歸なりと觀じ、寡欲清淡、修養極地に達すれば、仙化自由自在なりと。莊子にも、列子は風に御して行く、冷然として善しとあり。

然るに、同一の必然論より、揚朱の厭世的快樂主義の出でたるは、人心の多面を證して面白し。揚朱の快樂主義は、西洋の快樂主義よりも、一層徹底せるが如し。左に引用する所を見れば、思、半に過ぐるものあらん。

揚朱曰く、百年は壽の大齊なり。百年を得るものは千に一なし。設ひ一者あるも孩提より以て、昏老に逮ぶ迄、幾んど其半に居る。夜眠の弭む所、晝覺の遺ふ所又幾んど其半に居る。痛疾、哀苦、亡失、憂懼、又幾んど其半に居る。十數年の

中を量るに、適然として自得して、介焉の慮なきもの、亦一時の中にも亡きのみ。則ち人の生けるや奚をか爲さんや。奚をか樂しまんや。美厚を爲さんのみ。聲色を爲さんのみ。而かも、美厚も復た常に、厭き足る可からず。聲色も常に、翫び聞く可からず。乃ち復た、刑賞に禁勸せられ、名法に進退せられて、違々爾として一時の虚譽を競ひ、死後の餘榮を規り、偶々爾として、耳目の觀聽を慎み、身意の是非を惜しみ、徒らに當年の至樂を失ふて、自ら一時に肆にすること能はず。重囚桟梏と、何を以てか异ならん。太古の人、生の暫來なるを知り、死の暫往なるを知る。故に心に從つて動き、自然に違はず。好む所の當身の娛みは、去る所にあらず。故に名のために勸められず。性に從つて遊び、萬物に逆はず。好む所の死後の名は、取る所にあらず。故に刑のために及ぼされず。名譽の先後、年命の多少は量る所にあらざるなり。

又曰く、萬物の異にする所のものは生なり。同じうする所のものは死なり。生く

れば則ち賢愚貴賤あり。是れ異なる所なり。死すれば則ち臭腐消滅あり、是れ同じき所なり。然りと雖も、賢愚、貴賤は能くする所に非ず。臭腐消滅も亦、能くする所に非ず。故に生も生ずる所にあらず。死も死する所にあらず。賢も賢する所にあらず、愚も愚する所にあらず。貴も貴する所にあらず、賤も賤する所にあらず。然かも萬物齊しく生き、齊しく死し、齊しく賢に、齊しく愚に、齊しく貴に、齊しく賤なり。十年も亦死し、百年も亦死し、仁聖も亦死し、凶愚も亦死す。生きて則ち堯舜なるも、死すれば則ち腐骨、生きて則ち桀紂なるも、死すれば、則ち腐骨なるは一なり。孰れか其異なるを知らん。且つ、當生に趣かんのみ。奚ぞ死後に違あらん。

楊朱は、宿命觀より快樂主義に走り、快樂主義は即ち自利主義なり。楊子の自利主義は徹底せるものなり。

楊朱曰く、伯成子高は、一毫を以て物を利せず。國を捨て、隠れ耕す。大禹は一

身を以て自ら利せず。一体偏枯す。古の人は、一毫を損じて天下を利するも與へず。天下を悉して一身に奉ずるも取らず。人々一毫を損せず、人々天下を利せずして天下治まる。

楊子の自利主義は自利の爲めに他人を害して顧みざる小人的自利主義にはあらず。人々互に相侵すなきを原則とす。

楊子は又、世人の尊崇措かざる四聖を罵倒して、剗切なるものあり。

楊子曰く、天下の美は之を舜、禹、周、孔に歸し、天下の悪は、之を桀紂に歸す。然るに、舜は河陽に耕し、雷澤に陶し、四体暫くも安きを得ず。口腹美厚を得ず。父母の愛せざる所、弟妹の親まざる所、行年三十にして告げずして娶る。堯の禪を受くるに及んでは、年已に長じ、智已に衰ふ。商鈞不才なるより位を禹に禪り戚々然として以て死に至る。此れ天人の窮毒なるものなり。鯀、水土を治めて績用就らず、諸を羽山に殛す。禹、業を纂ぎ、讐に事へ惟だ、土功を荒いにす。子、

産まるれども字ます。門を過ぐれども入らず。身体偏枯し手足胼胝に。舜の禪を受くるに及んで、宮室を卑うし、絺冕を美しくし、戚々然として以て死に至る。此れ天人の憂苦なるものなり。武王既に終り、成王幼弱なり。周公天下の政を攝して邵公悦ばず。四國流言す。東に居ること三年、兄を誅し、弟を放ち、僅に其身を免れしめ、戚々然として死に至る。此れ天人の危懼なるものなり。孔子は、帝王の道に明かにして、時君の聘に應じ、樹を宋に伐られ、迹を衛に削られ、商周に窮し、陳蔡に圍まれ、屈を秀氏に受け、陽虎に辱しめらる。戚々然として以て死に至る。此れ天民の遑遽なるものなり。凡そ彼の四聖は、生きて一日の歡なく、死して萬世の名あり。名なるものは固より、實の取る所に非ず。稱せらるゝと雖も、之れ知らず。賞せらるゝと雖も、之れ知らず。株塊と以て異なるなし。桀は累世の資に藉り、南面の尊に居り、智は以て群下を距ぐに足り、威は以て海内を震はすに足る。耳目の娛む所を恣まゝにし、意慮の爲す所を窮め、熙々然として



以て死に至る。此れ天民の逸蕩なるものなり。紂も亦、累世の資に藉り、南面の尊に居り、威行はれざるなく、志従はれざるなく、情を傾宮に肆まにし、欲を長夜に縱まにし、禮儀を以て自ら苦しめず、熙々然として以て誅に至る。此れ天民の放縱なるものなり。彼の二凶や、生きて縱慾の歡あり。死して愚暴の名を被むる。實は固より名の與かる所にあらず。毀らると雖も知らず。罰せらると雖も知らず。此れ株塊と奚を以て異ならん。彼の四聖は、美の歸する所と雖も、苦以て終りに至り、同じく死に歸し、彼の二凶は、惡の歸する所と雖も、樂以て終りに至り、亦、同じく死に歸す。

### 第三節 莊

### 子

黄老の學派は、老子より列子、楊子を経て莊子に至る。莊子は、宋の蒙縣（河南省歸德府）の人なり。曾て蒙の漆園の史となる。梁の惠王、齊の宣王と同時代の人

なれば、孟子とも同時代なる筈なるか、此道儒二大代表者は、遺憾ながら相會合するの機、なかりしもの、如し。楚の威王嘗て、莊周の賢を聞き、幣を厚くして之れを迎へんとす。莊周は、笑つて使者に告げて曰く、千金は重利、卿相は尊位なり。子はかの犠牛を見ざるか、之を養ふこと數歳、文繡を衣せ良芻を食ましむ。一旦大廟に入るに及びては、孤豚たらんを求むるも、豈得べけんや。子亟かに去れ、我を汚すなかれ。我は寧ろ、汚瀆の中に游戲して自ら快くせん。國を有つもの、爲めに羈せらるゝ所となすなかれと。其他、評傳傳はらず、蓋し、隱遁生活をなし、一世に超然たりしもの、如し。

想ふに、支那は文章の國なり。此文章の國に於て、莊子の文章は、古今四千歳を通じて、恐く、其冠たるものならん。老、列の文、固より簡古奇勁、後代のもの、其選を異にするも、莊子に至つては、其語彙の豊富なる、其行文の奔放自在なる、其比喩の自由獨創的なる、其筆致の恰も空中の仙樂を聞くが如く、縹渺として捕捉

す可からずして、唯恍然たるあるのみなるの點、到底天下に匹儔を求む可からず。管に、之れを支那の古今に求む可からざるのみならず、西洋に於ても、恐らく、之れに比す可きものなからん。吾人は英の沙翁、獨のゲーテを以て、西洋文學者の二大双壁と信ずと雖ども、單に文章の側より云へば、莊子は、之れに優るものある可し。莊子は管に、其文章に於て、古今東西に獨逸せるのみならず、其文章に盛られたる思想に於ても、支那古今には、其類を見ざる可し。莊子は固より、老列の思想を繼承せるものなるも、現行の莊子二十三篇（漢書藝文志には莊子五十二篇と云ふ）を見ても、實に幾多の種類を包有し、細かに之れを察すれば、西洋近世思想に比す可きものをも含蓄するなり。此點、ゲーテに似たるものあり。實に莊子は、支那の生みし最も偉大なる文豪と稱す可し。後世唐宋に至つて、韓、柳の文章あり、朱、王の哲學ありと雖も、之れを合はすも到底、莊子の豊大に及ばざるを覺ゆ。北冥に魚あり、其名を鯤と爲す。鯤の大き其幾千里なるを知らざるなり。化して

鳥となる、其名を鵬と爲す。鵬の背、其幾千里なるを知らざるなり。怒りて飛べば、其翼垂天の雲の如し。是の鳥や、海運すれば則ち將に、南冥に徙らんとす。南冥は天池なり。齊諧は、怪を志せるものなり。諧の言に曰く、鵬の南冥に徙るや、水に撃つこと三千里、扶搖に搏つて上るもの九萬里、去つて六月を以つて息ふものなりと。野馬や、塵埃や、生物の息を以て相吹くや、天の蒼々たるは、其れ正色か、其れ遠くして、至極する所なければか。其下を視るや、亦是の若くならんのみ。且夫れ、水の積むや厚からざれば則ち、大舟を負つに力なし。杯水を坳堂の上に覆へせば則ち、芥之が舟となり、杯を置くも則ち膠く。水淺くして舟大なればなり。風の積むや厚からざれば則ち、其大翼を負ふに力なし。故に九萬里にして則ち、風斯に下にあり。而る後乃ち、今風に培はれ、背に青天を負ふて、天闕するものなし。而る後乃ち、今將に南を圖らんとす。蜩と鸞鳩と之を笑ふて曰く、我れ決起して飛んで榆枋を捨く、時には則ち至らずして地に控ちて已

む。奚ぞこの九萬里にして南するを以てせんと。

此は、宇宙の本体の、空間を超越せることを述べたるなり。鯤や鵬と、蜩や鸞鳩とは其大小又は飛游力は、比較にならず。されど、たとへば大鵬の飛翔の限りを盡す所の南冥も、實は僅に天池に過ぎず。相待の見地に立てばこそ、大小の差甚だしきを見るも、絶對の見地に立てば、大小の區別は無くなるなり。

莽蒼に適くものは、三餐にして反る。腹猶ほ果然たり。百里に適くものは、宿に糧を舂く。千里に適くものは、三月糧を聚む。之の二虫は又何をか知らん。小知は大知に及ばず。小年は大年に及ばざればなり。奚を以て其然るを知るや。朝菌は晦朔を知らず。蟪蛄は春秋を知らず。此れ小年なり。楚の南に冥靈なる者あり。五百歳を以て春とし、五百歳を以て秋とす。上古に大椿なる者あり。八千歳を以て春とし、八千歳を以て秋とす。而るに彭祖は乃ち、今久しきを以て特に聞ゆ。衆人之に匹はんとす。亦悲しからずや。湯の棘に問ふも也是のみ。

此は、本体の時間を超越せるを、道破せるものなり。朝菌、蟪蛄の短命と、冥靈、大椿の長命とは相待の見地よりは、比較にならざるも、一たび時間の無限性を直覺せんか、其長短は云ふに足らざるなり。况んや僅に、七百歳の壽を保ちたりと云ふ彭祖を羨望するに於てをや。

莊子は右の絶對觀より轉じて人生觀に及ぶ。

故に夫の知、一官に效し、行、一郷に比し、徳、一君に合うて而して一國に徴あるもの、其自ら視るや、亦此の如し。而して宋榮子猶然として之を笑ふ。且つ、世を擧つて之を譽むるも、勸むることを加へず。世を擧つて之を非るも、沮むことを加へず。内外の分を定め、榮辱の境を辨す。斯れのみ。彼は其れ世に於て未だ數々然たらざるなり。然りと雖も猶未だ樹たざるあり。夫の列子は風に御して行く。冷然として善し。旬有五日にして後に反る。彼は福を致す者に於て、未だ數々然たらざるなり。此れ行くを免ると雖も猶ほ待つ所のものあり。若し夫れ天

地の正に乗じ、六氣の辨に御して以て、無窮に遊ぶものは彼れ且つ悪んぞ待たんや。故に曰く至人は己無し、神人は功無し、聖人は名無し。

此は凡人、宋榮子、列子と次第に修養の程度の進歩せるを示し最後に、莊子の理想的人物を點出したるなり。

藐姑射の山に、神人ありて居る焉。肌膚は氷雪の若く、淖約として處子の若し。

五穀を食はず、風を吹ひ、露を飲む。雲氣に乗り、飛龍に御して而して、四海の外に遊ぶ。其神は凝る。物をして疵癘せざらしめて而して、年穀を熟せしむ。

以上は逍遙遊篇に記する所なり。次で莊子は、齊物論篇に於て、萬物一体、死生一如を説く。夫れ萬物は皆、幾より出で、幾に入る。されば、人間と生れたりとて、喜ぶにあたらず、動物と生れたりとて、悲しむにあたらず。例へば毛嬙麗姫は、人の美とする所なるも、魚之れを見れば、深く淵に隠れ、鳥之を見れば高く天に冲す。吾人より見れば、人間を至上とせんも、魚鳥よりすれば、人間は惡鬼に過ぎず。則ち自

己の主観を固持して、萬物に對すれば、物の真相は体得す可からず。自然の大道よりすれば、萬物は一体のみ。我執を解脱すれば、差別の妄迷なからん。此立脚地よりして人生の價值判斷を試みんか、賢愚敏鈍、富貴貧賤、高官布衣、有徳無徳の如きは凡て、皮相の些事にして、固より探るに足らず。生死窮達また然り、生あれば死あり、死あれば生あり、此れ自然の大法のみ。故に生必ずしも喜ぶに足らず、死必ずしも悲しむに足らず。如かず、無爲の自然に順はんに。無限の時間よりすれば、人生は電光石火にも當らず。愚者此理を悟らず、生死に執着して苦惱煩悶す。麗姫は艾の封人の子なり。初めて晋國に嫁ぐ時、悲歎遣る方なかりき。然るに一たび王の寵を得るや、昔の悲歎を笑へり。人の死を悲む、また之に類せずや。

昔者、莊周、夢に胡蝶と爲る。栩栩然として胡蝶なり。自ら喩んで志に適するか周たるを知らざるなり。俄然として覺むれば則ち、遽々然として周なり。知らず周の夢に胡蝶と爲れるか、胡蝶の夢に周と爲れるか、周と胡蝶とは即ち分あり。

此れを之れ物化と謂ふ。

人生は畢竟一個の夢のみ。其夢の夢たるを知るは大覺の士なり。莊子は進んで死の至樂を説いて曰く

莊子、楚に之く。空髑髏を見る。饒然として形あり。撤つに馬槌を以てし、因て之に問ふて曰く夫子、生を貧り、理を失ふて而して此と爲れるか、將た子、亡國の事、斧鉞の誅あつて而して之と爲れるか、將た子、不善の行あり、父母妻子の醜を遺さんことを愧ぢて而して、此と爲れるか、將た子、凍餒の患あつて而して、此と爲れるか、將た、子の春秋、故より此に及べるかど。是に於て語卒り、髑髏を援いて枕として而して臥す。夜半に髑髏夢に見えて曰く、子の談するは辯者に似たり。諸々子の言ふ所は皆、人生の累なり。死には則ち此れ無し。子、死の說を聞かんと欲するか。莊子曰く、然り。髑髏曰く、死は上に君なく、下に臣なく、亦四時の事なし。從然として天地を以て春秋となす。南面王之樂と雖も、

過ぐるご能はざるなりと。莊子信せずして曰く、吾れ、司命をして復た子の形を生じ、子の骨肉肌膚を爲り、子の父母妻子閭里の知識に反へさしめん、子之を欲するかど。髑髏深瞶蹙額して曰く吾れ安くんぞ能く、南面王之樂みを棄て、而て復た人間の勞を爲さんや。

莊子は、其愛妻を喪へる時も、箕踞して盆を鼓して謳ふ。知人、其不人情なるを責むれば莊子は云ふ、其初めに當つては、妻なる者の形体あるなし。芒芴の間に雜はり、氣變じて形をなし、人と成れるのみ。今また氣變じ散じ去て自然の巨室に歸る。何の悲しむ可きことやあらん。生も死も皆、自然の命するまゝなりと。此の如く死生を以て、暑往寒來、五風十雨と同じく、自然のものなりと達觀したるもの、之れを帝の縣解と言ひ至人又は眞人とも云ふ。想ふに、死生問題は最も人間の關心強烈なるものなるが、莊子も之れにつきては到る所、其解説論辯を費し居れり。宗教的空想に深入りせざる程度に於て、莊子の死生觀は、極めて其要を得たるものと云

ふ可きか。

莊子已に、死生を以て一種の自然現象視したるを以て、不具畸形に生れ、疾病災難に罹るもまた、自然のものにして決して、怨嗟す可きものに非すと観ず。人間世篇に於ける支離疏の言の如きは、最も有名なり。

支離疏なるもの、頤、齊を隠し、肩は頂より高く、會撮は天を指す。五管は上に在り、兩髀は脅と爲る、挫鍼と治繻と以て、口を糊するに足る。箠を鼓し、精を播する、以て十人を食ふに足る。上、武士を徴すれば則ち支離臂を其間に攘ぐ。上、大役あれば則ち支離は常疾あるを以て功を受けず。上、病者に殺を與ふれば則ち三鐘と十束の薪を受く。夫れ其形に支離なる者、猶ほ其身を養つて其天年を終ふるに足る。人況んや其徳を支離にする者をや。

大宗子篇に又之れに類する語あり。

子祀、子輿、子犁、子來、四人相與に語つて曰く、孰か能く無を以て首と爲し、生

を以て脊となし、死を以て尻と爲さん。孰れか死生存亡の一体たるを知る者ぞ。吾れ之と友たらんと。四人相見て而して笑ふ。心に逆ふこと莫し。遂に相與に友たり。俄にして而して子輿病あり、子祀往て之を問ふ。曰く偉なるかな、夫の造物者、將に予を以て此拘拘たらしめんとす、曲僂背に發すと。上に五管有り、頤齊を隠し、肩頂より高く、句贅天を指す。陰陽の氣滲るゝこと有り。其心間にして而して無事。跣躡として井に鑑みて曰く嗟乎夫の造物者、又將に予を以て此拘拘たらしめんとするや。子祀曰く女、之を惡むか、曰く亡し。予何ぞ惡まん。浸假して、而して予の左臂を化して以て、雞と爲さば予は因つて以て時夜を求めん。浸假して而して予の右臂を化して以て彈と爲さば、予は因て以て鳴矣。浸假して而して予の尻を化して以て輪と爲し、神を以て馬と爲さば、予は因て而して之に乗らん。豈に更に駕せんや。且つ、それ、得るは時なり。失ふは順なり。時に安んじて而して順に處れば、哀樂入ること能はざるなり。此れ古の所謂、縣解なり。

縣りて而して自ら解くこと能はざる者は、物之を結ぶことあればなり。且つ、夫れ物、天に勝たざること久し。吾れ何ぞ又悪まんやと。俄かにして子來病有り。喘喘然として將に死せんすとす。其妻子環りて而して之を泣く。子犁往きて之を問ふて曰く、叱、避けよ、化を怛かすこと無れと。其戸に倚り之と語つて曰く、偉なるかな造化、又將に奚んか汝を爲さんとする。將に奚んか汝を以て適かんとする。汝を以て鼠肝と爲すか、汝を以て蟲臂と爲すか、子來曰く、父母の子に於ける、東西南北唯だ命之れ従ふ。陰陽の人に於ける、翅だ父母のみならず。彼れ吾を、死に近くして而して、我れ聽かすんば我れ則ち悍なり。彼れ何の罪ぞ。夫れ、大塊我を載するに形を以てし、我を勞するに生を以てし、我を佚するに老を以てし、我を息はするに死を以てす。故に吾が生を善しとするは乃ち、吾が死を善しとする所以なり。今、大冶、金を鑄んに、金踊躍して我れ且に必ず鑊鉞たらんとすと曰はゞ大冶必ず以て不祥の金と爲さん。今一たび人の形を犯して而して人

のみ、人のみと曰はゞ夫の造物者、必ず以て不祥の人と爲さん。今天地を以て大鑪と爲し、造化を以て大冶と爲さば惡んか、往いて而して可ならざらんや。成然として寐ね、遽然として覺めんのみ。

莊子の死生人事觀は固より人情を超越せるものにして徹底的自然觀なり。此點孔子の人情本位と相異なるは次の語を見れば瞭然たらん。

子桑戸、孟子反、子琴張三人相與に語つて曰く、孰れか能く、相與にすること無きに相與にし、相爲すことなきに相爲さん。孰れか能く、天に登り霧に遊び、無極に撓挑して相忘るゝに生を以てし、終窮する所無からんと。三人相見て笑ふ。心に逆ふこと莫し。遂に相與に友として莫然たり。聞く有りて子桑戸死す。未だ葬らず。孔子之を聞き、子貢をして往いて事を待たしむ。或ものは曲を編み、或ものは琴を鼓し、相和して歌つて曰く嗟來桑戸や嗟來桑戸や而已に其眞に反りて而して、我れ猶人たり。猗。子貢走つて進んで曰く、敢て問ふ、尸に臨んで而して

歌ふは禮か、二人相視て笑ふて曰く、是れ惡んぞ禮の意を知らんと。子貢反つて以て孔子に告げて曰く、彼は何人ぞや、修行有ることなくして而して、其形骸を外にす。尸に臨んで而して歌ひ、顔色變せず。以て之に命するなし、彼れ何人ぞや。孔子曰く彼は方の外に遊ぶ者なり、而して丘は方の内に遊ぶ者なり。外内相及ばず。而るに丘、女をして往いて之を弔せしむ。丘は則ち陋なり。彼れ方に且に造物者と人たり、而して天地の一氣に遊ばんとす。彼は生を以て附贅、縣疣となし、死を以て決疔潰癰と爲す。夫れ然るが若くば又惡んぞ、死生先後の在る所を知らんや。異物に假り、同体に託し、其肝膽を忘れ、其耳目を遺れ、終始を反覆して端倪を知らず。茫然として塵垢の外に彷徨し、無爲の業に逍遙す。彼れ又惡んぞ能く憤憤然として、世俗の禮を爲し以て、衆人の耳目に觀さんや。莊子の修養法は、老列と同じく、無爲自然、無欲恬淡にあるは云ふ迄もなし。而して其之れに至る方法として、心齊、座忘を説く所。老列に一步を進めたるものか。

大宗師篇に顔回と仲尼との問答に假りて坐忘を説く。

顔回曰く回、益せり。仲尼曰く、何の謂ひぞや。曰く回、仁義を忘れたり。曰く可なり。猶ほ未だし。它日復た見て曰く、回益せり。曰く何の謂ひぞや。曰く、回禮樂を忘れたり。曰く、可なり。猶ほ未だし。它日復た見て曰く回、益せり。曰く、何の謂ひぞや。曰く、回、坐忘せり。仲尼蹵然として曰く、何をか坐忘と謂ふ。顔回曰く、枝体を墮て、聰明を黜け、形を離し、知を去て大通に同す。此を坐忘と謂ふ。仲尼曰く、同なれば則ち好すること無きなり。化すれば則ち常無きなり。而、果して其れ賢れるか、丘や請ふ而が後に従はん。

又齊物篇の初頭に坐忘者を形容す。

南郭子綦、几に隠りて坐し、天を仰いて嘘く。嗒然として其耦を喪ふに似たり。顔成不游、立て前に侍す。曰く、何居や。形は固より槁木の如くならしむ可く、而して心は固より死灰の如くならしむ可きか、今の几に隠る者は昔の几に隠る者



に非ざるなり。

莊子の座忘心齋は、禪道と相通するものあるが如し。唯莊子全篇を通じて、禪道に及ばざる感あるものは、古池ありて、蛙飛びこむ水の音を聞かざることなり。吾人は老莊よりして、無欲恬淡の修養談は、十二分に之れを聽くを得るも、禪道の所謂大死一番、積極的に勇往突進するの教を聽くを得ざるなり。老莊の教よりして吾人は、名利に恬淡なる所謂、高節の隱遯家を出すは當然の道程にして、此種類の人物は、支那特有のものと云ふ可く、西洋には殆んど、其類型を發見しがたきなり。高節の隱遯家にして、花鳥を友とし、風月を樂むは可なり。されど、老莊主義の陥り易き弊は、諦め主義となることなり。世の中の事は、成るやうに成るのみなれば成るにまかせて置けば可なり、故意に爲さうとするも、成るやうにしか成らぬものなれば、爲さうと努力するが如きは、痴人なりと云ふが如き態度を生じ易し。「爲せば成り爲さねば成らぬ世の中を成らぬといふは爲さぬなりけり」とは人力を買ひか

ぶれるの非難あらんも、現世生活には此氣概は無かる可からず。固より諦め主義が善く行けば、自然主義に通ず。物事に無理をせざる主義となる。柳は緑、花は紅と見るの主義となる。此は事物を正當に解するには、極めて大切なる態度なり。されど諦め主義が悪く行けば彼の竹林の七賢風のデカダン主義に陥る。

かく云へばとて、莊子は、枯木死灰的の方面のみを有したる人物には非ず。一面には頗る、強烈なる生きんとする意志の持ち主なりき。盜跖の篇の如きは、稀れに見る潑瀾の文なり。

孔子、柳下季と友たり。柳下季の弟、名を盜跖と曰ふ。盜跖の從卒九千人、天下に横行し、諸侯を侵暴し、室に穴し、戸に樞し人の牛馬を驅り、人の婦女を取り得を貧つて親を忘れ、父母兄弟を顧みず。先祖を祭らず。過ぐる所の邑、大國は城を守り、小國は保に入る。萬民之を苦む。

孔子、柳下季に謂つて曰く、夫れ人父たるものは必ず能く、其子に詔げ、人の兄

たるものは必ず、能く、其弟に教ふ。若し父其子に詔ぐることは能はず、兄其弟に教ふること能はずんば則ち、父子兄弟の親を貴ぶことなし。今、先生は世の才子なり、弟、盜跖たり、天下の害をなして而して教ふことは能はず。丘、竊かに先生の爲めに之を、羞づ。丘、請ふ、先生の爲めに往いて之を説かん。

柳下季曰く、先生言ふ、人の父たるものは必ず能く、其子に詔げ、人の兄たるものは必ず能く、其の弟を教ふと。若し子、父の詔を聴かず、弟、兄の教を受けずんば、今、先生の辯と雖も將た之を奈何せんや。且つ、跖の人と爲りや、心、湧泉の如く、意、飄風の如し。強以て敵を拒ぐに足り、辯以て非を飾るに足る。其心に順へば則ち喜び、其心に逆へば則ち怒り、人を辱かしむるに言を以てし易し。先生必ず往くこと無かれと。

孔子、聽かず。顔回、馭と爲り、子貢、右と爲り、往いて盜跖を見る。盜跖乃ち方に卒徒を太山の陽に休し、人肝を膾にして而して之を餽ふ、孔子、車より下り

て而して前み、謁者を見て曰く、魯人孔丘、將軍の高義を聞き、敬んで謁者に再拜すと。

謁者入つて通す。

盜跖之を聞て大に怒り、目は明星の如く、髪は上つて冠を指す。曰く、此れ夫の魯國の巧僞人孔丘に非ずや。我が爲めに之に告げよ。爾、作言造語して、妄りに文武を稱し、枝木の冠を冠り、死牛の脊を帶び、多辭繆説して、耕さずして而して食ひ、織らずして而して衣、唇を搖かし舌を鼓し、擅まゝに是非を生じて、以て天下の主を迷はし、天下の學士をして其本に反らざらしめ、妄りに孝弟を作して而して封侯富貴を、徼倖するものなり。子の罪大にして極めて重し。疾く走り歸れ。然らずんば我將に子の肝を以て晝餽の膳を益さんとすと。

孔子、復た通じて曰く、丘、幸を季に得たり、願はくは履を幕下に望まんと。謁者復た通す。

盜跖曰く、來り前まじめよと。

孔子趨て而して進み、席を避けて反り走り、盜跖を再拜す。

盜跖大に怒り、兩ながら其足を展べ、劔を案じ目を瞋らし、聲、乳虎の如し。曰く、丘來り前め、若、言ふ所吾が意に順はば則ち生きん。吾が意に逆はば則ち死せん。

孔子曰く、丘、之を聞く、凡そ天下に三徳あり。生れながらにして長大美好なること無双、少長貴賤見て而して、皆之を説ふは此れ上徳なり。知、天地を維ぎ、能、諸物を辨するは此れ中徳なり。勇悍果敢にして衆を集め、兵を率ゐるは此れ下徳なりと。凡そ人、此一徳あるものは以て、南面して孤と稱するに足る。今、將軍此三者を兼ね。身の長、八尺二寸、面目光あり、唇は激舟の如く、齒は齊貝の如く、音は黃鐘に中る。而して名けて盜跖と曰ふ。丘、竊かに將軍の爲めに耻ぢて取らず。將軍、臣に聽くに意あらば、臣、請ふ、南、吳越に使し、北、齊魯

に使し、東、宋衛に使し、西、晋楚に使し、將軍の爲めに大城數百里を造り、數十萬戸の邑を立て、將軍を尊んで諸侯と爲さしめん。天下と更始して、兵を罷め卒を休め、昆弟を收養し、先祖を共祭せば、此れ聖人才子の行にして而して天下の願なりと。

盜跖大に怒つて曰く、丘、來り前め。夫れ規るに利を以てすべくして、而して諫むるに言を以てす可きものは、皆愚陋なる恒民の謂のみ。今、長大美好、人見て而して之を説ふものは、此れ吾が父母の遺徳なり。丘、吾を譽めずと雖も、吾れ獨り自ら知らざらんや。且つ、吾れ之を聞く。面のあたり人を譽むるを好むものは亦背いて而して之を毀るを好むと。今、我に告ぐるに大城衆民を以てするは、是れ我を規るに利を以てして而して恒民として我を畜ふなり。安んぞ長久なる可けんや。城の大なるものは天下より大なるは莫し。堯舜天下を有ちしも、子孫錐を置くの地無し。湯武立つて天子たりしも而かも後世絶滅す。其利、大なるを以て

の故に非ずや。且つ、吾れ之を聞く、古は禽獸多くして而して人民少し、是に於て民皆巢居して以て之を避け、晝は橡栗を拾ひ、暮は木上に棲む。故に之を名けて有巢氏の民と曰ふ。古は民衣服を知らず。夏は多く薪を積み、冬は則ち之を煬く。故に之を命けて知生の民と曰ふ。神農の世、臥せば則ち居居、起てば則ち子于。民其母を知て其父を知らず。麋鹿と與に共に處り、耕して而して食ひ、織つて而して衣、相害するの心有ること無し。此れ至徳の隆なり。然り而して黄帝徳を致すこと能はず、蚩尤と涿鹿の野に戦ひ、流血百里。堯舜作つて羣臣を立つ。湯は其主を放ち武王は紂を殺す。是より後、強を以て弱を陵ぎ、衆を以て寡を暴ぐ。湯武以來皆亂人の徒なり。今、子、文武の道を修め、天下の辯を掌り、以て後世に教ふ。縫衣淺帶、矯言僞行、以て天下の主を迷惑せしめて而して、富貴を求めんと欲す。盜、子より大なるは莫し。天下何が故にか、子を謂つて盜丘と爲さずして、而して乃ち我を謂つて盜跖とする。子、甘辭を以て子路に説て、而し

て之を従はしめ、子路をして其危冠を去り、其長劍を解て、而して教を子に受けしむ。天下皆曰く、孔丘能く暴を止め非を禁ずと。其卒りや、子路、衛君を殺さんと欲して而して事成らず。身、衛の東門の上に蒞せらる。是れ子が教の至らざるなり。子自ら才子聖人と謂ふか、則ち、再び魯に遂はれ、迹を衛に削られ齊に窮し、陳蔡に圍まれ、身を天下に容れられず。子、子路に蒞せらる、この此思を教へ、上以て身の爲めにするなく、下以て人の爲めにするなし。子の道、豈に貴ぶに足らんや。世の高しとする所は黄帝に若くは莫し。黄帝尙ほ全徳なる能はずして、而して涿鹿の野に戦つて流血百里。堯は不慈、舜は六孝、禹は偏枯、湯は其主を放ち、武王は紂を伐ち、文王は羸里して拘はる。此六子は世の高しとする所なり。之を孰論するに皆、利を以て其眞を感はして、而して強ひて其情性に反す。其行乃ち甚だ差ぶ可きなり。世の所謂賢士、伯夷、叔齊は孤竹の君を辭して、而して首陽の山に餓死し、骨肉葬らず。鮑焦は行を飾り世を非り、木を抱い

て而して死す。申徒狄は諫めて而して聽かれず、石を負ふて河に没じ、魚鼈の爲めに食はる。介子推は至忠なり。自ら其股を割いて以て文公に食はしむ。文公、後之に背く。子推怒つて而して去り、木を抱いて而して燔死す。尾生は女子と梁下に期す。女子來らず、水至れども去らず、梁柱を抱いて而して死せり。此四者は磔犬流豕と、瓢を操つて而して、乞ふ者とに異なること無し。皆、名に離り死を輕んじ、本を念ひ、壽命を養はざるものなり。世の所謂、忠臣なるものは王子比干、伍子胥に若くは莫し。子胥は江に沈められ、比干は心を剖かる。此二子は世に謂ふ忠臣なり。然れども卒に天下の笑となる。上より之を觀て、子胥、比干に至る迄、皆貴ぶに足らざるなり。丘の我に説く所以のもの、若し我に告ぐるに、鬼事を以てせば、則ち我れ知ること能はざるなり。若し我に告ぐるに、人事を以てするもの、此れに過ぎずんば、皆吾が聞知する所なり。今、吾れ、子に告ぐるに人の情を以てせん。目は色を視んことを欲し、耳は聲を聽かんことを欲し

口は味を察せんことを欲し、志氣は盈たんことを欲す。人、上壽は百歲、中壽は八十、下壽は六十、病瘦、死喪、憂患を除いて、其中、口を開て而して笑ふもの一月の中、四五日に過ぎざるのみ。天と地とは究まりなくして人の死するは時あり。時あるの具を操て而して、窮まりなきの間に託す。忽然たること、騏驥の馳せて隙を過ぐるに異なるなきなり。其志意を説ばせ、其壽命を養ふこと能はざるものは皆、道に中る者に非ざるなり。丘の言ふ所は、皆、吾の棄つる所なり。亟かに去り走り、歸れ、復之を言ふ無かれ。子の道は狂々汲々たる詐巧虚偽の事なり。以て眞を全うす可きに非ざるなり。奚ぞ論するに足らんやと。

孔子再拜し、趨走して門を出づ。車に上り轡を執らんとして三たび失し、目、茫然として見るることなく、色、死灰の若し。軾に據り頭を低れて、氣を出すこと能はず。歸つて魯の東門外に到り、適々柳下季に遇ふ。柳下季曰く、今日、闕然數日見ず。車馬、行色あり、往いて跖を見る微きを得んや。孔子、天を仰で而して

歎じて曰く、然り。柳下季曰く、跖、汝の意に逆ふこと、前の若くなること無きを得んや。孔子曰く、然り。丘は所謂、病無くして而して自ら炙するなり。疾く走らん。虎頭を料で虎須を編む。幾んど虎口を免れざらんせし哉と。

本文は、莊子が孔子と云ふ大人物を假り來て、世の道學者流を代表せしめ、盜跖と云ふ大盜を捕へ來て、人間の本能的主張を代辯せしむ。其滔々と述べ來り、叫び來る所のものは、近世の唯物的・自然主義者の言に似たり。頗る極端なる放論の如くにして然も、眞理を含むこと多大なり。莊子、尙ほ、滿苟得をして本能主義を叫ばしむ。

子張、滿苟得に問ふて曰く、蓋ぞ、行を爲さざる。行無ければ則ち信せられず。信せられざれば則ち任せられず。任せられざれば則ち利ならず。故に之が名を觀之が利を計つて而して、義眞に是れなり、若し名利を棄つれば之を心に反かん。則ち夫の士の行を爲す、一日も爲さざる可からざらんや。

滿苟得曰く、耻なきものは富み、信多きものは顯はる。夫の名利の大なるものは、幾んど耻なくして而して信なるに在り。故に之が名を觀、之が利を計りて而して信、眞に是れなり。若し名利を棄つれば之を心に反かん。則ち夫の士の行を爲す、其天を抱かんか。

子張曰く、昔者桀紂、貴、天子と爲り富、天下を有てり。今、臧聚に謂つて、汝の行、桀紂の如しと曰へば則ち、忤色あり。服せざるの心あるものは小人も賤しむ所なればなり。仲尼墨翟、窮して匹夫たり。今、宰相に謂つて子の行、仲尼、墨翟の如しと曰へば則ち、容を變じ色を易へ、足らずと稱するものは士、誠に貴ければなり。故に勢、天子たるも、未だ必ずしも貴からざるなり。窮して匹夫たるも、未だ必ずしも、賤しからざるなり。貴賤の分は、行の美惡に在り。

滿苟得曰く、小盜は拘はれ、大盜は諸侯となる。諸侯の門に義士存す。昔者桓公小白、兄を殺し、嫂を入れて、而して管仲臣となる。田成子常、君を殺し、國を

窃んで、而して孔子、幣を受く。論は則ち之を賤しとせんも、行は則ち之れに下れり。則ち是れ、言行の情、胸中に悖戦するなり。亦拂らずや。故に書に曰く孰れが悪、孰れが美、成る者を首となし、成らざるものを尾となすと。

子張曰く、子、行を爲さずんば、即ち將さに、疏戚倫なく、貴賤義なく、長幼序なからんとす。五紀、六位、將さに何を以て別を爲さんとするかと。

滿苟得曰く、堯は長子を殺し、舜は母弟を流す。疏戚倫あるか。湯、桀を放ち、武王、紂を殺す。貴賤義あるか。王季、適となり、周公、兄を殺す、長幼序あるか。儒者、辭を偽り、墨者、兼愛す、五紀、六位、將た別あるか。且つ子は名の爲めにするを正しとし、我は利の爲めにするを正しとせんに名利の實、理に順はず。道に監みず。吾れ日に子と無約に訟へしとき、曰く、小人は財に狗ひ、君子は名に狗ふと。其の情を變じ其性を易ふる所以は則ち異なり。乃ち其爲す所を棄て、而して其爲さざる所に狗ふに至ては則ち一なり。故に曰く、小人たること

無かれ、反りて而の王に狗へ。君子たること無かれ、天の理に従へ。若くは枉、若くは直、而の天極に相、四方を面觀して時と與に消長せよ。若くは是、若くは非、而の圓機を執り、而の意を獨成して、道と與に徘徊せよ。又而の行を轉ずる無かれ。而の義を成す無かれ。將に而の爲す所を失はんとす。而の富に赴く無かれ。而の成るに狗ふ無かれ。將に而の王を棄てんとす。比干、心を剖かれ、子胥、眼を扶らる。忠の禍なり。直躬、父を證し、尾生溺死す、信の患なり。鮑子、立ちながら乾し、勝子、自ら理せず。廉の害なり。孔子、母を見ず。匡子、父を見ず。義の失なり。此れ上世の傳ふる所、下世の語る所。以て士たるもの、其の言を正しくして、其の行を必とす。故に其の殃に服し、其の患に離るなりと。莊子が盗跖、滿苟得をして云はしめ居る所のものは、實に人間赤裸々の告白にして吾人は之れを讀んでニーチエの超人を聯想せざるを得ざるなり。二人者の言ふ所のものは、形式的道德主義を排斥して個人主義、生命主義、自然主義の主張をなせる

なり。其言論に熱あるは、其れが自信の高潮にして、生命の真流なればなり。吾人は此二人者に於て、潑瀾たる自由人、本能的生活に躍動する超人を見るなり。吾人は此二人者に於て、莊子の人間味を、十分に發見するを得たるを喜ぶ。若しそれ莊子が、處世法の秘訣として、無用の用を説く所は、二人者の熱濃的なると、一見大に相異なるが如きも、其實自由人たることを憧憬し、何處迄も個人主義にて押し通す點に至ては、一貫せり。強て其差別を云へば、二人者は莊子の人間の直観にして無用の用を説くあたりは已に、洗練せられたる莊子流と云ふ可きか。

惠子、莊子に謂つて曰く、吾れに大樹あり、人之れを樗と謂ふ。其の大本は擁腫にして繩墨に中らず。其の小枝は卷曲にして規矩に中らず。之れを塗に立つるに匠者も顧みず。今、子の言、大にして用なし。衆の同じく去る所なり。

莊子曰く、子、獨り、狸性を見ずや。身を卑うして伏し、以て敖ぶものを候ふ。東西に跳梁して、高下を避けず。機辟に中り、罔罟に死す。今夫れ斄牛は其の大

さ垂天の雲の若し。此れ能く大たり。而るに鼠を執ふること能はず。今、子、大樹ありて、其用なきを患へば、何ぞ之れを無何有の郷、廣莫の野に樹て、彷徨乎として其の側に無爲に、逍遙乎として其の下に寢臥せざるや。片斧に天せられず。物の害するなき者は、用ふ可き所なきも、安んぞ困苦する所あらんや。

### 第三章 儒教者流

#### 第一節 孔子

之れを仰げば彌々高く、之れを鑽れば彌々堅し。之れを瞻れば前に在り、忽焉として後に在り。夫子循々然として善く人を誘ふ。我を博くするに文を以てし、我を約するに禮を以てす。罷めんとして能はず。既に吾才を竭くす。立つ所ありて卓爾



たるが如し。之れに従はんと欲するも、由るなきなり、とは孔門第一の弟子、顔淵の其師を讃仰せるの語なり。以て、孔子の人格の偉大なりしを、想察するに足る。されど、余想ふに學者、釋迦、孔子、キリストを世界の三聖と稱するものゝ、此中にて孔子は、常識的に大成せる人物にして、他の二聖の天才的なることは、其選を異にするが如し。吾人は釋迦に於ては、其思想の深遠圖る可からざるものを感じ、キリストに於ては、直覺的インスピレーションの偉大なる閃光を感ずと雖も、孔子に於ては、此等の何れをも感せず。吾人が論語を心讀して、直感する所のものは、徹頭徹尾、常識の透徹にして、超人的の偉大さは、全く感受する能はず。是れ、孔教の長く廣く、教訓教化の好資料となる所以なり。

吾れ、十有五にして、學に志す。三十にして、立つ。四十にして、惑はず。五十にして、天命を知る。六十にして、耳順ふ。七十にして、心の欲する所に従ひ矩を踰えず。

見る可し、孔子の常人的、規範的に發達せることを。其常人的、規範的の發達こそ孔子が、吾人凡人の修養模範として、極めて適切なる人物なることを想はしむるものにして、釋迦、キリストの如きは、餘りに天才的にして、吾人凡人の追隨をゆるさず。故に余は、孔子を以て、常識の大家又は、凡人の非凡化と云はんとす。

孔子は、西紀前五百五十一年即ち、我緜靖帝の三十一年、魯の昌平郷陬色（今の山東省曲阜縣）に生る。魯は、周公の子、伯禽の封せられし所に於て、夙に周の文化を吸收せる國なり。時は春秋の末にして、周の威力殆んど地に墮ちしかば、孔子は之れを挽回して、周公時代の盛況に復興せんことを以て、終生の目的とせり。

然り、孔子は述べて作らず、信じて古を好むと云ひ、周は二代に監み、郁々乎として文なるかな、我は周に従はんと云ふ。則ち孔子の理想時代は、周の盛世にして孔子の理想的人物とせるものは、堯、舜、禹、湯、文、武、周公なり。中にも周公且を最も現實的理想人物と爲せるものゝ如く、「甚しきかな、吾が衰へたること、久し

いかな、吾れ復た夢に周公を見ず」と歎息せり。さて此等理想的人物を模範として春秋の世を、周の盛世の状態にまで、恢復するが爲めには、固より、政治の力に依らざる可からざるは論なきが、孔子の政治上の主義は、王道主義即ち、徳治主義なりき。孔子は其主義を實現する機會を得んが爲めに、天下を周遊せるが、結局一生涯好機を得ざりき。其好機を得ざりしは當然のことにして、生存競争の激烈なる春秋の末に當て、徳治主義を實現せんとするが如きは、全然、時世を觀るの明なかりしものと云はざる可からず。

子曰く、政を爲すに徳を以てすれば、譬へば、北辰の其所に居て、衆星の之れに共ふが如し。季康子、政を孔子に問ふ。曰く、如し、無道を殺して以て、有道を就さば如何。孔子對へて曰く、子、政を爲す焉んぞ、殺を用ひん。子、善を欲せば、民善なり、君子の徳は風、小人の徳は草、草之れに風を上ふれば、必ず偃す。政治家の人格の中心を、道德的素養に置くは、極めて大切なる可きも、億兆の不完

全なる民衆を統御するには、適切の政策なくては到底、其安寧幸福を得べからず。管仲の如きは、之れありしが爲めに、彼れが如き成功あり。論より證據、孔子は兎も角も一度は、魯の大司寇の重位にまで就きしも、其部下をすら徳化するを得ざりしに非ずや。孔子と云ふ北辰は、其所に居たるも、部下たる衆星は之に共はざりしに非ずや。孔子と云ふ大君子の徳を、民衆に上へしにも係はらず、魯の民衆は偃せざりしに非ずや。

子禽、子貢に問ふ。曰く夫子の是の邦に至るや、必ず、其政を聞けり。之を求むるか。抑もまた之を與ふるか。子貢曰く、夫子は溫良恭謙讓以て之を得たり。夫子の之を求むるや、其れ諸れ人の之を求むるに異なるか。

とは云ふものゝ、其は唯、當時生存競争の激烈なるものから、諸侯は、大手腕家を望むこと、大旱の雲霓に於けるが如きものから、孔子の周遊に際して、諸侯より、政治上の意見を、諮問せられしまでなるべく、しかも、一人として孔子の手腕を、

十分に振はしめんとせざるものなく、孔子も遂に、知己の得がたきを知り、子、陳に在りて曰く、歸らんか。歸らんか。吾黨の小子、狂簡なり。斐然として章を成せども、之を裁するの所以を知らず。

と見切りをつけて、其周遊を中止せり。孔子の政治的理想は、遂に實現の時を得ずして終りぬ。尙、孔子は「民は之を由らしむ可し。之を知らしむ可からず」と云へるよりすれば、老子と同じく、支那一流の民を愚にして治むるの主義を、有したるものと見る可し。

然り、余は孔子は到底、大政治家たる資格の人物には非ざりしものと、斷言せんとするものなるが、一面孔子は、大教育家として、殆んど、天成の人物たりしことを想ふなり。孔子の弟子、三千、身、六藝に通ずるもの七十餘人と云ふもの、如何に其教育的成功の大なりしかを察するに足る。況んや、顔回を、筆頭とせる、孔門十哲を出せるに於てをや。

第一に孔子は、前にも述べし如く、常識の透徹せる人物にして、智情意の稀れに見る、圓滿に發達せる人物なり。而して、其十有五にして學に志してより、七十にして、心の欲する所に依つて、矩を越えずの、大理想的境域に達するまでの行程は少しも、ギャツプすることなく、人間の一生の各時代の、類型的完成を遂げつゝ進歩せり。則ち夫子其れ自身が、弟子の最好模範たる資格を完具せることは、教育と云ふ仕事は所詮、教師の人格を根本的中心としてのみ、其目的を達し得るものなる原則より見て、孔子の教育家的成功の當然なるを想はしむ。

子貢曰く、夫子の文章は得て聞く可し。夫子の性と天道とを言ふは得て聞く可からず。

夫れ、性論や、天道論は、之れを推進すれば全く、純正哲學上の論となり、到底論結を得べからずして、論理上の遊戯とならずんば幸なり。孟子と告子との性論の如き、之を證して餘りあり。常識的なる孔子は、之を看破せるものか、

性、相近し。習、相遠し。唯、上智と下愚とは移らず。

と簡単に説明せるのみ。全く、之れに對する學究的の態度なし。

子曰く異端を攻むるは斯れ害なるのみ。

是れ、博引傍證を排せるなり。他山の石と見て、反對派の學説を研究するも、害ありとしたりなり。孔子の怪力亂神を語らず、宗教問題に足を踏み入れざりしは、所詮、宗教は奇蹟を説き、迷信に墮するを免れざることを看破せる、常識觀の致せる所なる可し。

子曰く、富にして求む可くんば、執鞭の士と雖も、吾亦之を爲さん。如し、求む可からずんば、吾が好む所に従はん。

浮雲に乗るが如き、不義の富は排したるも、正當に得べき富貴は、辭する所にあらず。キリストの「富者の天國に入るの難きは、駱駝の針の穴をくぐるが如し」と云へる、釋迦の「妻子、珍寶及王位、臨命終時、不墮者」と悟れるとは、全然相異なる

ものあり。

葉公、孔子に語つて曰く、吾黨に躬を直くする者あり。其父、羊を攘んで而して子之を證す。孔子曰く、吾黨の直き者は、是れに異なる。父は子の爲めに隠し、子は父の爲めに隠す。直きこと其中に在り。

常識的なる、孔子の、常識と離る可からざる、人情主義なるを見る可し。

第二、されど、孔子を以て、常識的に完成せる、平凡なる好々爺と考ふれば、其は大なる誤りなり。人物に缺ぐ可からざる所のものは、透徹せる常識と共に、確固たる信念なり。殊に教育者に於て然り。偉大なる教育家孔子に、確固たる信念の存したるは云ふ迄もなし。孔子の宋に行きて、桓魋の難に會ふや、「天、徳を予に生ず。桓魋其れ予を如何せん」と。又匡に於て、魯人陽虎嘗て、亂暴を爲せり。孔子の偶々匡の地を過ぐるや、其容の似たるものありし爲めか、匡人相集まつて孔子を圍む。

文王既に没す。文、茲に在らずや。天の斯文を喪さんとするや、後死者は斯文に與るを得ざるなり。天の斯文を喪さんとするや、匡人其れ子を如何せん  
と叫んで、泰然自若たり。然らば、孔子の此信念は、何れより得たりや。其は一面支那傳統の、目的觀的天命觀にありしは云ふ迄もなきが、一面、道を信すること篤き、彼れの良心の力に、依るものと云はざる可からず。

朝に道を聽て夕に死すとも可なり。

とは、彼れの譎らざる述懐なる可し。

葉公、孔子を子路に問ふ。子路對へず。子曰く、女、奚ぞ曰はざる。其の人と爲りや、憤を發して食を忘れ、樂んで憂を忘れ、老の將きに至らんとするを知らずと。

子曰く、吾れ嘗て終日食はず。終夜寝ねず。以て思ふ。益なし。學ぶに如かず。

此等の語は、篤學を證して餘りあり。則ち孔子は、功利的に學を爲すに非ずして、

道即人生、人生即道、道なき所、人生なしと信じたればこそ、死に至る迄、道を修して怠らざりしなり。聞く、ソクラテスは死に臨んで靈魂不滅を説く。そこに大に宗教的色彩濃厚なり。孔子は、一言も靈魂問題に觸れずして而して尙且つ、道を信するの牢固なるは、其良心の如何に耿々たりしかを、證して餘りあり。

子曰く、三軍は帥を奪ふ可きなり。匹夫も志を奪ふ可からざるなり。

匹夫且然り、況んや士たるものに於てをや。信念に基く節操は、孔子の最も重んずる所にして、教育者の一世に超然たるもまた、之れあればなり。

子曰く、歳寒くして然る後、松柏の凋むに後るゝを知る。

司馬牛、君子を問ふ。子曰く、君子は憂へず懼れずと。曰く、憂へず、懼れず、之れを君子と謂ふかと。子曰く、内に省みて、疚しからずんば、夫れ何をか憂へ、何をか懼れんと。

又

以て、六尺の孤を託す可く、以て、百里の命を寄す可し。大節に臨んで而して、奪ふ可からず。君子人か、君子人なり。

士は以て、弘毅ならざる可からず。任重くして道遠し。仁、以て己れが任と爲す亦重からざらずや。死して而して後已む。亦遠からずや。

とは、曾子の言へる所なるも、顔回に次ぎて、孔門三千の學徒中最も、德行家の名ありし曾子の言は、やがて孔子の本旨なりと見て可なり。

第三、孔子の教育の目的とせる所は、云ふ迄もなく、仁を體得せる人物の養成にあり。已に仁の體得を目的とするよりして、孔子は、徹頭徹尾、實踐躬行を重んせり。其は論語の到る處に輝けり。

子曰く、弟子入つては則ち孝。出でゝは則ち弟。謹んで而して信。汎く衆を愛し仁に親しみ、行ふて餘力あらば則ち以て、文を學ぶ。

子夏曰く、賢を賢として色に易へ、父母に事へて、能く其力を致し、君に事へて

能く其身を致し、朋友と交るに、言ふて信あらば、未だ學ばずと曰ふと雖も、吾は必ず之を學びたりと謂はん。

子曰く君子は、食は飽くことを求むるなく、居は安きを求むるなく、事に敏にして、言に慎しみ、有道に就て而し正さば、學を好むと謂ふ可きなり。

哀公問ふ。弟子孰れか、學を好むと。孔子對へて曰く、顔回なる者あり。學を好む。怒りを遷さず。過ちを二たびせず。不幸短命にして死せり。今や則ち亡し。學を好むものを聞かざるなり。

子曰く、三人にして行へば必ず、我師有り。其善者を選んで之に従ふ。其善ならざる者は之を改む。

されば、言行一致せざる人物に對しては、毫も假借せず。

宰予晝寢ぬ。子曰く、朽木は、彫る可からず。糞土の牆は、朽る可からず。予に於てか、何ぞ誅めん。子曰く、始め吾れの人に於けるや、其言を聽て、其の行を

信せり。今、吾れ人に於て、其の言を聽いて、其の行を觀る。予に於てか、是を改む。

さすがの宰予も、穴に入りたき心地したるならん。孔子が、子路を喜ばざりしも、子路の勇を憑みて、大言壯語せるが爲めなり。

然りと雖も、本來周の文化を理想とし、己れ自らも、頗る學問を好みたる孔子のことなれば、決して文事を輕んじたるには非ず。

子曰く、質、文に勝てば則ち野。文、質に勝てば則ち史。文質彬々として然る後に、君子なり。

固より、こゝに文と云ふは必ずしも、學問のみ指せるには非ざるも、君子の文飾としては所詮、學問を第一要素となさざる可からず。されば、孔子の最も忌む所のものは、口耳三寸の學なり。

子曰く、道聽塗説は、徳の棄なり。

ノートの暗誦に依て、卒業證書、免許狀をさへ握れば、能事終れりと思へる今時の學生は、此句を讀んで、まさに愧死す可し。

實踐躬行主義の孔子が、教化の最高の理想として遂に、不言實行を唱ふるに至るは、當然の歸結なり。

子曰く、予、言ふ無からんと欲す。子貢曰く、子如し、言はずんば則ち、小子何をか述べん。子曰く、天何をか言ふ。四時行はる焉。百物生する焉。天何をか云ふ。

孔子と相比せらるゝ西洋の聖人、ソクラテスも徳行家なりしが、彼は智徳一體説を採りたるものから、概念の明晰を非常に重んじたりしが、孔子は此點、大にソクラテスと相異なるものあり。孔子の終生説く所のものは、仁の一字に歸着すと云ふ可きも、仁に付ての明瞭なる概念は、遂に之れを説かず。應病投藥、見人説法的に論語到る所に散見せるのみ。其中にては、問者が孔門の第一人者たる顔回なりしを

以て、之れに答へたる克己復禮説は、最も孔子の眞意に、合へるものと見る可きか。兎まれ、孔子は決して、後世宋儒の説きたるが如き、哲學的見解は、之れを懐抱せざりしならん。固より、詩書を刪定し、易の十翼を述作せる孔子の學殖は、豊富なるものありしなる可きも、徹頭徹尾、常識的にして實踐躬行主義なりし孔子の爲人より推して、余は、仁に對してすら、學究的の解明を、爲さんとせざりしものと思ふなり。勿論顔淵に答へて、「己れに克ち、禮に復するを、仁と爲す。一日己れに克ち、禮に復すれば、天下仁に歸す」と迄、云へるより見てもまた、顔淵にすら、全仁を許すこと三月に過ぎざりしより見ても、仁の大徳たるを察す可きも、其は躬行體現の上より見ての問題にして、哲學的攻究の問題としてには非ざるなり。

然らば仁の體現實踐法は如何。

子曰く、參や、吾道、一以て之を貫く。曾子曰く、唯、子出づ。門人問ふて曰く。何の謂ひぞや。曾子曰く、夫子の道は忠恕のみ。

則ち、忠恕は仁を體現する方法なり。然らば忠恕とは如何。己れの欲せざる所は、之れを人に施す勿れとなり。

尙、仁の涵養本源として、孝弟を探りたるは、頗る心理的實際的なり。

有子曰く、其の人を爲りや孝悌にして而して、上を犯すを好むもの鮮し。上を犯すを好まずして、亂を作すを好む者は、未だ之れあらず。君子は本を務む。本立て道生ず。孝弟は其れ、仁を爲すの本か。

是れ能く、孔子の本旨を、傳ふるものなり。夫れ、仁の含蓄中、最も大切なる要素の、親愛なる可きは、異論なし。而して、人間親愛の淵源は、母子の愛情にして、此愛の洗禮を受けて始めて、人間味を生ずるなり。之れを擴張展發して一家より一國、天下に及ぼすなり。

第四、六藝は支那古來の重要教科目なりしが、孔子は就中、詩、禮、樂の三者を重んじたり。



詩に興り、禮に立ち、樂に成る。

人格涵養の根本的、中心的教科として、此三者を見る時、余は、其の價値の甚だ大なるものあるを知る。詩は、智育にも、情育にも、關係少なからず。禮は、智情意三育に亘り、特に、情意の訓練に大切なり。樂の情操涵養に功ある、言を待たず。實踐躬行を、最も重んじたる孔子が、意志の鍛鍊を尊重したる可きは、察するに餘りあるが、孔子の音樂を好みたるは、其天性とも云ふべきものならんも、余は孔子は、教育上、最も情育を重んじたるものから、特に音樂を尊重するに至りしものと見んとす。

子、齊に在り、詔を聞くこと三月、肉味を知らず。曰く圖らざりき、樂を爲るの斯こに至らんとは。

孔子嘗て、子路、曾皙、冉有、公西華等の弟子をして、各其抱負を述べしめたるが何れも政治家となりて、廟堂に手腕を振はんことを望めり。然るに獨り曾皙は瑟を

鼓して、友人共の抱負を微聽せるのみ。依て孔子は、之れに瑟を鼓するをやめしめて、其志を謂はしむ。

莫春には、春服既に成り、冠者五六人、童子六七人。沂に浴し、舞雩に風し、詠じて歸らんと。夫子喟然として歎じて曰く、吾れは點(曾皙の字)に與みせんと。余は之れを以て、孔子が單に風月を愛したるが爲めのみとは、云はざるなり。孔子が頗る音樂を好み、詩を愛したることより推して、之れを以て、如何に孔子が、情操の涵養せられたる人物を、愛したるかを見んとするものなり。

第五、孔子は、教授の方針、方法に付て、千古の卓見少なからず。

子曰く、學んで思はざれば則ち、罔く、思ふて學ばざれば則ち、殆し。

學は新智識を得るなり。思は之れを舊觀念に統一するなり。何れの一も廢す可からず。今の學を爲すもの、學のみあつて思足らず。不消化の智識多き所以なり。

子曰く、由、汝に之を知るを誨へん。之を知るを之を知ると爲し、知らざるを知

らずと爲す。是れ知なり。

成心あつては學進まず。學者は、虚心怛懷ならざる可からず。此言、ソクラテスの教授の秘訣と、甚だ相似たるものあり。

子曰く、之を知る者は、之を好む者に如かず。之を好む者は、之を樂む者に如かず。

智識を人格に迄、溶融透徹せしめずんば、措かざるの趣旨を見る可し。

子曰く、憤せざれば、啓せず。悱せざれば、發せず。一隅を舉げて而て、之に示し、三隅を以て、反うせずんば復たせず。

ペスタロチーを待たずして、二千五百年の昔已に、開發教授を提唱せるものなり。其卓見敬服の外なし。

子曰く、吾れ知あらんや。知無きなり。鄙夫有りて我に問ふも、空々如たり。我兩端を叩て而して竭す。

ソクラテスの稱して、産婆法と云へるものにして、眞に實際教授の秘訣なり。

第六、教育は、個性を觀察して然る後、之れに適應せしむ方法を、探らざる可からず。

子曰く、其以てする所を視。其由る所を觀。其安んずる所を察すれば、人安んぞ瘦さんや。人焉んぞ、瘦さんや。

以てする所と云ふは、人々の言行なり。由る所と云ふは、心術なり。安んずる所とは、理想とする所なり。如何にも、人物の觀察法としては、極めて要領を得たるものなり。かゝる觀察法に依て、弟子の個性を見、それを参考とし尙且、其人物の境遇事情を察して、仁を説き、孝を教へ、處世の法を諭す。孔門多士濟々たりしもの故ありと云ふ可し。

以上、數へ來れる所を綜合すれば、孔子の大教育家たりしことは、極めて明白なる可く、恐く、教育家としての、あらゆる資格を完具せること、孔子の如きは、古

今東西、其比儔を見ずと云ふも、過言にあらず。余は、西洋教育者の理想と仰がれ居る、ベスタロチーすら、之れを孔子に比すれば、幾多の遜色ある可きを信ず。

孔子の弟子三千、うち六藝に通ずるもの七十餘人、中にも最も傑出せるものは所謂、四科、十哲にして、釋迦の十大弟子、キリストの十二使徒に比す可し。德行には、顔淵を第一として、閔子騫、冉伯牛、仲弓あり。政事には、冉有、季路、言語には、宰我、子貢、又文學には、子游、子夏あり。想ふに、孔子の没後、此等多数の弟子、中國各地に孔教を宣傳し、遂に、儒教の勢力、牢固拔く可からざるものとなりしならん。然り、孔子の政治家としての不得意は、彼れをして教育に専心せしむることとなり、其七十二年の長き生涯と、彼れの非凡なる教化力とは、多数の後繼者を遺し、尙且、儒教の主張は、支那正統派の思想を、最も能く代表せるものから遂に所謂、他の諸子百家を壓倒して、長く支那後世の、思想界を支配することとなり。

因に云ふ、儒教は、論語を中心として、天下に宣傳せられたるものなるが、後、宋の朱子に至り、大學、中庸、孟子と合せて四書と稱し、儒家の最も重んずる所となれり。大學は、もと、禮記中の一節なりしが後世之れを抜き出して、四書の一に數ふるに至れるなり。大學は、大學教育の要領を述べたるものにして、三綱領、八條目あり。三綱領とは、明德を明かにすること、民に親むこと、至善に止まることとなり。八條目とは、格物、致知、誠意、正心、修身、齊家、治國、平天下是なり。

## 第一節 子思と孟子

中庸は、孔孫子思の著なり。論語の中にも、孔子の言として中庸の徳たる其れ至れるかな。民鮮きこと久し。

とあり。元來、儒家の仁と云ひ、禮と云ひ、中庸と云ふもの、之れを究極すれば、儒家の探る所の根本道の異名にして、其實は相異なるものに非ず。子思の時代は、

之れを孔子の時代に比すれば、老、莊、楊、墨を初め、幾多の思想、天下に流布して、互に相競争したれば、儒教もさすがに、常識的實踐躬行にのみ、止まるを得ずして、純理の研究の必要を生じたるなる可く、其一閃光として現はれたるものが即ち、子思の中庸なり。故に中庸は、儒教の所依經中にては、最も理論の高尙なるものとせらる。開卷第一、「天命、之れを性と謂ふ。性に率ふ、之れを道と謂ふ。道を修むる、之れを教と云ふ。道は、須臾も離る可からず。離る可きは、道に非ざるなり」と喝破す。則ち天道は即、人道にして、人道は即、天道なり。子思は、之れを名けて、誠と云ふ。則ち誠は、天の道なり。之れを誠にするは人の道なり。豈、啻に天地の道、誠にして、人の本性も、誠なるのみならんや、萬物の本性も皆、誠なり。鳶飛んで、天に冲し、魚躍つて、淵に入るも、誠の發現なり。日月星辰の運行より、春夏秋冬の變化も、皆誠の發現ならざるなし。誠は、物の始終にして、誠ならざれば物なし。故に誠は、天人合一、物我一如の樞機なり。

喜怒哀樂の、未だ發せざる、之れを中と謂ふ。發して皆、節に中る、之れを和と謂ふ。中は、天下の大本なり。和は、天下の達德なり。中和を致せば、天地位する焉、萬物育する焉。

然らば之れが修養の實は如何。子思は尊徳性と、道問學との二綱領を擧げ、問學は更に、博學、審問、慎思、明辨、篤行の五ツに分てり。此は孔子の、學んで思はざれば、罔く、思ふて學ばざれば、殆しの言を一層明瞭にしたるものと云ふ可し。又尊徳性の方法として、子思は、慎獨の工夫を説けり。則ち、内に省みて疚しからず、屋漏に愧ぢずと云ふは是れなり。

子思の學統を受けたるものを、孟子となす。孟子は、戰國時代に生れ、儒家稀れに見る雄辯の人物なりしかば、儒家に敵する各派に對して、堂々の論陳を張れるが思想家としては、餘り、深遠の造詣ありとは覺えず。其性善論は、彼れの最も力を致せる所なるも、告子との問答を見るに、可なり詭辯多し。されど、其論辯の巧み

なることは、確かに、當代第一人者なりしならんと思はる。

さて、性善論は即ち、良心の肯定論なるが、孟子は良心と云はずして、良知、良能と云へり。

人の學ばずして能くする所のものは、其良能なり。慮らずして知る所のものは、其良知なり。

孟子は、此良知、良能の先天的なる證據として、左の如く云へり。

孟子曰く、人皆、人に忍びざるの心あり。先王、人に忍びざるの心あれば、斯に人に忍びざるの政あり。人に忍びざるの心を以て、人に忍びざるの政を行はゞ、天下を治むること、之れを掌上に運らす可し。人皆、人に忍びざるの心ありと謂ふ所以は、今人乍ち、孺子の將に井に入らんとするを見れば、皆怵惕惻隱の心あらむ。交を、孺子の父母に内るゝ所以に非ざるなり。譽を、郷黨朋友に要むる所以に非ざるなり。其聲を悪んで然るに非ざるなり。是れに由て之れを観れば、惻

隱の心なきは、人に非ざるなり。羞惡の心なきは、人に非ざるなり。辭讓の心なきは、人に非ざるなり。是非の心なきは、人に非ざるなり。惻隱の心は、仁の端なり。羞惡の心は、義の端なり。辭讓の心は、禮の端なり。是非の心は、智の端なり。人の是の四端あるや、猶其四體あるが如きなり。是の四端ありて、自ら能はずと謂ふは、自ら賊する者なり。其君能はずと謂ふは、其君を賊する者なり。凡そ我に四端あれば、皆擴めて之を充たすことを知る。火の始めて燃ゆ、泉の始めて達するが若し。苟も能く之を充たせば以て、四海を保んずるに足り、苟も之を充たさざれば以て、父母に事ふるに足らず。(公孫丑章句上)

此は、孟子の四端論として、有名なるものなるが、四端論はやがて、仁義禮智の四徳論となる。孔子は論語に、智者は惑はず。仁者は憂へず。勇者は恐れずと説き、中庸は之れを祖述して、智仁勇は、天下の三大達徳なりと説く。されど、孔子一代最も力説せるは、仁の徳なり。孟子に至て、四徳を列擧せるも、其最も力説せるは

仁義なり。

孟子梁の恵王を見る。王曰く、叟、千里を遠しとせずして来る。亦將に以て、吾が國を利するあらんとするか。孟子對へて曰く、王何ぞ必ずしも利を曰はむ、亦仁義あるのみ。

孟子曰く、仁は人心なり。義は人路なり。其路を捨て而て、由らず、其心を放て求むるを知らず。哀しきかな。人、雞犬を放つあれば則ち、之を求むるを知る。心を放つありて而て、求むることを知らず。學問の道は他無し。其放心を求むるのみ。

放心を求むるを忘るゝものは、利益の爲めに盲せらるゝが爲めなり。良知、良能は之れを喻へば明月の如く、利欲は浮雲の如し。浮雲を吹き拂へば、明月は常に皓々として輝くが如く、人苟も利欲の迷妄を除去すれば、良知、良能は其本性を發現するなり。則ち孟子は、復性説を操りたるものなるが、利欲の根本的出生に付ては、

遂に徹底的の説明を爲し得ずして、彼れの性善説も、知らず識らず二元論に陥る。

さて、仁義を體し、放心を求むるの工夫如何。孟子は、積極と、消極との兩方面より、之を説けり。消極的方法としては、寡慾と存夜氣を説く。存夜氣とは如何。人間は晝間は、利欲雜念に逐はるゝも、夜深く人靜まり、萬籟寂として聲なきの時獨り目ざめて越し方、行く末を考ふるが如き場合は、一片の良心、耿々として邪念なし。之れを夜氣と云ふ。此夜氣を存養し行く時は、人格は次第に高尚となる。

次に積極的方法としては、擴充と養氣を説く。擴充は、前に述べたる四端を擴充し行くことなり。養氣は浩然の氣を養ふを云ふ。

我れ善く吾が浩然の氣を養ふ。敢て問ふ。何をか、浩然の氣と云ふ。曰く、言ひがたし。其氣たるや、至大至剛、直を以て養ふて害すること無ければ則ち、天地の間に塞つ。其氣たるや、義と道とに配す。是れなければ餒うるなり。

苟も能く、浩然の氣を養成せんか、以て能く大丈夫の域に達するを得べし。

天下の廣居に居り、天下の正位に立ち、天下の大道を行ひ、志を得れば、民之れに由り、志を得ざれば、獨り其道を行ふ。富貴も、淫する能はず。貧賤も、移す能はず。威武も、屈する能はず。此れを之れ、大丈夫と云ふ。

孟子は元來、政治家を以て任じたるものなれば、彼れの所謂大丈夫は、其志を得れば、天下の正位に立ちて、其抱負を行ふ可きなり。其抱負は、孔子の徳治主義に則り、王道を天下に行はんとするなり。孔子の含蓄的に、仁を説きたるに對し、孟子は、明瞭に仁と共に義を高潮したると同じ筆法にて、孟子に至て、王覇の辨甚だ嚴なり。徳義を本として功利を説くは、王道なり。功利を先きとし徳義を方便とするは、霸道なり。孟子は盛んに功利を説けるも、其は徳治より來る自然のものなり。

尚、孟子に至て、君臣論の旗色、甚だ鮮明となれり。前に述べたる如く、支那は道德を以て、君位の所據となせるものなるが、孟子は之れを推進して遂に、湯武の放伐を是認するの論をなすに至れり。

齊の宣王問ふて曰く、湯は桀を放ち、武王は紂を伐つ。諸れ有りや。孟子對へて曰く、傳に之れ有り。曰く、臣にして其君を弑すること可なりや。曰く、仁を賊ふ者は、之を賊と云ふ。義を賊ふ者は、之を殘と云ふ。殘賊の人、之を一夫と謂ふ。一夫紂を誅するを聞く。未だ、君を弑することを聞かざるなり。

以て戰國時代の暴君を、戰慄せしむるに足る。後世の學者は、此は時代を警醒する對應樂ならんと云ふも、然し、孟子の君臣觀は、確かに、君を立つるは、民の爲めなりの主義なるが如し。

君の臣を視ること、手足の如くならば則ち、臣の君を視ること、腹心の如し。君の臣を視ること、犬馬の如くならば則ち、臣の君を視ること國人の如し。君の臣を視ること土芥の如くならば則ち、臣の君を視ること、寇讎の如し。

君に大禍あらば則ち、諫む。之を反覆して聽かれずば則ち、位を易ふ。と云へるが如き、共和政体の大統領觀と、何等選ぶ所なし。儒教の政治論としては

餘りに、論理的に推究し過ぎたるの非難多し。

因に云ふ、孟子の仁義禮智に、信を加へて五徳となせしは、漢の董仲舒にして、それが宋儒に至て、五常の道として遂に儒家の規範となれり。此五常を人倫に配して、父子親あり、君臣義あり、長幼序あり、夫婦別あり、朋友信ありとし、之れを五倫と云ふ。五倫五常の道は、東洋道德の真髓となる。

四書の外に、孝經なるものあり。孝經は、孔子の曾子に口授せる所なりと云ふも疑はし。然し論語と共に、古典なることは明かなり。

又四書の基く所に五經あり。書經、詩經、易、禮記、春秋を云ふ。春秋は孔子の著にして、道德眼に依りて、歴史を書けるものにして、支那後世の歴史の模範となる。他の四經は、孔子の大に研究して、刪定を試みたるものと聞く。支那にて經典と云はるゝものは、以上の諸書なり。此等四書、五經、孝經こそ、支那教育の中心書として、長く千歳にオーソリチーを有し、日本も其感化に會ひたるものなり。

### 第三節 荀子

孟子の性善論に對抗して、性惡説を唱へて下らず、大に思想界を賑はせるものは荀子なり。孟子の晩年に生れたる人物なり。荀子の性惡説は、其の天の論に基くものなるが、荀子の天論は、他の儒教論者の目的觀的なりしに對して、機械觀を採りしものゝ如し。

天行常あり。堯の爲めに存せず。桀の爲めに亡びず。之れに應ずるに、治を以てすれば則ち吉、之に應ずるに、亂を以てすれば則ち凶。本を強めて、用を節すれば則ち、天も病ましむること能はず。道に循ひて忒はざれば則ち、天も禍すること能はず。故に水旱も、之を飢えしむること能はず。寒暑も、之を疾ましむること能はず。妖怪も、之を凶ならしむる能はず。本荒れて用侈ければ則ち、天も之を富ましむること能はず。養略にして動罕れば則ち、天も之を全ふせしむる



能はず。

天を自然と解し、自力主義を高潮せる所、支那には稀れに見る卓見と云ふ可し。

天に其時あり。地に其財あり。人に其治あり。夫れ是れを之れ、能く參すと云ふ。其參する所以を捨て、其參する所を願ふは則ち、惑へり。

道は天の道に非ず。地の道に非ず。人の道<sup>おこな</sup>ふ所以なり。君子の道ふ所なり。

天は、人の寒を惡むが爲に、冬を輟めず。地は、人の遠遠を惡むが爲めに、廣を輟めず。君子は、小人の匈々たるが爲めに、行を輟めず。(天論篇)

人力を盡さずして、天に依頼するの弊を道破して痛快を極む。特に荀子が、支那人の殆んど凡てが陷られる、天災地變に對する迷信を打破せるは、誠に明智の人と云ふ可し。

星墜ち、木鳴れば、國人皆恐れて曰く、是れ何ぞやと。曰く、何も無し。是れ天地の變、陰陽の化、物の罕に至る者なり。之を怪むは可なり。之を畏るゝは非な

り。夫の日月の蝕あり、風雨の時ならざる、怪星の黨見はるゝは、是れ世として常に之れあらざることなし。上明かにして政平かならば則ち、是れ并世にして起ると雖も、傷るゝ無きなり。(天論篇)

荀子はなほ進んで、西洋近世の科學者と同く、自然の征服論をすら唱道せり。

天を大として之を思ふは、物畜して之を制するに孰れぞ。天に従つて之を頌するは、天命を制して之を用ふるに孰れぞ。時を望んで之を待つは、時に應じて之を使ふに孰れぞ。物に因て之を多しとするは、能を駛せて之を化するに孰れぞ。物を思ふて之を物とするは、物を理めて之を失ふなきに孰れぞ。物の生ずる所以に願ふは、物の成る所以を有つに孰れぞ。故に人を錯きて天を思へば、則ち萬物の情を失ふ。

見る可し。彼れが意志的努力論を高潮せるを。此論を推進し發展し行けば、遂に科學的手段に依て、其目的を貫徹せんとするの順序となりしなる可きも、孔孟を崇拜

する者徒らに多く、荀子の如きは寧ろ、儒家者流中の異端視されたること、惜みても尙餘りあり。

さて、荀子は、天に對して機械觀を持し、自然論を固持したれば、人性に對しても、孟子の如く、理想觀に捕へられずして、有りのまゝの觀察を遂げて、性惡説を唱ふ。

人の性は惡なり。其善なるは僞なり。今、人の性、生れながらにして、利を好むことあり、是に順ふ、故に爭奪生じて、辭讓亡ぶ。生れながらにして疾惡することあり、是に順ふ、故に殘賊生じて、忠信亡ぶ。生れながらにして耳目の欲ありて、聲色を好むことあり、是に順ふ、故に淫亂生じて、禮義文理亡ぶ。然らば則ち、人の性に從り、人の情に順へば、必ず爭奪に出で、犯分亂理に合して、暴に歸す。(性惡篇)

既に人性を惡となす。此惡性を増長せざらしむる爲めに、禮義の必要起る。禮義に

依て始めて、人性は方向轉換されて善をなす。

故に必ず將に師法の化、禮義の道ありて、然る後辭讓に出で、文理に合して治に歸せんとす。此を用つて之を觀るに、然らば則ち、人の性の惡なること明かなり。其善なるものは僞なり。故に枸木は必ず將に、槩栝烝矯を待つて然る後、直ならんとす。鈍金は必ず將に、鑿厲を待つて然る後、利からんとす。今、人の性は惡なり。必ず將に、師法を待つて然る後、正しく、禮義を得て然る後、治まらんとす。今、人、師法なければ則ち、偏險にして正しからず。禮義なければ、則ち、悖亂にして治まらず。古は聖王、人の性惡なるを以て、以爲へらく、偏險にして正しからず、悖亂にして治まらずと。是を以て之が爲めに、禮義を起し、法度を制して以て、人の情性を矯飾して之を正し、以て人の情性を擾化して之を導けり。皆治に出で、道に合せしめんとせし者なり。(性惡篇)

荀子は進んで禮の起源を詳論して曰く

禮は何に起るや。曰く、人生るれば欲するあり、欲して得ざれば則ち、求むる無きこと能はず。求めて度量分界無ければ則ち、争はざること能はず。争へば則ち亂れ、亂るれば則ち窮す。先王は其亂を惡む。故に禮義を制して以て之を分ち、以て人の慾を養ひ、人の求めを給し、欲をして必ず、物を窮めず、物をして必ず欲に屈きざらしむ。兩者相持して長し。是れ禮の起る所なり。故に禮なる者は養なり。芻、豢、稻粱、五味、調香は口を養ふ所以なり。椒蘭、芬苾は鼻を養ふ所以なり。彫琢、刻鏤、黼黻、文章は目を養ふ所以なり。鐘鼓、管磬、琴瑟、竿笙は耳を養ふ所以なり。疏房、櫺貌、越席、牀第、几筵、体を養ふ所以なり。故に禮なるもの養なり。君子は既に其養を得、又其別を好む。曷をか別と謂ふ。曰く貴賤等あり、長幼差あり、貧富輕重皆稱ある者なり。(禮論篇)

孟子は、性善論を持して、惡の出所に窮し、荀子は、性惡を唱へて、善の出所を聖人に求む。焉んぞ知らん、聖人もまた、人に過ぎざるを。此點、荀子の論にも、破

綻の免れざるものあり。想ふに、人の性は、善とか惡とか判明に決す可く、固持す可きものに非ずして、頗る柔軟性のものと見る可きか。

次に荀子は禮に三本ありと云ふ。

禮に三本あり。天地なるものは、生の本なり。先祖なるものは、類の本なり。君師なる者は、治の本なり。天地無くんば、惡んぞ生せん。先祖無くんば、惡んぞ出でん。君師無くんば、惡んぞ治まらん。三つの者、偏亡すれば安人無し。故に禮は、上は天に事へ、下は地に事へ、先祖を尊び、君師を隆ぶ。是れ禮の三本なり。(禮論篇)

天を機械的に見たる荀子が、こゝには之れを禮の三本の一に數ふるは、前後矛盾の感なき能はざるも、何れは人工的のものと見たる彼れの思想よりすれば、必ずしも無理とは云ふ可からず。禮の權威を立つる、必要上より來れるものと、見逃がす可きか。

凡そ禮は祝に始まり、文に成り、悅に終る。故に至備は、情文俱に盡し、其次は情文代る／＼勝ち、其下は情に復して以て大一に歸す。天地以て合し、日月以て明かに、四時以て序し、星辰以て行く、江河以て流れ、萬物以て昌んに好惡以て節し、喜怒以て當る。以て下なれば則ち順、以て上となれば則ち明、萬物變じて亂れず、之を貳<sup>はな</sup>るれば則ち喪ふ。禮豈に至らざらんや。(禮論篇)

荀子はまた、支那にては稀れに見る心理的見解ありたる學者にして、正名篇、解蔽篇を讀めば、彼れの心理、論理の思想を窺知するを得可し。彼れは智情意三作用を認め、意を慮と謂ひ三作用中最も重きを置けり。則ち晩近の意志本位説に類す。彼は此意志作用に依て、事物の是非曲直を斷定するものを心と稱し、此斷定力と智的能動力の積習して成れるものを偽と稱す。此積習力こそ或は、欲望を制して其狂態を防ぎ或は、欲望を追求して中庸を得しむる作用とせり。則ち此意志作用は、一切の心理作用を統轄する樞府と見る。

心理の自然を、觀察するに敏なる荀子は、老莊始め、孟子迄も、修養の第一要素として唱へたる、無欲又は寡欲に對して、駁論を試む。

凡そ治を語りて、欲を寡くするを待つ者は、以て欲を節することなくして、欲多きに困む者なり。欲有ると、欲無きとは、異類なり。生死なり。治亂に非ざるなり。欲の多寡は異類なり、情の數なり、治亂に非ざるなり。(正名篇)

此は明かに、欲望の有無は、決して治亂の分る、所以に非ず。有欲と無欲とは、人の生死の如く相違するものにして、苟も、人間なる以上、無欲なるを得るものに非ず。欲は決して惡に非ず、之を矯節すれば可なり。欲あるが爲めに亂れ、欲なきが爲めに治まると云ふ如きは、人を驅つて死に面せしむるものなり。「心の可とする所、理に中れば、則ち欲多しと雖も奚ぞ、治を傷けん」と。欲の多少は決して、治亂の分る、所に非ず、心に中心的統一ありて、能く之れを調節するを得ば、欲の多き、必ずしも憂ふるに足らずと看破せるもの、卓見と云ふ可し。

要するに荀子は、傳統に捕へられずして、凡ての事を正視して、合理的に解釋せんとしたるもの、諸子百家中、他に殆んど其類例を見ざるなり。

## 第四章 墨子及韓非子

### 第一節 墨子

老莊の清談主義は、動もすれば虚無主義に陥り、現實社會を重視せずして、隱栖主義となり、獨善獨高主義となる。孔孟の教は、極めて現世主義にして、常識を重んじ、人情に本く所、以て人倫道德を鼓吹するに適するも、其國家政治を論ずるに及んで王道主義は、理想に走せて實情に適せず。獨り、荀子は、儒家者流に屬するもの、中、頭腦極めて合理的にして、一異彩たるを失はず。

されど概括的に云へば、儒家者流は形式文明に墮し、虚飾虚禮を生み、後世所謂官僚風なるもの、色彩最も濃厚なり。此等弊害を看破して、堂々反對の旗色を鮮明にせるものは、墨子なり。

墨子、名は翟、孔子と同く魯の國の人にて、孔孫子思と殆んど同時代なり。能く當時社會の實狀を正視して、其の救済策を科學的に立せんとするの熱誠は、大に天下を衝動せるものと見え、先秦時代の思想界を二分して、儒家と覇を争ふ。韓非子も、「世の顯學は儒墨なり」と云へり。孟子も一代の雄辯を振つて、楊墨の攻撃に全力を盡せり。

墨子は自己の學説を立つるに當ては、常に彼一流の論證法を用ひたり。以て彼の合理的精神を見る可し。則ち彼は本、原、用の三標準を用ひ、之を三法又は三表と云へり。第一の本は即ち、議論の本づく所と云ふ意味にて、彼は天鬼及古聖の事蹟を標準と爲す。彼想へらく、天は最高の標準なり。何とならば天は萬物を創造し且

つ、之を監督し賞罰するものなればなり。加之、天には亦志向あり。則ち天は義を好み、不義を惡む。天は萬物を自ら創造せしものなれば、之れに對して其安全幸福を望むは、當然のことなり。さればこそ、義能く行はるれば、天下國家は榮え、不義横行すれば、天下國家は亂るゝなり。

第二の原は、原ぬるの意味にて、此は二様に分る。一には、其事を先王の書に徴する、二には百姓耳目の情に察する。一は演釋的なり、二は歸納法なり。

第三の用は、之れを天下國家の政治に運用するの意味にて、之れを運用して能く國利、民福を増進すれば、其論は正當とす可し。則ち第三は歸納的論證法なり。

墨子の天論は、支那古來の目的觀を、一層理想觀たらしめたるものなるが、彼は天のみならず、鬼の存在をも論證せんと試みたり。鬼神には天神、地祇、人鬼の三種あり。此論證にも彼は例の三法を用ひたり。第一に古聖王は、宗廟社稷の祭祀を非常に重んじたり。鬼神の存在を信せずしては、如何んぞ此の如きことを爲さんや。

第二に之を古聖の書に徴するに、何れも祭祀を謹み鬼神に仕へたる事蹟歴然たり。

夏殷周三代の古典、何れも鬼神を言はざるものなし。又之を百姓耳目の實に考ふるも、鬼神を信せざるもの殆んど無し。第三に鬼神ありて天を助けて、人生を監督し賞罰するものと爲す時は、天下能く治まり、民福増進す。之れに反して、鬼神なしとて、官民其行を慎まざる時は、天下國家は亂るゝよりすれば、鬼神は存在するものと爲す可きなり。

さて墨子は、天を最高の標準とし、天は義を好み、不義を惡むと云ふ。其所謂義の内容は、兼愛交利なり。實に墨子の兼愛説は、彼の學説の眞髓にしてまた、大に異彩を放てる論なり。儒教の仁は愛の理なれども、義を條件となす。則ち愛の施行に付き、順序次第なかる可からずとなす。先、己れの親を愛して然る後に、他人の親に及べと云ふなり。然るに墨子は兼愛を説く。別愛するが故に天下國家は亂るとなす。

人の國を視ること、其國を視るが若くし、人の家を視ること、其家を視るが若くし、人の身を視ること、其身を視るが若くす。是故に諸侯相愛すれば則ち、野戦せず、家主相愛すれば則ち、相篡はず、人々相愛すれば則ち、相賊はず、君臣相愛すれば則ち、惠忠、父子相愛すれば則ち、慈孝、兄弟相愛すれば則ち、和調す。天下の人皆相愛すれば、強は弱を執へず、衆は寡を劫さず、富は貧を侮らず、貴は賤に敖らず、詐は愚を欺かず。凡そ天下の禍篡、怨恨、起るなからしむ可きものは、相愛するを以て生ずるなり。是を以て仁者は之を譽む。

想ふに墨子の兼愛説は、キリスト教の博愛説と、略相似たるものにして理想としては、最も高尚なるも、之を實現せんことは、人性を改造するに非ずんば不可能なり。因に云ふ、キリスト教の博愛は、信神の證據となるなり。隣人を愛するは即ち神を愛する所以と見るなり。そこに敬神の意あつて、功利の意なし。然るに墨子の兼愛は、功利的の意多し。兼愛することが、相互に利する所以なるが故に、兼愛す可

しと云ふの意味多し。己を愛するが如く、他人を愛せば、他人もまた己を愛すれば、こゝに争闘起らずして、福利至るとするなり。想ふに墨子の兼愛説は、社會改良論上の、主義主張と見る可きものか。彼は形式的、繁文褥禮の官僚政治は、民衆幸福の敵なりと見たるなり。今日の社會主義の如き、極端なる説には非ざるも、墨子は社會の實狀を正視して、其の弊の由て來る所を察して、別愛にありとて、兼愛説を唱へたるなり。但、孟子が、墨子の學は父を無みするものと駁撃せるは當らず。兼愛は兼愛にして、人の親を愛するが爲めに、自分の親を愛せずと云ふには非ず。唯差別愛の爲めに、世は徒らに生存競争、修羅の巷と化するを以て、差別愛を徹して兼愛すれば、天下萬民幸福となると云ふなり。事實之を實現し得れば、地上に天國を現出するや必せり。故に道徳政治の最高の理想としては、甚だ尊敬す可きも、其實現の不可能なる故に、空論の誹あるを免れざるのみ。尙、墨子が兼愛説の當然の成り行きとして、非戰論を唱へたるは云ふ迄もなし。彼は戰爭は、百害あつて一

利無じと見たり。

墨子は、當時社會の一部、官僚の奢侈甚だしくして、一般民衆の窮乏悲惨の状を見、彼一流の社會平等觀よりして、大に僅儉節約を説けり。彼は衣は以て寒を防げば足る、食は以て飢を慰すれば足るとし特に、支那古來の弊害の大なる厚葬重喪の風を改良せんとせり。其説く所は、常識的に首肯す可きものなり。唯彼が節約を説くの餘り、藝術を以て、無用の長物として排斥せるは、角を矯めんとして、牛を殺すの結果に陷ゐれるものか。

天を機械觀せる老莊一派が、動もすれば、宿命論に陷ゐるの憂多きは、當然のことなるが、墨子は理想觀を採れるものから、非命論を唱へて、人生の事は、修養努力に依て、福を増し、災を轉じ得るものと論せり。

## 第二節 韓非子

墨子の社會主義的、功利的學説を立てたるに對して、國家主義的、法治論を立てたるものは、韓非なり。彼は李斯と共に、業を荀子の門に受けたり。秦王は韓非の孤憤、五蠹の書を見て大に其才筆を歎賞し、「寡人此人を見て、之と與に遊ぶことを得ば、死すとも恨みず」と迄云へり。後韓非は、韓の使者として秦に行きしが、李斯は其學才を恐れ、秦王に見えしめずして、遂に之を殺せり。韓非は、人となり口吃にして道説する能はず、其文章は頗る該博にして卓見少なからず。

さて韓非の學説の根據は、荀子の性惡論にあり。彼は人間の利己的なるものなることを、徹底的に看取し、此利己的動物を治むるには到底、禮の如き手緩るきものにては不可なり。宜しく法の力に依る可しとせるなり。彼は彼一流の法治論を主張せんが爲めに先、儒家者流の德治主義の無力なることを痛罵せり。

仲尼は天下の聖人なり。行を修め、道を明かにし、以て海内に遊ぶ。海内其仁を説び、其義を美とす。されど爲めに服役する者は七十人のみ。蓋し仁を貴ぶもの



は寡く、義を能くするは難きなり。故に天下の大を以てして、爲めに服役する者七十人にして、仁義を爲すものは一人のみ。魯の哀公は下君なり。南面して國に君たれば、境内の民敢て臣たらざるはなし。民は固より勢に服す。勢は誠に以て人を服し易し。故に仲尼反て臣となり、哀公顧りて君となる。仲尼其義に懐けるに非ず、其勢に服せるなり。(五蠹篇)

彼は又比喩を以て徳治主義者を冷笑せり。

昔者、宋國に一農夫あり、毎日野に出て、田を耕して餘念なかりき。然るに一日兔あり、走り來り過つて、田中の切り株に觸れて死す。農夫之れを見て大に喜び、翌日より田を耕すことを止めて、終日切り株を見守り、兔の之れに觸れて死なんことを待つ。幸運亦と來らず、村人の笑となる。儒墨の説の如きは恰も、此宋國の農夫に比す可きか。要するに極めて守株の説たるを免れず。今の世に徳治主義を實行して、天下の治まらんことを希ふが如きは、切り株を守つて、兔を得んとするに等

し。かく痛快に、徳治主義を罵倒したる後、彼一流の法治主義を披瀝す。

民を治むるに常なし。唯治むるを法となす。法、時と轉すれば則ち治まる。治世と宜しければ則ち功あり。(心度篇)

夫れ聖人の國を治むるは、人の吾が爲めに善なるを恃まず。而て其非を爲すを得ざるを用ふるなり。人の吾が爲めに善なるを恃まば、境内什もて數ふ可からず。人の非をなすを得ざるを用ひば、一國齊しく治をなさしむ可きなり。(顯學篇)

さて彼は、此法の實行を期するが爲めに、重刑論を採用せんとせり。されど彼の重刑論は、商鞅の如き極端なるものには非ずして、刑罰の根本義を、良民の法護に置けり。

聖人の民を治むるは、本に度り、其欲を從ほしにせず、民を利するを期すのみ。故に之に刑を與ふるは、民を惡む所に非ず。愛の本なり。刑勝ちて民靜かに、賞繁くして姦生せず。(心度篇)

法術を釋て、心治せば、堯も一國を正す能はず。規矩を去りて、妄りに意度せば、奚仲も一輪を成す能はず。(用人論)

人民に對して、重刑論を採用せる彼は、君主に對しては、法の運用を誤まらざらしめんとす。則ち君主たるものは、自己の主觀を以て、法に加ふることは大害あり。君主たるものは、靜虛自然にして、其好惡を臣下に見透かされざるを要す。しからざれば、姦臣の乗する所となり、私情に依て法を枉ぐるに至りて、法の神聖を害す。桃左春秋に、人君の病みて死するもの、半に居ること能はずとあり。即ち人君の半以上は天命を以て終らずして、弑殺されたるを云ふなり。羅馬帝政の末期も、此事實を證す。韓非は此點を非常に重視し、臣下を重人或は重臣と云ひ、之れを酒屋の猛狗に喩ふ。酒舗あり、銘酒を賣れるに、一人の顧客なし。其故は其酒舗に犖猛の番犬あつて、顧客到る時吠ゆればなり。之れと同く、人君が天下の賢臣を求むるも重臣又は重人の爲めに阻止さるゝを以て、賢者は進む能はず。彼は又人君の左右の

臣を、社鼠に譬へたり。社殿の新築成れるに、何時の間にか鼠棲み込む。鼠を取る爲めには、燻べざるゝ可からず、燻ぶれば、折角の新材を汚す、さりとして、水を流せば折角の剝漆が剝落するの憂あり。誠に始末に困るものなり。

韓非は、天下に八姦ありと云ふ。同牀、在旁、父兄、養殃、民萌、流行、威張、四方を云ふ。同牀は婦人などを指す。在旁は俳優、侏儒の徒を指す。父兄は近親なり。養殃とは、君主に奢侈をすゝめ、民税を多くする爲めに、民の怨を買ふを云ふ。民萌とは、重臣が私恩を賣りて、民心を收攬して、君主の權力を奮はんとするなり。流行とは、世間の評判と云ふ意にて、自己の利益の爲めに、重臣などの辯士を利用するを云ふ。威張とは、壯士などを養ひ、己れの勢力を恐れしむるを云ふ。四方とは、四方の諸侯を指すものにして、巧に交際して外國の歡心を買ひ、利己に資せんとするを云ふ。此等は皆、臣下の利用せんとする所のものなれば、君主は之れに乗せられざるやう、注意す可しと云ふ。

されば君主は、臣下を統御するには、二柄を失ふ可からず。二柄とは刑と徳なり。即ち刑罰と恩賞となり。此二柄を確實に君主の手中に握り居れば臣下の統御は困難ならず。

韓非又想へらく、國家の政治には、法と共に術を要す。術とは人才を識別して、適才を適所に置くを云ふ。韓非は此術を參驗。參伍又は形名參同と云へり。天下に名聲あるもの必ずしも、實際的の手腕ありと云ふ可からず。能く其實蹟を參驗して然る後、採否を決せざる可からず。韓非は此參驗法を、人物の採用に適用したるのみならず、學說の眞否をも之れに依らざる可からずとせる邊は、彼の科學者の態度ありしを想見す可し。彼は儒墨二教の學徒共が、口を開けば堯舜を唱へ、堯舜の道を、三千年の前に審かにせんとするを笑ふて曰く、

殷周七百餘歲、虞夏二千餘歲にして、儒墨の眞を定むる能はず。今乃ち堯舜の道を三千歳の前に審かにせんと欲す。意ふにそれ必ず可からざるか。參驗なくして

之を必ずする者は、愚なり。必ずする能はずして、之に據る者は、誣なり。故に明かに先王に據り、必ず堯舜を定むる者は、愚に非ずんば則ち誣なり。(顯學篇)

韓非は大に實用を貴び、空理空論の徒を排斥せり。苟も遊俠の徒を養ひ、口舌の人物に富貴を與へんか、苦勞して生産に従事し、心身を擲て、死生の巷に出入するものあらんや。「兵の益々弱き所以は、戰を論ずるもの徒に多くして、甲を被るもの少なきに由るなり」とは、實に能く穿てり。

## 第五章 秦漢より唐代に至る思潮

### 第一節 黃老思想と五行說

支那の思想界は、先秦時代を最盛とし、秦漢以後五代に至る迄は、全く萎微振は

ず、先秦時代の糟粕を嘗むるに非ずんば、民間迷信の提燈持を爲すに過ぎず。唯後漢以後、佛教傳入して、支那思想界に、他日一波瀾を巻き起す原因を爲せるあるのみ。

秦の始皇、天下を一統したる威壓力に依り、帝王權の絶待性を確立せんとし、學者の自由論議を惡むの餘り、遂に天下の書を焼き儒を坑にするの暴舉を敢行したるも、阿房宮内には、竊に天下の圖書を收藏せりと云ふ。然るに秦亡び、漢、楚天下を争ふの際、阿房宮兵火に跡なくして、古書は殆んど全く煙滅し終り、こゝに、文藝界の暗黒時代を生じたり。されど、支那の天地は甚だ廣し、たとへ、始皇の嚴罰主義に戰慄せりと云へ、古書の全部を焼き盡すと云ふが如きことは、事實上爲し遂げ得るものに非ざれば或は、壁中に或は、寺院の古庫中に、古書を發見して、次第に社會に廣められたる可きは、當然のこと故、秦火の厄のみの爲めに、以後の支那の學問界が、萎微せりと云ふ可からず。然らば、先秦時代に、彼れ程盛大な

りしものが、何故、以後に衰微したりやと云ふに、余は其最大因を帝王權の強大に歸せんとす。則ち、秦、漢以後は大體上、封建制度廢せられて、郡縣制度となり、帝王の權力次第に強大となり、また、自由競争の面影無くなりしたため、其思想界は非常に單調となり、學者は皆御用學者となりて、上流の意志を迎合するのみ。

さて、漢の高祖、天下を一統してより、十餘年を経、惠帝に至り、始めて始皇の布きし挾書の律を廢し、文帝、景帝大に學問を獎勵し、一經専門の學興り、毛公は詩經、歐陽生は書經、戴德は禮記と云ふ風に、各々師傅を守つて、唯經書の訓詁を傳ふることを、畢生の事業と爲せるは、南歐ルネサンス時代、學者は希臘、拉典の古書を讀解するを以て、唯一の光榮と考へたと同じく、また、止むを得ざるの順程と云ふ可きか。武帝に至り、五經博士を選定し、大學を設け、董仲舒の如き大儒も出で、文教復興の運に向へり。則ち儒教が、支那の國教たる地位を得たるは此時代なり。然るに哀帝、平帝に至り外戚王氏專權し、學者之れに阿ねるよりして、

識緯說即ち、未來記の如きもの起る。後漢の明帝に至りて、佛教傳來し、支那の思潮界に一大劃期時代を作れり。

大体上より云へば、漢以後は官學としては、儒教採用獎勵せられたるに拘はらず漢より唐初に至る迄は、黃老の學即ち、道教の思潮、一般に勢力を得たるものゝ如し。其因由如何。想ふに、戰國時代より、漢楚の爭覇に至る長き間、支那の社會民衆は、文字通り塗炭に苦みたれば、何よりも先、安寧休息を切望せり。それには、無爲自然主義の黃老主義は、窮屈なる儒教主義よりは、歓迎せらるゝ所以なりしならん。漢の高祖の秦軍を破つて、關中に入るや、父老と法三章を約す。殺人者死、傷者及盜抵罪と云ふにて、他の一切の秦の苛政苛法を除く。古來是れ程簡單なる法律はなく、大に黃老の主義に似たり。此簡易主義が大に、當時の民心に歓迎せられたるもの、高祖の天下一統に與て、大關係あり。高祖は元來、一木強漢にして、村長位の者より、身を起したるものなれば、學問などに、敬意を拂ふ人物には非ざり

き。乃公馬上に天下を得たり、又何ぞ詩書を事とせんぞ豪語し、儒者の冠を着するものを見れば、之を叩き落し、それに小便せる程の蠻的人物なりしが、陸賈は能く之れを教へて、次第に儒教に心を向はしたる程の學者なるが、其陸賈すら、其著新語に於て、政治の根本は、無爲にありとし、無爲を以て道の基なりと説けり。司馬談の如きも、陰陽、儒、墨、名、法、道德(黃老學)の六家は一長一短あり、と爲せるに拘はらず、獨り老子の學は、完全無缺にして、時と共に移り、物に應じて變通の妙あり、俗に立ち、事に施して、宜しからざるなく、指約にして操り易く、事少くして功多しと云へり。當時黃老の代表的學者は、淮南子なるが、之れに對抗す可き、儒者の代表、董仲舒さへも、春秋繁露の中に、人主たるものは、無爲を以て道となす。志は死灰の如く、形は委衣の如く、精を安んじ、神を養ひ、寂寞無爲と説けり。以て當時、黃老思想の盛んなりしを、推想す可し。

黃老思想は、戰國の末より、燕、齊地方に起りし神仙説と混合して、強き迷信の

本となれり。秦の始皇の如きは、徐福の詭辯に乗せられ、童男童女五百人を船に乗せ、蓬萊山に神仙不死の靈藥を求めしめたり。漢の武帝なども、此藥を求めたり。元來黄老派の思想は、儒家とは異なり、頗る空漠的性質のものにして、列、莊に至ては形容、比喩の餘りに巧みなるものから、空想と事實との區別明瞭を缺き、且、修養次第にて、人間即神仙の境に達し得るとせるより、遂に俗間の神仙説に歡迎さるゝに至り、後漢に佛教の傳來するに及んでは、小乘的厭離穢土の思想も混入して遂に一種の厭世的的人生觀を築き、生は寄なり、死は歸なりと觀じ、現世を漠視するの思想となれり。

神仙説と共に盛んになれるは、讖緯説と、五行説なり。讖は未來を豫知すること云ひ、緯は經に對する語なり。讖緯の説に似たる事實は既に、周の武王の時代にもあり。則ち武王紂を討たんとして、黄河を渡れる時、白魚躍て船に入る。侍臣之れを以て、天命の武王に降れる兆なりとす。此の如きは、英雄人を欺くものならん

か、漢代に至て、かゝる事を、受命の符と云へり。それが彌、文字となりて明かに何々と書かるゝに至りしは、王莽の、天下を奪はんとせる時に初まる。則ち當時、武功の井の中より、石の白きもの堀り出さる。其石に丹書して、告安漢公莽、爲皇帝と云ふ。漢書には、符命の起る、此より始まるとあり。此讖緯の學は、後漢に至て益々流行するに至れり。後漢の光武帝も、劉秀即位と云ふ讖文に依て、帝となりしなり。

此讖緯學と呼應して、前後漢時代四百年を通じて、流行せるものは、陰陽五行説なり。陰陽家は、戰國末の鄒衍、鄒爽に初まる。もとは易に基き、曆を定めたるものなるが、次第に迷信を伴ふこと多く、司馬談も、陰陽の術は、大祥にして忌諱衆し。人をして拘泥、畏るゝ所多からしむ。然れども、其四時の大順を序するは、失ふ可からずと云へり。鄒衍、鄒爽の説く所は、五行相勝説にして、五行の順序を土、木、金、火、水と爲し、木は土に勝ち、金は木に勝ち、火は金に水は火に勝つ。王者

の天下を治むるは、此五行相勝の順序によりて、後の王朝は、前の王朝に打勝ち、取て代はる。例へば、虞は土徳を以て天下に王たり。夏は木徳を以て、之れに勝つと云ふが如し。此相勝説に對して、漢代には、五行相生説を生ぜり。此は後の王朝は、前の王朝より、生み出さるゝものと爲す。則ち木、火、土、金、水と互に相生すと説く。此五行相勝とか、相生とか云ふ説は、初めは、帝王の交代にのみ、適用せられたるものが、後には、時節、方位、衣食住あらゆる方面に配當せらるゝに及んで、迷信益々多くなれり。支那後代の迷信は、此陰陽五行説に關聯せざるものなく、其れが日本にも傳はり、三世相などの迷信をも生じたり。

さて、漢代を代表する學者は、前漢にては、淮南子、董仲舒及楊雄にして、後漢には王充あるのみ。

淮南子は、老莊派の人物にて、別に卓見なきも、大我、小我の觀念に基き、天地と人身との類似を詳説せる所、當時流行の、陰陽五行説の影響を、受けたるを見る

可し。即ち彼の考によれば、人の精神は、之れを天に受け、形骸は地に稟く。頭の圓きは天に象どり、足の方なるは地に象ざる。天に春夏秋冬の四時と、木、火、土、金、水の五行と、八方と中央との九解及び一年三百六十六日あれば、人にもそれに象どりて、四肢、五臓、九竅、及三百六十六の關節あり。天に風雨寒暑あれば、人にも取、興、喜、怒ありと。

董仲舒は、淮南子と同時代の人にして、春秋學に本づきて、天人の道を述べ、孔子を尊んで、諸子百家を禁せんことを論じ、其蘊善を傾注せり。彼れの學説にも、卓見はなしと雖も、五常の道を論じて、儒教の徳目を、完備ならしめたるは、彼の功なり。されど彼れの説も、淮南子と同一、五行説に拘泥せる所甚だ多し。

楊雄は、人性論に於て、善惡混すの説を立て、其善を修むれば、善人となり、其惡を修むれば、惡人となる。氣は、善惡に之く所の馬なりと述べて、修養論に、一新説を立てたり。則ち彼は、人の善となり惡となるは、氣の作用なりとせるなり。

彼れが、當時流行の、陰陽五行説に捕はられざりしは、卓見と云ふ可し。

こゝに、前漢時代に特筆す可きは、談、遷父子の史學上の貢献なり。思想界に於て、一人の卓越者をも有せざりし前漢に於て、歴史家として談、遷父子を出したることは、誠に珍とす可し。

司馬遷は、史記の著者なり、史記は、文辭卓絶なるのみならず、列傳体歴史の開祖たり。否、獨り列傳体歴史の、初を作れるのみならず、二千年の昔、早く已に、今日の文化史、經濟史に取扱ふ所のもの迄、編述せり。其上又、儒家一流の偏見を去り、社會的記事の網羅に努力せるが如き、其識見高尚にして、規模の遠大なる、秦西史家と雖も、匹儔を得ること困難なり。遷は龍門の人、父の司馬談は、太史公たり。遷は、二十歳にして南、江淮に遊び、會稽に上り禹穴を探り、九疑を窺ひ、沅湘に浮び、北は汶酒を涉りて、業を齊魯の都に講じ、夫子の遺風を觀て、鄒嶧に郷射し、薛彭城に困み、梁楚を過ぎて、歸り仕へて郎中となれり。西南印、笮、昆

明の遠征起るや、遷も從行し、歸途に、父を河雒の間に省みたり。時に父の病危篤なり。遷の手を取り泣て曰く、予が先は、周室の太史にして、上世より名を顯はせり。今天子千歳の統をつがんとして、泰山に封せんとし、予其行に従ふを得ず。これ命なるか。予死せば、汝必ず太史とならん。太史とならば、吾が論著せんと欲する所を、忘るゝこと勿れと。遷遂に父の志を繼ぎ、十二本紀、十表、八書、三十世家、七十列傳を大成して、上は陶唐より、下は武帝に至る。本紀は、帝王の事蹟を叙し、世家は、諸侯の沿革を記し、列傳は、名臣及偉人の傳を述ぶ。表は、史上の事蹟を一目瞭然たらしめ、書は、禮樂、兵制、刑政、天文、貨食等に關することを記す。全書百三十篇、五十二萬三千五百字、其体裁は、遷の獨創にして、後の正史は皆、之れを標準とせり。實に、漢代文化の、唯一の大産物と云ふ可し。

史記の伯夷傳は、遷が伯夷を假りて、自己の人生觀を叙し、俯仰感慨の妙を極め天道是か非かと叫ぶ。孔子を叙しては、幽玄高大を極め、項羽、沛公を叙しては、



英雄の面目を躍如せしむ。しかも最も能く其人生觀を現はせるものは、太史公の自叙及論贊なりとす。實に遷は、能く父談の後を受けて、獨力古今を網羅し、叙する所、上下茫々三千年、聖君、賢相、英雄、佳人、鴻儒、碩學、遊俠、貨殖、刺客、辯士等に至る迄苟も、遺事遺文の採る可きものは、悉く彼の大鑄爐中に鎔融して、形態化せられざるなし。嚴正なる意味の歴史としては、缺點多からんも、歴史文學としては、恐らくブルタークの英雄傳に優り、支那古今其比なし。

王充は、後漢を代表する唯一の學者にして、支那には珍らしき、科學的自然觀を有したる人物にして、其著論衡は、當時上下の社會に流行せる、あらゆる迷信を打破して、痛快を極む。彼れの根本思想は、宿命說に傾けるものゝ如し。

さて、後漢亡びて、三國時代となり、それより晉に一統せられて後も、老莊思想は天下を風靡せり。其代表的のものは所謂、竹林の七賢、清談の徒なり。院籍、山濤の徒、名を清談に假ると雖も、實は酒に隠れ、禮儀を無視せることは、今日の

インテリのデカダンと選ぶ所なし。

隋に至て、一の文中子王通あり、政治論としては、萬機公論に決せんとする、衆議制度を是認せるも、其王道論は、復古主義の域を脱せず。倫理說としては、五倫五常説を採りながらも、老莊の思想を懐き、死生を一にし、得喪を忘るゝものを至人とし、坐忘の域に達するを理想とせり。

以上叙述せる所を概観すれば、秦漢以後唐初に至る迄は、儒道二教並び行はれ、實質的には、老莊盛んなるが如きも、形式的には、儒教は、士君子の尊敬を拂ふ所なりき。特に武帝以後はたとへ、表面的に過ぎざる場合なしとせざるも、儒教は支那の國教たる勢を成して、孔子の、述べて作らずの尙古主義は、孔子を加へて益古聖に重く、温故知新は名のみにして、知新の實全く擧らず、學術の進歩停頓して約千五百年の長年月、學者は、古書の糟粕を嘗むるのみにして、又新說の見る可きものなし。唯後漢以後、佛教傳來し、唐に至て、漸く盛んに、玄奘三藏、新譯佛典の

權威となりて、こゝに、天臺の智者大師、華嚴の賢首大師、淨土の善導大師などの大徳、支那に輩出して、大乘佛教の眞髓却て、印度に亡はれて、漢土に榮ゆるに至り、儒學者を以て任ずるものも、窃に佛典に親み、其高尚精深なる思想を移し來て自家藥籠中のものと爲さんとするもの多く、遂に宋代に至て、理氣の説盛んに起り周濂溪、邵康節、張橫渠、程明道、程伊川の大家を輩出し、朱晦庵出で、之を集大成し、こゝに支那に初めて、純正哲學の建設を見たるなり。

## 第二節 唐代の學制

唐代の學制は、それが何處迄實行せられたるかは別問題として、恐らく支那の學制の、最も完備せるものなれば、其要領を次に記せん。

唐は國子監を設けて、一切の學政を統轄せしむ。監長を國子祭酒と云ひ、副監長を司業と稱す。其監下に六學あり。國子學、大學、四門學、律學、書學及算學是なり。

り。國子學は、定員三百名、三品以上、從二位以上の曾孫を入學せしむ。大學は、定員五百名にして、五品以上の子孫及三品の曾孫を入學せしむ。四門學は、定員千三百名にして、七品以上の子孫及庶民の優秀なるものを選びて入學せしむ。律學は定員五十人、書學は三十人、算學も二十人にして、何れも、八品以下の子及庶民の其事に通ずるものを入學せしむ。入學年齢は、國子學、大學、四門學は何れも十四歳以上十九歳以下とし、律學、書學、算學は十八歳以上二十五歳以下とす。此外、皇族及顯官の爲めに、弘文館及崇文館を設けたり。其學制の、階級制度に依れるを見る可し。學科は、國子學、大學、四門學は何れも、大經、中經、小經の三種に大別し禮記、春秋左氏傳を大經とし、詩、周禮、儀禮を中經とし、易、春秋公羊傳、春秋穀梁傳を小經とし、此外に、孝經、論語等を兼修せしむ。また時には、時務策として、國語、說文、字林、三蒼、爾雅等を學ばしむ。律學は、律と令とを課し、書學は、石經三体、說文、字林を課す。算學の科目は、孫子、五曹、九章等にして孫子

算經は、分數より求積迄を説き、五曹算經には、吏員に必要な實用上の算法を集む。九章算經には、度量衡と代數、幾何の一斑説かれたり。

各學校毎に博士あり、助教あり。考試に依て、學生の學力を考査す。考試には、旬試と歲試とあり。毎年仲冬に、成業者を尙書省に送れり。

一種の官吏登用法なる、科擧の制も、唐に至て完備せり。是れ實に、支那文化の上に、至大の關係あり。科擧は、尙書省之れを行ふ。之れに應ずるものには、學校の生徒と、郷貢との二種あり。科擧は秀才、明經、進士、明法、明字、明算等の諸科に分る。秀才は、方略策五道を試み、明經は、每經十條、經策十條を試み、進士は時務策五道、雜文二篇を試む。科擧に及第することは、青年の登龍門なれば、學生は之れを唯一の目標として、修學するに至れり。其爲めに、學問の自由研究の風衰へ、遂に科擧は文化の災厄となる。太宗の、五經正義を撰定して以後は、經學の解釋は皆、之れに依らざる可からざるの運を作り、學者は之れが暗誦にのみ、力を盡

すに至れり。又科擧に於ては、文章を重んじ、聲韻の巧妙を競はしめられたれば、詩文の美は、唐代を第一とす。此科擧は清代の末迄行はれ、積弊非常に多かりしも、遂に改むる能はず。支那文教の衰退の一大原因となれり。科擧の行はるゝ時には、受験者は、一人毎に僅三尺四方位の小室に入れられて、答案の作製に心血を絞れるなり。されば科擧に關する悲喜劇甚だ多し。

尙、唐代には、科擧の外に、制擧あり。特別任用法にして、天子親臨して、選拔す。想ふに一代の大學者を試みたるなる可し。

唐時代の思想界に、最も勢力ありしものは、云ふ迄もなく、儒教、道教、佛教なるが、當時の道教は、道士なるものありて、民衆迷信の鼓吹者となれる位にて、學問上、何等貢献するものなし。儒教も、陸德明、孔穎達、顏師古など出でしも、依然として訓詁學を墨守するのみ。唯文章家に、韓愈、柳宗元あり、詩人に李白、杜甫、白樂天を出し、遂に上下五千年、李唐を以て、文學の最盛を歌はしむるものあ

りき。されど、儒教の理論的方面に至ては、一人の卓出せるもの出でず。獨り佛教は、滔々として支那思想界に、萬丈の氣を吐けり。韓愈の佛骨の表の如き、其思想の幼稚なる、全く日を同ふして論ず可かららず。

## 第六章 朱、陸及陽明

### 第一節 朱子

支那の學術は、宋に至りて、先秦時代以來始めて、精深の域に達せるものなるが其特色は、理氣、心性の研究にして、理氣は即ち、實在の研究にして、純正哲學上の本體論なり。心性は即ち、心理、倫理の研究にして、前者は、佛教に沈思せる思想を以て、老莊、易擊辭傳の觀念を取扱ひ、儒教的宇宙觀を、建設せるもの、後者

は、佛教特に、禪宗の心性觀を假り來て、古來の性說を、學理的に究明せるものなり。されば、宋學は、儒佛道三教の、內面的に、渾然溶融して、一新機を出せるものと云ふ可く、其何處迄も、現世的なる所は、支那思潮の特色を、變せざりしを見る可く人間の性、情を研討して、精細を極めたるは、世界の一異彩たりと、斷言して憚らず。

周濂溪は、宋儒理氣說の開祖と云ふ可き地位の人にて、爲人灑落にして、光風霽月の如し。恐らく、禪的修養に、洗練せられたる結果ならんか。其作、愛蓮說は、人物を表示するを以て有名なり。太極圖說、通書二卷の著作は、精細を極む。

周濂溪によつて、一度闡明せられたる理氣、心性の研究は、邵康節、張橫渠を経て程明道、程伊川に至りて、研究彌々進み、遂に朱子に及んで、集大成せられ、支那の哲學、倫理學は、こゝに最高潮に達したり。

孔子の死後、千六百年を経て、支那哲學の大宗、朱子生る。五歳にして學に就